

「講談社　青い鳥文庫」刊行のことば

太陽と水と土のめぐみをうけて、葉をしげらせ、花をさかせ、実をむすんでいる森。小鳥や、けものや、こん虫たちが、春・夏・秋・冬の生活のリズムに合わせてくらしている森。森には、かぎりない自然の力と、いのちのかがやきがあります。

本の世界も森と同じです。そこには、人間の理想や知恵、夢や楽しさがいっぱいつまっています。

本の森をおとずれると、チルチルとミチルが「青い鳥」を追い求めた旅で、さまざまな体験を得たように、みなさんも思いがけないすばらしい世界にめぐりあえて、心をゆたかにするにちがいありません。

「講談社　青い鳥文庫」は、七十年の歴史を持つ講談社が、一人でも多くの人のために、すぐれた作品をよりすぐり、安い定価でおおくりする本の森です。その一さつ一さつが、みなさんにとって、青い鳥であることをいのって出版していきます。この森が美しいみどりの葉をしげらせ、あざやかな花を開き、明日をになうみなさんの心のふるさととして、大きく育つよう、応援を願っています。

昭和五十五年十一月

講　談　社

講談社 青い鳥文庫　21-4

ムーミン谷の冬

トーベ=ヤンソン

山室 静 訳

1982年1月10日　第1刷発行
1995年5月26日　第19刷発行

(定価はカバーに表示してあります。)

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2－12－21　郵便番号112－01

電話　出版部　(03)5395－3536
販売部　(03)5395－3625
製作部　(03)5395－3615

N.D.C. 993　206p　18cm

装　丁　久住和代

印　刷　図書印刷株式会社

製　本　図書印刷株式会社

ISBN 4-06-147047-7　(児庫)

(落丁本・乱丁本は、講談社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。)

■この本についてのお問い合わせは，講談社児童局
「青い鳥文庫」係にご連絡ください。

＊著者紹介

トーベ=ヤンソン

1914年，フィンランドの首都，ヘルシンキに生まれる。ストックホルムとパリで絵を学ぶ。1948年に出版した「たのしいムーミン一家」が世界じゅうで大評判となり，以後「ムーミンパパの思い出」「ムーミン谷の冬」「ムーミン谷の夏まつり」など，一連の傑作を書いている。

＊訳者紹介

山室　静

1906年，鳥取市に生まれる。東北大学文学部卒業。元日本女子大学教授。おもな著書に「北欧文学の世界」「アンデルセンの生涯」(毎日出版文化賞受賞)「山室静著作集」（平林たい子文学賞受賞）などがあるほか，児童文学，世界の昔話などに関する著訳書も多い。

感動あるこの生き方は、わたしたちにも、いますぐにはじめられるものでしょう。スウィフトが「ガリバー旅行記」で残酷にも示唆したように、人類には、理想世界など永遠に築けないのかもしれません。しかし、ヤンソンさんは、半生をかけて、このムーミンの人生観と世界観を提示し続けています。〈だれもがすぐに、感激ある生活を獲得できる〉と叫び続けているかのように。

こうした〈生命への感動〉を、ヤンソンさんは、どのようにして身につけてきたのでしょう。

彼女は、彫刻家と画家の両親のもとで、芸術の香りに包まれて、個性豊かな子ども時代を送りました。青春時代も、十六歳から二十四歳まで、絵画の道ひと筋に志を貫き、フィンランド・ストックホルム・パリの美術学校に通いました。彼女はまた、生地フィンランドの極地の自然を愛し、微細な生物も含めて、生きるものたちの、やさしい観察者であり続けました。零下三十度を下ることもあり、昼でさえ太陽がわずかにしか顔を出さない長い冬を生きぬいて、つかのまの白夜の夏に生命を謳歌する生きものたちに、心の目を向けていたのでしょう。家庭環境に恵まれていきいきと生きる喜びを知り、苛酷な風土を生きぬく生きものたちとの交感から、生命の尊さをみてきたことが、ヤンソンさんに与えた影響は大きいと思われます。

しかし、こうした体験を持ったということだけで、ムーミン童話は生まれはしなかったでしょう。このヤンソンさんを内側から突き動かすなにものかがあったはずです。それは、またの機会に考えたいと思います。

解説…ムーミン童話の三つめのなぞ

高橋静男
（フィンランド文学研究家）

本書では、ムーミン谷に、未知の世界や隣りの世界から、奇怪なものたちがやってきます。活発なことのきらいな微細な虫、ひとりよがりのお人よしヘムレン、秘密めいた生活をする流しの下の住人、姿も見せず話もしないおかしなものたち、などの大群です。ムーミンは、自分と彼らの生活習慣の違いをたいせつにしながら、みんなと仲よくしようと、持ち前の思いやりを深くします。こうして、奇怪なものたちを迎えても、全員が自分らしく生きていける世界が、ムーミン谷に創り出されます。

ムーミンのこの生き方、つまり〈思いやりを深くして、自分らしく生きる〉こととは、〈自他ともに愛す〉ことであり、それは〈生命へのかぎりない愛しみ〉を知る者だけにできることです。ここには、自分が自分らしくなっていく喜びがあり、他の存在が生きていることへの感動があります。ムーミンの日常生活は、こうした感動でいっぱいです。しかも、そのように生きることは、一つの理想世界——いっさいの差別や敵対意識がなく、互いを尊重し合い、みんなが自分らしく生きていける世界——の創出のために、自分も参加していることにもなります。日々刻々、



だれにも見えないところまでくると、かれはかけだしました。お日さまを背にうけて、雪どけのぬかるみを、はしりにはしりました。幸福でいっぱいになって、なんにも考えずに、はしったのです。

とうとうかれは、海べまでかけおりていって、桟橋にでました。だれもいなくなって、風通しのよくなった水あび小屋も、そのままとおりぬけました。

それから、水あび小屋のはしごだんにこしかけて、春の海を見おろしました。

よくよく耳をすますと、谷間のずっとむこうで鳴っている手まわしオルガンが、かすかにきこえてくるだけでした。

ムーミントロールは、じっと目をとじて、氷がむこうの暗い水平線のほうまでつづいていたころのことを、思いだそうとしました。

つけました。それは、南がわのまどの下の、日なたの土から顔をだしていたのです。でも、まだ、みどり色にはなっていませんでした。

「この上にガラスをおいてあげましょう。夜中にさむくなってもだいじょうぶなように。」

　こう、スノークのおじょうさんはいいました。

「いや、そんなことだめさ。じぶんの力で、のびさせてやるのがいいんだよ。この芽（め）も、すこしはくるしいことにあうほうが、しっかりすると、ぼくは思うな。」

　こう、ムーミントロールはいいましたが、そのとききゅうに、とてもうれしくなって、なんだか、ひとりになりたくなりました。そこでかれは、ぶらっと、たきぎ小屋（ごや）のほうへいきました。



だものなあ。」

こう、ムーミントロールは考えました。

ムーミントロールは、ベランダにしずかにたって、うちの人たちを見ていました。みんなはゆめからさめて、いつもの春とおなじく、いかにもたのしそうに、庭を歩きまわっています。かれは、おしゃまさんと目を見あわせました。おしゃまさんは、ワルツがおわるまでハンドルをまわしてから、にっこりしていいました。

「もう水あび小屋はあいていますよ。」

「これからも、あんただけは、あの小屋に住んでいてもいいって、みんながいってますよ。」

と、ムーミンママはいいました。

「それに、水あび小屋というのは、ほんとに気のおけないところですものね。だれだって、浜べにいるのとおなじで、海水パンツひとつでいられますもの。」

「ありがとうございます。よく考えてみますわ。」

こうおしゃまさんはいって、それからまた、手まわしオルガンをもって、谷間のおくへでかけていきました――ねむっているものたちをおこしに。

ところで、スノークのおじょうさんが、ことしはじめてでた、元気のいいクロッカスの芽を見

きょうは、ただの気分だけでなく、しんからゆかいになってやろうと、春は決心していたのです。空には、小さいちぎれ雲をいちめんにまきちらし、なごりの雪も、屋根という屋根からおっぱらいました。どの丘もさっぱりとして、どこもかしこも、うきうきするような四月でした。

「わたし、おきたわよ。」

スノークのおじょうさんが、声をはずませてさけびました。ムーミントロールは、鼻をやさしくおじょうさんの鼻にすりつけて、いいました。

「春になって、おめでとう。」

そういいながらも、同時にムーミントロールは考えていたのです――いつかは、じぶんの見た冬のことを、おじょうさんにもわかるように、話してあげたいものだと。

見ていると、おじょうさんは春のみどり色のぼうしをとりに、洋服だんすのところへかけつけました。

パパも風力計とシャベルをもって、ベランダへでてきました。

そのあいだにも、おしゃまさんの手まわしオルガンは、ずっと鳴りつづけ、お日さまの光はムーミン谷にふりそそいでいました――大自然が、いままでみんなにあんなにふしんせつだったのを、わびるかのように。

(きょうは、きっとスナフキンもやってくるぞ。あの人がかえってくるのには、もってこいの日



しにかぶって、ハンドルをまわしていました。空も、ぼうしとそっくりの青さで、お日さまが、オルガンの銀の金具に、きらきらとかがやきました。

おしゃまさんのそばには、ちびのミイがいました。とくいそうでもあり、きまりわるそうにもしていたのは、じぶんの手で、お茶のポットのぼうしをつくったり、銀のおぼんをすなでみがいたりしたからなんです。どっちもうまくいきませんでしたけれど、なんといってもたいせつなのは、結果ではなくて、そういう心がけですよね。

むこうの丘からは、ミムラねえさんが、冬じゅうその中でねむっていた、広間のじゅうたんをひきずりながら、ねぼけまなこでやってきました。

ママは、雪をすこし手にとって、雪玉をこしらえました。それからママは、おかあさんたちがよくやるように、それを下からほうりなげました。雪玉は、ほんのちょっととんだだけで、ボシャンとおちました。

「だめね。いぬのめそめそだって、もうちょっとはじょうずになげるでしょうにね。」

ママは、こういってわらいました。

「ママ、ぼく、とってもとっても、ママが大すきさ。」

と、ムーミントロールはいいました。

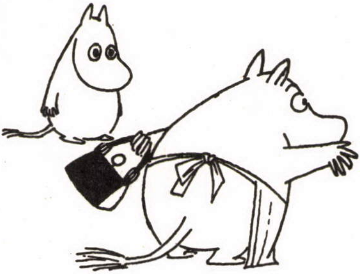
ふたりは、ゆっくりと、橋のところまで歩いていきました。郵便は、まだ一通もきていませんでした。夕日が谷に長いかげをなげ、すべてはおだやかな、すばらしい平和につつまれていました。

それからママは橋の手すりにこしかけて、いいました。

「じゃあ、ご先祖のことを、もうすこしくわしく、きかせてちょうだい。」

あくる朝は、家じゅうのものが、いちどに目をさましました。春がきて、ちょうど目をさますべきときに、あかるくにぎやかな手まわしオルガンの音がしてきて、目がさめたのです。

おしゃまさんが、屋根からしたたる雪どけ水のしずくをあびながら、空色のぼうしをうらがえ



○

つきりだと、一生みんなが思ってきたんだわ。それなのに、ぜんぜんべつの、ずっといいつかいかたがあったのね。それからまた、みんながわたしに、『そんなにたくさんジャムをこしらえて、どうするの。』なんていったけど――ちゃんと、ぜんぶなくなっちまったわね。」

ムーミントロールは、赤くなってききました。

「ミイのちびが、しゃべったんだろう？」

「そうよ。」

と、ママはいいました。

「あんたが、お客さんのせわをしてくれたおかげで、ママはどこへいっても、はずかしい思いをしないでいられるわ。それにね、あんまりしきものやら、がらくたやらが、ごちゃごちゃあるより、これぐらいのほうが、風通しがいいのよ。それに、おそうじだってらくになるしさ。」

たてて、いなびかりみたいに、まっすぐにすべりおりるの。気をつけて目をあけていないと、死ぬかもしれないんだ。」

「おやおや。それで、それをするのには、おぼんをつかうのかい。」

と、ママはききました。

「ううん、おぼんは氷の上のほうがいいんだ。」

　むすこはそう答えましたが、いくらか気分をそこねたふうでした。

「そうね、そうね。」

と、ママはまぶしそうにお日さまのほうを見ながら、いそいでいいました。

「世の中って、ほんとにおもしろいものね。銀のおぼんのつかいかたは、一



した。
　でも、ママのところへいくほうがやっぱりいいと、すぐ思いかえしました。そこで、ムーミントロールは台所へでていって、ママにいったのです。
「おいでよ、雪を見せてあげるから。」
　ママは、すぐさまおさらをあらうのをやめて、むすこといっしょに、お日さまの下へとびだしました。
「もう、あんまりのこっていないけどね。」
と、ムーミントロールは説明しました。
「でも、冬のうちにママに見せたかったなあ。おうちがすっぽり、雪の中にうずまってたんだぜ。雪はぼくの鼻までとどいたよ。あのね、雪ってものは、空から小さな小さなつめたいお星さまみたいにして、ふってくるんだよ。そして、上のほうの黒い空には、青とみどりの羽みたいなカーテンがかかっているの。」
「まあ、きれい。」
と、ママはいいました。
　ムーミントロールは、なおも話をつづけました。
「そうさ。そしてね、そのあとで雪の上をすべるんだよ。スキーっていうの。大きな雪けむりを

そのあいだに、フィルムはおしまいになっていましたが、ママは、ベランダのゆかに、まるく黒いあなをあけることにも成功していたのです。

それからムーミンママは、ゆっくりといいました。

「来年の春は、わたしがだれよりも先に目をさましましょ。そうしたら、みんなもすこしは安心して、したいことができるものね。」

ムーミントロールがようやく目をさましたときは、のどのいたみは、もうなおっていました。

ママはもう、シャンデリアからレースのおおいをはずし、カーテンはまきあげていました。いろんな道具は、もとの場所にもどっているし、まどガラスのわれたところは、厚紙でふさいでありました。ほこりのかたまりもすっかりなくなっていました。

けれども、大ストーブのまえの、あのご先祖のがらくた類は、そのままでした。きれいな紙の上に、ママはこうかいていました。

「さわってはいけません。」

台所からは、おさらをあらう音が、しずかにきこえてきます。

（ママに、流しの下に住んでいる動物のこと、話そうかな、それとも、よそうかな……。）

と、ムーミントロールは考えました。もうすこし病気になっていて、あまえたいような気もしま

「春になったら、もっとはやくおきるようにしないとね。」
と、ママがつぶやきました。
「ほんとにそうだわ。あの子は、まだねてるの？」
と、おしゃまさんがいいました。
ママはうなずきました。
そのとき、ちびのミイがとくいそうに口をはさみました。
「おばさんに、あの子のジャンプするすがたを見せたかったわ。冬のはんぶんはじっとすわって、ぶつぶついいながら絵をはっていたくせに、ほんとにあの子ったら！」
「知ってますよ。知ってますよ。」
と、ママはいいました。
「ほんとにあの子は、どんなにか、さびしかったでしょうね。」
「それから、なんだかへんなご先祖さまを見つけてきてね。」
と、ちびのミイが、話をつづけました。
「あの子がおきたら、じぶんで話させてやりましょうね。わたしがねているあいだに、ここでいろんなことがあったのは、おばさんも知っていますよ。」
こう、ムーミントロールのママはいいました。



「わかってますよ。」

と、ママはいいました。

きゅうにムーミントロールは、すっかりあたたかくなり、気分もおちついて、責任がなくなったのを感じました。かれはほっと息をついて、まくらに鼻をおしつけました。それから、すべてをわすれて、ぐっすりとねむりにおちていったのです。

ムーミンママは、ベランダにすわって、写真のフィルムを虫めがねでやいていました。けむりがたちのぼり、火がでて、気持ちのよい、きついにおいが、鼻をつきました。

日ざしがつよくて、ぬれたベランダのまわりには、ほかほか湯げがたっていましたが、階段のかげなんかは、まだこおっていました。

うしは、そこにはありませんでした。コーヒーポットそのものさえ、なくなっていました。だけど、ムーミンママは、それには気がつきませんでした。

それからママは、ねんのために、かぜぐすりの上で、みじかいおまじないを、むにゃむにゃととなえました。それは、ママのおばあさんにおしえてもらったものでした。それから、おへやへもどってきて、いいました。

「あついうちに、のむのよ。」

ムーミントロールはのみました。気持ちのいいぬくもりが、つめたくなったおなかに流れこみました。

ムーミントロールはいいました。

「ママ、とてもいっぱい話したいことがあるんだよ……。」

「まず、ひとねむりしてからね。」

ママはそういって、むすこのくびに、フランネルをまきつけてやりました。

「そんなら、一つだけ。」

と、ムーミントロールは、ねむそうな声でいいました。

「大ストーブで、火をもやさないと、やくそくしてよ。あそこには、ご先祖が住んでいるんだもの。」

と、ムーミントロールは、あわれな声をだしました。

「いいのよ、いいのよ。じきにきれいになりますよ。」

と、ママはいいました。

　ムーミンママは、ごみためのかげから、たきぎを何本か見つけました。ひみつの戸だなから、グレープジュースをとりだしました。それから、粉ぐすりとフランネルのほうたいまで。

　お湯がわくと、ママは、おさとうとしょうがと、いつも二段めのたなのコーヒーポットのぼうしのうしろにおいてある、しなびたレモンをまぜて、よくきくかぜぐすりをこしらえました。

　もっとも、いまはコーヒーポットのぼ



をのっけました。けれども、そんなことでは、あたたかくなりません。足はいたむし、のどもひりひりします。
かれはいっぺんに、生きているのがかなしいだけになりました。じまんの鼻までが、まるでじぶんのものとは思えないで、ひどくおもくなった感じでした。こごえきったしっぽをまるめようとしたとき、またもやくしゃみがでてしまいました。
それでおかあさんは、目がさめたのです。
おかあさんの耳には、氷のくずれる大砲のような音も、大ストーブの中までふきこんできたふぶきも、きこえませんでした。家じゅうが、飢えとさむさにおびえたお客たちでうずまっても、目ざましどけいがどんなに鳴っても、目をさまさなかったのでした。
それが、いまはぱっちりと目をひらいて、天じょうを見つめていました。それからママは、ベッドの上におきあがると、こういったのです。
「おまえ、外へでて、かぜをひいてきたのね。」
ムーミントロールは、歯をガチガチいわせながら、いいました。
「ママ、あのりすが、べつのりすじゃないとわかったら、ほんとにいいんだけどなあ。」
ママはあたたかいジュースをつくりに、台所へでていきました。
「そこ、よごれているよ。」

「しきものとね。そりゃたくさん思いだすよ。毛糸のふさのついたのも、ついてないのもね。毛糸のふさのあるのが、いちばん上等だよ。」
そういって、りすはむじゃきに、森の中へはねていきました。
（このことは、いずれたしかめるとしよう。いまはさむくてたまらない。とにかく、家へかえらなくちゃ……。）
と、ムーミントロールは思いました。それから、
「はくしょん。」と、くしゃみをしました。こんなことは生まれてはじめてでした。かれはほんとうに、かぜをひいてしまったのでした。
地下室の暖房ストーブは、もえつきてしまって、へやの中は、ひえきっていました。
ムーミントロールは、ぶるぶるふるえる手で、一まい、また一まいと、おなかの上へ、しきもの



まると、じっとりすを見つめました。りすは、大きなふさふさしたしっぽをしていて、それが夕日にかがやいていました。

「きみは、あのう、『うつくしいしっぽのりす』という名まえかい。」

と、ムーミントロールは、のろのろとたずねました。

「そうだよ。」

と、りすがいいました。

「きみか。」

ムーミントロールは、思わず口ばしりました。

「ほんとにきみが、氷姫(こおりひめ)にであった、あのりすかい。」

「そんなこと、おぼえてないよ。」

と、りすはいいました。

「きみは知らないの。ぼく、とってもわすれっぽいんだ。」

「思いだしてくれたまえ。」

と、ムーミントロールはたのみました。

「毛糸のふさのついた、いいしきもののことだよ。思いださない？」

りすは、耳のうしろをかいて考えこみました。

と、おしゃまさんは、気がとがめたようにいいました。

「さあ、水あび小屋へはいって、あたたまりなさいな。」

「いや、ぼくはかえる。」

ムーミントロールはこういうと、どうにかたちあがって、よろよろしながら、たちさっていきました。

「あたたかいジュースよ。あたたかいものをのむのを、わすれないでね。」

おしゃまさんは、うしろから、大きな声でいいました。

道は雪がとけて、ぐちゃぐちゃでした。そうして、足の下には木の根や、まつ葉が感じられました。でもムーミントロールは、さむくてさむくて、からだがぶるぶるふるえ、足もふるえがとまりませんでした。

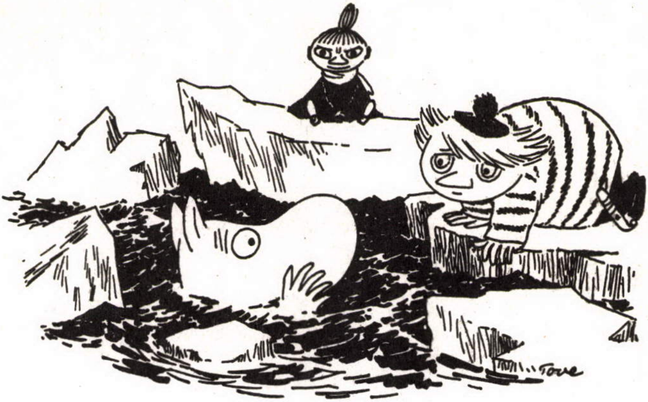
小さいりすが一ぴき、はねながら道をよこぎりましたが、ムーミントロールは、よく見もしませんでした。

「春になって、おめでとう。」

りすが、ぼそっといいました。

「おめでとう。」

と、ムーミントロールも答えて、そのまま歩きつづけました。ところが、かれはきゅうにたちど



ていました。ミイのように、いつでも身がるにふるまえたら、どんなにいいでしょうね。
「さあ、ここにつかまって。」
おしゃまさんはこういって、しっかりと手をさしだしました。ムーミンママのせんたく板の上にはらばいになって、ムーミントロールのいかにもびっくりしているような目をまっすぐに見つめながら、そうやっておしゃまさんは、いっしょうけんめいに声をかけました。
「もうすぐよ、もうすぐよ……。」
ムーミントロールは、そろそろと、氷のふちにたぐりよせられました。それから、やっとのことで、岸にはいあがると、かれはいいました。
「きみは、外にでて見てなかったじゃないか。」
「わたし、まどから見ていたのよ。」

「一、二、三、ちょっとまって。一、二、三、はい、とんで。」

ムーミントロールの足はふるえるし、おなかはもう、ひえきっていました。とつぜん、雲におおわれた空がきれて、赤い夕日が、氷と波をきらきら光らせました。おかげで、ムーミントロールは目がくらみました。

せなかはすっかりあたたかくなったけれど、おなかはやっぱりつめたいし、いじわるな世界が、四方からかれをとりまいて、めちゃくちゃにワルツをおどっていました。

水あび小屋のまどからは、おしゃまさんが、息をころして、なりゆきを見ていました。いまや、まずいことになってきたのが、はっきりとわかりました。

（こりゃいけない。あの子はもちろん知らないんだわ……わたしはずっと見ていたんだけど……。）

こう思いつくと、かの女は桟橋へとびだしていって、ありったけの声でさけびました。

「がんばれえっ、ムーミンちゃん。」

でも、そのときはもう、おそかったのです。

ムーミントロールは、さいごの一とびに失敗して、耳までざんぶりと海につかってしまいました。小さいすべすべした氷のかけらが、やたらとくびにぶつかりました。

ちびのミイは、そのときにはもうムーミントロールの耳をはなして、ぱっと陸地にとびあがっ

がでていました。しかし、桟橋にでて、はらはらしながらこっちを見つめているものは、ひとりもいません。かれはがっかりして、気がすすまなくなりました。足もきゅうにおもたくなってきました。

「さあ、出発！」

と、ちびのミイがどなりました。

そこでムーミントロールは、はしりだしました。歯をくいしばって、ふるえる足で、ジャンプ、またジャンプです。あたらしい氷の上へとびうつるたびに、つめたい水しぶきが、かれのおなかをぬらしました。

氷の屋根はすっかりくずれてしまい、波がワルツをおどっていました。

「ひょうしをとって。そら、波がきたわよ……ね、足の下に感じるでしょ。……はい、ジャンプ。」

こんなふうに、ミイがさけびます。

そこでムーミントロールは、波がちょうど足もとに氷をおしてよこしたときに、ぴょいとその上にとびうつります。

「一、二、三。一、二、三！」

ミイは、ワルツのひょうしをとりました。

「やれやれ。」

と、ため息をつきながら、おしゃまさんは考えました。

(あの子たちの冒険ときたら、いつもこんなものだわ。たすけたり、たすけられたりさ。その人たちをほんとうにあたためてあげるもののことを、いつか、だれかにかいてもらいたいよ。)

ムーミントロールははしりながら、そばの氷の中を、小さいひびわれがはしっていくのに気がつきました。そのわれめは、かれにまけないはやさなのです。

そのとき、氷が波にもちあげられたかと思うと、つぎのしゅんかんには、いくつにもこわれて、ぐらぐらっと、かれの足の下でゆれはじめました。

ちびのミイは、じぶんの氷のかけらの上にじっとたって、ムーミントロールがぴょんぴょんはねているのを見ていました。まるで、ゴムまりがはずんでいるのと、そっくりでした――ムーミントロールの目は、きんちょうとこうふんで、まんまるくなっていました。

やっとのことで、かれが近づいてくると、ミイは両うでをさしだして、いいました。

「あんたの頭の上へのせてよ。あぶなくなったら、とびおりられるようにさ。」

それからミイは、ムーミントロールの耳をしっかりつかんで、さけびました。

「ぜんたい、海岸へむかってすすめ!」

ムーミントロールは、いそいで水あび小屋のほうに目をむけました。えんとつからは、けむり

スリルをはしらせるのでした。

「おばかさんたちが、あたいをたすけようなんて、やってきませんように……。そんなことになったら、おしまいだわ。」

ミイはこんなことを考えながら、台所ナイフがへこんでしまうくらい、ぐんぐんはしりました。それなのに、浜べはちっとも近くなりません。

いまは、われめが大きくひろがって、そこに流れができていました。おこった小さい波が、しきりにはねあがりました。

と思うまに、海はだしぬけにぐらぐらゆれる氷の島でいっぱいになり、その氷がたがいにぶつかりあいました。そしてちびのミイは、そんな氷の島の一つにのっかって、まわりにぐんぐんひろがっていく水をながめていたのです。

でもミイは、たいしてこわがりもせずに、

（まあ、これはおもしろいこと。）

なんて考えていたのです。

そのときはもう、ムーミントロールは、ミイをたすけにでかけていたのです。おしゃまさんは、それをしばらく見送ってから、水あび小屋の中へはいって、水をいれたおなべをストーブにかけました。

ました。

黒いわれめが、もう氷の上を右に左にはしっていきます。しまいに、われめはくたびれたのか、すがたをけしました。すると、海がまたもりあがって、あたらしいひびわれができます。それは、まえのわれめよりも、ずっとひろくなっていました。

「さあ、だれかさんは、大いそぎでもどらなくちゃ。」

と、おしゃまさんがいいました。

もちろん、ちびのミイは、なにかがおこるのを見ていました。だからって、そのままもどってくるなんてことは、できるわけがありません。あの子は、海がもりあがるところを見なくては、おさまりませんでした。そこで、氷のいちばんはずれまですべっていって、海の顔をのぞきながら、そこへみごとに8の字をかいてみせました。

それからミイは、さっとこちらへむきをかえると、メリメリ音をたてている氷の上を、大いそぎでひきかえしたのです。

はじめのうちは、われめはごく小さいものばかりでした。ミイの目のとどくかぎり、そこらいちめんに、「きけん」とかきつけてあるようなものでしたけれど。

氷は弓のようにたわんで、高くもりあがったり、ひくくしずんだりしています。そして、ときどき春がきたのを祝って氷をうちくだく大砲の音がして、ちびのミイの背すじに、気持ちのよい

ある風のつよい日のことです。夕ぐれまえに、力づよくいきおいのよい音が、海のほうからきこえてきました。
「あらまあ！」
おしゃまさんが、手にもっていたコーヒー茶わんをおいて、さけびました。
「むこうで、春の大砲が鳴ったわ。」
氷がゆっくりともちあがりました。するとまた、あたらしい大砲の音がひびきました。
ムーミントロールは、水あび小屋からとびだして、なまあたたかい風の中に、きき耳をたてました。
「ほら、むこうから海がおしよせてくるでしょ。」
うしろで、おしゃまさんがさけびました。
遠くで白い波がしらがたち、おなかをすかせておこった波は、つぎつぎと冬の氷をのみこんでい



ご先祖は、とてもおとなしくしていました。大ストーブのたき口は、ずっととざしたままでした。きっと、千年のむかしにひきこもっているのでしょう。調節器のひもも、ふさも、ガラス玉も、そのほか、かざりになるものはすべて、大ストーブとかべのすきまにおしこまれてしまっていました。

（ご先祖は、ああいうものがすきだったからなあ。）

こう、ムーミントロールは思いました。

かれはいまでは、もう、ゆりいすの下のきわたの中でなく、じぶんのベッドへもどって、ねていました。

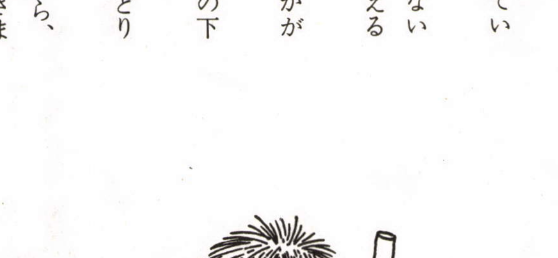
朝ごとに太陽は、いよいよへやのおくまではいってきて、

「これではいけないね。」

とばかりに、くもの巣や、ほこりのかたまりを、てらしだしました。まるく大きくかたまって、いかにもものものしいほこりは、いつでもムーミントロールが、ベランダまではこびだしてやりました。でも、小さいのはほったらかして、かってにさせておきました。

午後になると、南がわのまどの下の土が、あたたかくなります。その土の下では、赤茶けた球根が芽をだそうとしていました。ほそい根っこも、いっしょうけんめい、雪どけ水をすいこんでいました。

る、とへんじをしただけだった。ぼくのさびしがっていたのが、わからなかったの？」
おしゃまさんは、そういわれると、かたをすくめていいました。
「どんなことでも、じぶんで見つけださなきゃいけないものよ。そうして、じぶんひとりで、それをのりこえるんだわ。」
お日さまは、日ましにいよいよあたたかく、てりかがやきました。
氷の中に、小さいあなやわれめができました。その下で、海の水がざわめいて、ふくれあがりました。
水平線のかなたでは、大きなあらしが、ゆきつもどりつしていました。
毎晩ムーミントロールは、ねどこにはいってから、ひっそりとねしずまった家が、ミシミシ鳴るのをききました。



ました。
「さあ、水あび小屋が、また水あび小屋になるのよ。そうして、暑くなってどこもかしこもみどりになったら、あんたは桟橋の、お日さまであたたまった板の上にはらばいになって、浜べにうちよせる波の音をききながら……。」
「どうしてそれを、冬のあいだにいってくれなかったの。」
と、ムーミントロールはいいました。
「そうしたらぼくは、きっと元気になれたろうになあ。ここにりんごの木がはえてたね、とぼくがいったら、きみは、いまは雪がつもって



りと見とれるのでした。
たきぎ小屋の南がわに、地面がすこし、顔をだしかけていました。ぶなの木のこずえが、ごくわずかですが、赤らんできました――でも、すこしはなれてみないと、それはわかりません。
お日さまの光は、雪だまりの中へまっすぐにさしこむようになり、雪だまりはもろくなって、ガラスみたいにひびわれていました。そして、海をとざした氷は、黒っぽい色になって、その下から海がすけて見えるように思われました。
ちびのミイは、いまでもまだ、スケートをしていました。それまで足につけていたブリキのふたを、いまでは台所のナイフにとりかえ、その刃を下にして、うまくくつの下へしばりつけていましたっけ。
ときたまムーミントロールは、ミイが氷の上にえがいた8の字を見かけました。けれども、そのすがたを見ることは、めったにありませんでした。
かの女はいつでも、じぶんひとりでたのしむことを知っていました。じぶんがなにを考えようと、春がどんなにすきであろうと、そのことを人に話す必要は、すこしも感じなかったのです。
おしゃまさんは、水あび小屋をそうじしました。
赤いまどガラスも、青いまどガラスも、きれいにふいて、はじめて夏のはえがでてきたら、そこでたのしくあそべるようにしました。水着は外にほし、ヘムル形のうきぶくろの修繕にかかり



をすくいだしてくれるものだと。ところが、いまそこにきているのは、かれがじぶんで手にいれて、じぶんのものにしたあたらしい経験の、ごくしぜんなつづきだったではありませんか。

　ムーミントロールは、こんな春が、いつまでもつづけばいいと思いました。そうしたら、この希望にあふれたしあわせな気持ちを、それだけゆっくりと、あじわえるわけですものね。

　毎朝かれは、あのすばらしいこと——それは家族のだれかが目をさますことでした——さえ、おそれるような気持ちになりました。そんなわけでムーミントロールは、へやの中を歩くときにも気をつけて、道具やなんかにぶつからないように、いっしょうけんめいに注意しました。それから、外へはしりでていっては、あたらしいにおいをむねいっぱいすいこみながら、この二、三日におこったあたりの変化に、うっと

たとえば、ムーミンママが目をさましたとき、どういったか、いまのままでは、はっきりしませんもの。それから、ムーミン家のご先祖が、あのせとものの大ストーブの中で、ずっとしあわせにくらしたかどうかもね。また、この本がおわるまでに、はたしてスナフキンがかえってきたかどうかや、ミムラねえさんが、ボール紙の箱がなくなってもだいじょうぶだったかどうか。それからまた、水あび小屋が、またじっさいに水あび小屋になったときに、おしゃまさんは、はたしてどこに住んだでしょうか。そのほか、まだいろいろと、わからないことがありますね。

やっぱり、もっとお話をつづけるのが、いちばんいいでしょう。

とくに、海の氷がとけたときのことが重要です。それはとても劇的で、はぶくわけにはいきません。

いよいよ、あかるいお日さまにめぐまれた日々がやってきました。屋根からおちるしずく、風、流れる雲——そして夜は、こちこちにこおった雪と、まぶしいくらいのお月さまです。

ムーミントロールは、わくわくしながら、むねを大きくはって、ムーミン谷を歩きまわりました。

もう春がきたのです。しかし、かれの考えていたのとは、まるっきりちがっていました。

かれは考えていたのです——春というものは、よそよそしい、いじのわるい世界から、じぶん



こりをふきはらいました。大ストーブの灰が、ぱっとまいたちました。それから、ぐるりのかべにはりつけてあるかざりの絵を、ひらひらさせました。その中の一まいがはがれて、ふきとばされました。

　夜とまつ林のにおいが、へやの中まで流れこんできました。

（こりゃいい気持ちだ。ときには、家の中に風をとおすものだなあ。）

　こう、ムーミントロールは思いました。かれはふみ段の上へでて、もやにつつまれた夜のやみの中を、じっとながめました。

「いまこそ、ぼくはのこらず知ったわけだ。」

と、ムーミントロールは、ひとりでつぶやきました。

「ぼくは、一年じゅうを知ってるんだ。冬だって知ってるんだもの。一年じゅうを生きぬいた、さいしょのムーミントロールなんだぞ、ぼくは。」

　ほんとうは、いまここで、この冬の物語をおしまいにするべきなのです。おへやの中まではいってきた、さいしょの春の夜と、つよい風は、たしかに、りっぱなしめくくりになるでしょう。そのあとどうなったかは、あなたがたに、めいめい自由に考えてもらいたいのです。でも、それではいけないのでしょうね。

ムーミントロールは、ランプを大ストーブのたなの上において、広間の中を見まわしました。まったくひどいものです。たいていのものが、心ないお客たちにほうりだされて、そこらにころがっていたり、こわれていたりしました。もっていかれてしまったのもありました。

のこっているものも、手がつけられないくらい、ちらかっていました。台所は、よごれたおさらでいっぱいだし、暖房ストーブは、泥炭がなくなって、きえかけていました。まどガラスも、一まいわれていました。

ムーミントロールは、もの思いにしずみました。屋根の上では、じとじとした雪が、とけはじめて、ポツンポツンと音をたてて、のきからしたたりおちていました。南がわのまどからは、だしぬけに、くもった夜空がのぞきました。

ムーミントロールは、入り口のドアのところへいって、おしてみました。すると、いくらかうごいたような気がしました。そこで、足をふんばって、ありったけの力でおしこくりました。すこしずつ、すこしずつ、ドアはのろのろと、外につもった雪をおしのけて、ひらいていきました。

ムーミントロールは、なおもぐいぐいおして、ドアが夜のやみにむかってひらききるまで、やめませんでした。

いよいよ、風がまっすぐに、広間まではいってきました。風はシャンデリアのレースから、ほ

耳をそばだてました。

くもった、あたたかい夜で、どことなく、ざわついていました。木々はもうずっとまえに、雪をふるいおとしていました。くらやみの中でも、そのえだのゆれうごいているのが感じられました。

遠く南のほうから、つよい風がふきつけてきます。ムーミントロールは、それが森をざわめかして、さらにむこうの丘へと、ふきのぼっていく音をききました。

しずくがぱらぱらと、くろずんだ雪の上に、雨のようにおちます。ムーミントロールは、鼻をもちあげてそのにおいをかぎました。

きっとそれは、土のにおいだったのでしょう。かれは歩きながら、おしゃまさんのいったとおり、ほんとうに春になりかけているのだと、知りました。

ひさしぶりに、ムーミントロールは、家にかえって、ねむっているパパとママをじっと見つめました。それから、スノークのおじょうさんの上にランプをかざして、つくづくとながめました。おじょうさんの前がみが、ランプの光の中で、きらきらかがやいていました。ほんとうに、すごくきれいです。

おじょうさんは、目をさましたら、きっとすぐさま、洋服だんすにとびつくことでしょう。そして、みどり色の春のぼうしをとりだすことでしょう。いつもそうなんです。

い青色でした。
「わたしは、春のにおいがしてきたら、いつも、こうするのよ。」
そういっておしゃまさんは、井戸ばたにこしかけて、うたいだしました。

わたしはおしゃま
ぼうしをいじくりまわしてるの
わたしはおしゃま
あたたかい風を　かいでいるの
さあ　春のあらしが　やってくるよ
さあ　なだれが　とどろくよ
いま　地球は　ぐるっとまわって
なにもかもが　かわるのよ
みんな　毛のズボンを　ぬぎすてて
たんすの中に　しまいましょ

ある晩、ムーミントロールは、水あび小屋からうちへかえるとき、とちゅうでたちどまって、

とうとう、さいごのひとりも橋をわたっていってしまい、ジャムの倉庫も、からっぽになりました。

「もうわたしたちだけね。」

と、おしゃまさんがいいました。

「あんたと、わたしと、ちびのミイだけよ。あのおかしな人たちは、つぎの冬まででてこないんだわ。」

「ぼくは、あの銀色のつのをした動物を、とうとう見なかったよ。」

と、ムーミントロールはいいました。

「それから、氷の上を歩いていた、あの足の長い、小さいやつや、火の上をとんでいた、色が黒くて、おそろしく大きな目玉をしていたやつもさ。」

「ああいうのは、みんな、冬のものなのよ。もう春になっているのに、あんたはまだ感じないのね。」

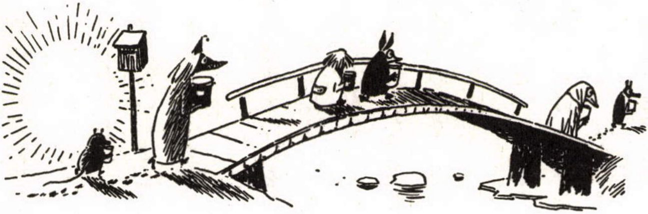
と、おしゃまさんはいいました。

ムーミントロールは、くびをふっていいました。

「まだはやすぎるよ。ぼくには感じられないな。」

けれども、おしゃまさんは、もう赤いぼうしを、いじくりまわしていました。内がわは、うす

第6章



春がきた

はじめて春さきのあらしがきたときから、ムーミン谷は、あわただしくなって、ぐんぐんようすがかわりました。

ムーミンやしきのお客さんたちも、いままでになく、じぶんの家をこいしがりはじめました。つぎからつぎへと、たいていは、雪のおもてがかたくなっている夜のあいだに、さっていきました。手まわしよく、じぶんのスキーをつくっておいたものもありましたし、そうでないものも、みんな小さいジャムのつぼを手にしていました。それは、ムーミンやしきのこけもものつぼから、わけてもらったのでした。

そしてヘムレンさんは、うしろをふりかえりもせずに、歩いていきました。
めそめそは、そのあとをついていきました。そうするのが、じぶんのできるいちばんただしいことなのだと、思いながら。

見るまにきけんはさって、めそめそがたったひとり、毛糸のぼうしのそばにすわっていたのです。大きな雪ぐつをはいて、ヘムレンさんが、のっしのっしと、山をのぼってきました。

かれのリュックサックの中には、はい虫のサロメちゃんが、ぬくぬくとねむたそうにはいって、音楽をきいていました。

「めそめそくん、こんなところにいたのかい。」

と、ヘムレンさんがいいました。

「長いこと、ぼくをまった?」

「いいえ。」

と、めそめそは答えました。

「すぐ雪はかたまるさ。」

ヘムレンさんは、あかるくいいました。

「『おさびし山』へついたら、わしのまほうびんから、あったかいミルクをのませてやるよ。」



ん。めそめそのまわりに、ぐるっと輪をかいて、たっているだけです。その輪が、だんだんせまくなってきます。
めそめそはしっぽをふって、うなりましたが、だれも答えません。かれは、毛糸のぼうしをぬいで、それを高くほうりあげました。じぶんがみんなとなかよくしたいと思っていることと、じぶんは罪のないものだということを、しめそうとしたのです。
けれども、おおかみたちは、ぼうしのほうには目もくれません。きゅうにめそめそは、じぶんがまちがっていたのをさとりました。おおかみたちは、いぬのきょうだいなどではなく、たのしくいっしょにあそんだりできるわけではないことが、はっきりとわかったのです。
じぶんたちは、ただたべられてしまうだけで、おろかなろばみたいに、じぶんがばかなことをしたのを後悔するだけなのです。
めそめそは、しっぽをふるのをやめて、思いました。
(なんということだ。ぼくは、毎晩こんなに雪の中で、いたずらにまちこがれたりしないで、ゆっくりねむっていたらよかったのだ……。)
おおかみは、ますます近づいてきました。
とたんに、すみきったらっぱの音が、森をつんざきました。いさましいらっぱの音楽が、木から雪をふりおとして、おおかみたちの黄色の目玉をくらましました。



ことを、思いだしました。
　しかし、そんなことがなんでしょう。とにかく、おおかみたちがそこへやってきて、めそめそを見つけ、とうとう、いっしょにきてもいいと、みとめてくれたのです……。
　いまや、このさびしがりやのいぬは、きけんなゆめにおぼれていました。かれは星空をあおいで、ほえたてました。
　すると、おおかみたちが答えたではありませんか。
　しかも、めそめそがこわくなったくらい、すぐ近くからでした。
　かれは、雪の中へもぐりこもうと、むちゅうであがきました。かぞえきれないほどの目が、そこにもここにも、まわりでぎらぎら光っていました。
　いまはおおかみたちは、ひとことも声をたてませ

雪におおわれて、まっ白なすがたをしてそびえていました。月のない晩でしたけれど、しめった空気の中で、星はいつもよりつよく、きらきらとかがやいていました。

ずっと遠くで、なだれの音がしています。めそめそは、そこにすわって、おおかみたちをまちました。

その夜は、長いあいだ、またなくてはなりませんでした。

めそめそは、大きいつよい灰色のおおかみたちが、雪の野原をかけるさまを想像しました。森のはずれで、じぶんのほえる声をきいて、おおかみたちがぴたりとたちどまるすがたも想像しました。きっとおおかみたちは、

（むこうになかまがいる。友だちになれる、いとこがいる……。）

と考えることでしょう。

そう思うと、めそめそはこうふんしました。そして、かれの空想は、いよいよおそれを知らぬものになっていきました。

かれはじっとすわってまちながら、じぶんのゆめに、いよいようつくしい色どりをそえました。おおかみのむれを、すぐそこに出現させてみました。

おおかみたちが、こちらへかけてきます……みんな、しきりに尾をふっています……。

そのときめそめそは、ほんとうのおおかみというものは、けっして尾をふらないものだという

その晩、めそめそは、さんざん苦労してふぶきをつきぬけて、ようやくのことで、いつものかなしみのほらあなへたどりつきました。たっぷり一時間あまりもかかったのです。ここへきて、あこがれに身もだえしながらすわっているたびに、かれのからだで、雪の中にあいたあなは、すこしずつ大きくなっていったのですが、いまはそのあなも、雪だまりの中に、ずっぷりとしずんでいました。

「おさびし山」は、すっかり



ふぶきのあとでは、あそこの山は、まったくすばらしいさ。それに、おそらく、とてもすがすがしい空気が、みちみちていると思うんだ。」

ムーミントロールは、おしゃまさんの顔を見ました。

おしゃまさんは、こっくりしました。それは、

「いかせてあげなさい。これで問題がかたづいて、すべてがおちつくところへおちつくのよ。」

という意味でした。

ムーミントロールは、家にはいって、大ストーブのとびらをあけました。さいしょに、そっとご先祖をよんでみました。それは、「チョー! チョー!」というふうにきこえる、かすかなあいずなのです。しかし、ご先祖は、ちっともへんじをしません。

(ぼくは、ご先祖さまをすっかり、ほっぽりだしていたからなあ。)

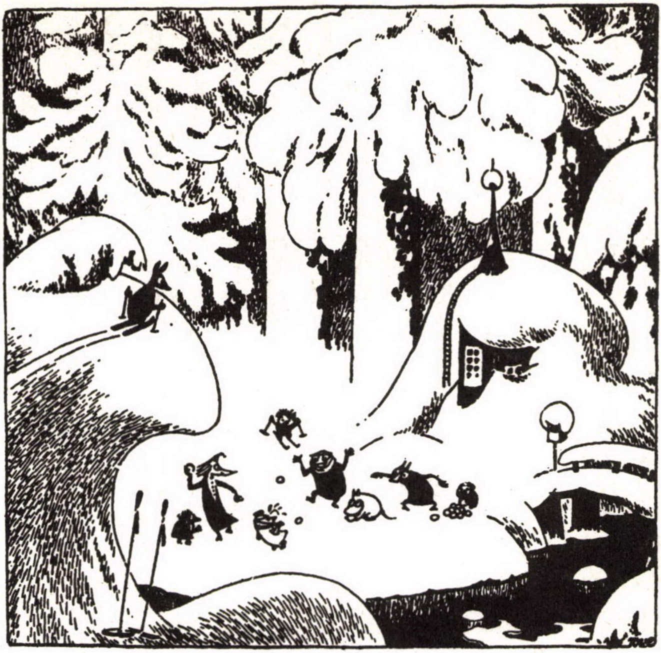
と、ムーミントロールは思いました。

それにしても、いま目のまえでおこっていることは、千年まえにおこったことよりも、もっとたいせつです。

ムーミントロールは、大ストーブのたき口から、いちごジャムのはいった大つぼをとりだしました。それから、紙のふたに、石炭のかけらでかきつけたのです。

「なつかしき友のヘムレンさんへ。」

た。
　こんどだけは、ムーミンやしきのお客さんも、のこらず外の雪の中にあつまって、大がかりな雪合戦の用意をしていました。たしかにジャムは、たいそうおいしくて、もうおしまいになっていました。けれども、それはお客たちの手足に力をつけていたのです。
　ヘムレンさんは、たきぎ小屋の屋根にすわって、らっぱをふいていました。いかにも幸福そうな顔をした小さいサロメちゃんが、ちょこんと、そのそばにすわっていました。
　ヘムレンさんは、「ヘムル行進曲」というマーチをやりました。おとくいのメロディーに、とくべつはなやかな調子をつけて、演奏したわけです。
　それがすむと、ヘムレンさんはムーミントロールのほうをむいて、こういいました。
「もうかなしまないでもらいたいね。わしはやっぱり、『おさびし山』へでかけるつもりだよ。だけど、来年の冬には、きっとまたここへきて、きみにスキーをおしえよう。指きりしてもいい。」
「だけど、ぼく、いったでしょ……。」
と、ムーミントロールは、おずおずといいかけました。
　しかし、ヘムレンさんは、それをさえぎって、いいました。
「わかってるよ、わかってるよ。あのときはそうだったさ、あのときはね。しかし、こんどの大



ら、みんなはくびまで雪につかって、のんびりとあたりを見まわしました。

谷間ぜんたいが、まるで別世界(べっせかい)のように、たのしく見えました。すごい雪だまりになって、大きなまるいケーキそっくりのところもありましたし、ナイフのようにきりたったがけになって、きれいなカーブを見せているところもありました。えだというえだは、みんな、わたぼうしをかぶっていました。そして、木という木は、ゆかいなおかし屋(や)さんがおどけてこしらえた、ものすごく大きなデコレーションケーキそっくりでし

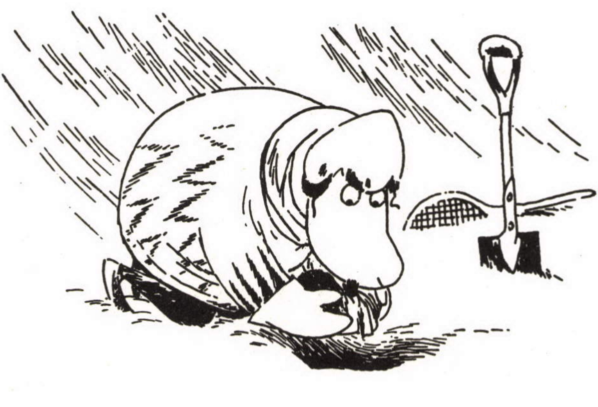
じめました。坂道をすっかりほりかえしていくうちに、とうとう、小さいあたたかいものを、ほりあてました。

「しっかりしろ、ぼくだよ。」

こう声をかけて、ヘムレンさんは、小さいサロメちゃんをだきあげると、じぶんのセーターとシャツのあいだにいれて、たちあがりました。それから、こんどは古ラケットの雪ぐつをふんばって、ぐんぐん歩いていきました。

といっても、それは小さいサロメちゃんのことなんか、もうほとんどわすれてしまって、ただもう、あたたかいジュースのことばかり考えていたからなんです。

あくる日は日曜日で、風もおさまっていました。どんよりとくもった、あたたかい日でしたか



ているサロメちゃん……。
さいごに、ヘムレンさんは、
（ぼくはどうも、あの子にやさしくなかったぞ。）
と考えて、どきっとしました。
でもヘムレンさんは、くよくよなんかしません。ヘムルという動物は、めったなことでは、くよくよなんかしないのです。けれど、それだけ、小さいサロメちゃんを見つけることには、いよいよねっしんになりました。
ですから、ほんのわずかのにおいでも、かぎおとすまいと、雪の中へひざをついて、においをかぎかぎ、ゆっくりとすすんでいったのです。
においは、小さな動物が、どうしてよいかわからなくなっておびえていたのをしめすように、あちらへこちらへと、ちょこちょこうごいていました。
たしかにいちど、ちょこちょこばしりさんは、橋のところまでおりていって、あぶないくらい、川っぷちに近づいていました。ところが、そこからにおいは山のほうへむかったまま、そこできえていました。
「こいつは、なかなかほねのおれるしごとだぞ。」
こういって、ヘムレンさんは、しばらく考えこんでいましたが、まもなくかれは、雪をほりは

ぬのめそめそのよりはいいのです。おまけに、めそめその鼻は、心がくさくさしているために、いまはすっかりだめになっていました。

ヘムレンさんは、屋根うらで見つけた、二本のテニスのラケットを、雪ぐつのかわりにしました。かれは、地面に鼻をくっつけるようにして、ゆっくりとふぶきの中をすすみました。それは、小さいサロメちゃんのにおいが、すこしでもどこかにのこっていないかと、さがしだそうとしていたからです。

とちゅうでヘムレンさんは、じぶんのイグルーの中をのぞいてみました。そこには、あのちょこちょこばしりさんのにおいがただよっていました。きゅっと、かれのむねを、あついものがしめつけました。

（そうだ、あのちびさんは、ここへぼくをたずねてきたっけ。あれはいったい、なぜだったのかな。）

はっきりとではありませんが、ヘムレンさんは、きゅうに思いだしました。——ちょこちょこばしりのサロメちゃんが、なにかじぶんに話そうとしたけれど、気おくれして、いわないでしまったことを。

ふぶきの中を歩きつづけながら、ヘムレンさんは、いろんなことを考えました。スキーの丘でまっているサロメちゃん……じぶんのあとを追ってくるサロメちゃん……らっぱに鼻をくっつけ

おしゃまさんは、こういってから、ちょっとばかりにやにやしながら、つけくわえました。
「あんた、『おさびし山』のことを、話したらしいわね。」
「それがどうしたい。」
と、ムーミントロールは、むっとしていいました。
おしゃまさんは、いっそうにやにやして、いいました。
「あんたは、ほんとにいいくるめるのがおじょうずね。ヘムレンさんが話してくれたわよ。――『おさびし山』のスロープは、なってないんだって。そして、おれはみんなにとてもすかれてるらしいといって、ひどくよろこんでたわよ。」
「だけど、ぼくのつもりでは……。」
と、ムーミントロールはいいかけました。
「安心しなさいよ。わたしたちだって、ヘムレンさんをすきになりかけているのかもしれないわよ。」
おしゃまさんは、こういったものです。
ヘムレンさんが、こまかいことには気がつかず、じぶんがまわりの人たちにどう思われているか、とんと感じなかったということは、ほんとかもしれません。でも、ヘムレンさんの鼻は、い



あたたかいジュースのコップが、空中をすべってきました。
「ありがとう。」
ムーミントロールは、すがたの見えないとんがりねずみにむかってお礼をいってから、またききました。
「だけど、サロメちゃんは、外へでたことがないじゃないの。」
「どうしてでたのか、おいらにも、ぜんぜんわからんのだ。おまけに、あらしがやむまでは、どうにもならんときてる。どこかで、雪にうずもれてるんじゃないかな。」
こういったのは、年よりのホムサでした。
「じゃあ、ヘムレンさんは？」
と、ムーミントロールは、いそいできききました。
「あの人は、とにもかくにも、さがしにいったね。」

ば、おまえも、ほかのやつとにたものさ。これからは、もうだまされないよ。）
そうやってかれは、おどりながら、長い海岸を、ずっと遠くまで、冬につれられていきました。いつのまにか、雪にうずもれた桟橋のすぐそばまで、きていました。水あび小屋のまどごしに、ぼんやりしたあたたかい光が見えました。
「おや、ぼくはたすかったのか。」
ムーミントロールは、なんだかがっかりして、いいました。
「スリルのあることって、それがもうこわくなくなって、ようやくたのしめるようになったころは、きっと、おしまいになっちゃうんだなあ。ほんとにつまんない。」
ドアをあけると、あたたかい空気が、ほかほか湯げをたてて、あらしの中へ流れだしました。のぞいてみると、水あび小屋は満員でした。
「ひとりかえってきたぞ。」
と、だれかがさけびました。
「じゃあ、ほかにもまいごになったものがいるのかい。」
と、ムーミントロールは、目の雪をぬぐいながら、ききました。
「ちょこちょこばしりのサロメちゃんが、ふぶきの中へきえてしまったのよ。」
おしゃまさんが、しんけんな顔をしていいました。

ぶきにむかってどなりつけてやりました。ところが、いくらどなっても、だれにもきこえないのです。かれはすこしばかりなき声になって、雪につかみかかりました。

そのあげくは、とうとうへたばってしまいました。

かれは、ふぶきに背をむけて、ふかれるにまかせました。

そのときはじめて、ムーミントロールは、ふいている風があたたかいのに気がつきました。それは、かれをふぶきの中へまきこんで、からだをかるくさせ、まるで空をとんでいるような気持ちにさせるのでした。

（ぼくは空気なんだ。風なんだ。ふぶきにまじってとんでいけ！）

ムーミントロールは、こんなことを思いながら、ふかれて歩きました。

（こいつは、このまえの夏とおなじことだぞ。あのときも、はじめは波にさからっていたけれど、くるりとむきをかえて波にのったら、水しぶきの中にかわいいにじをいくつも見ながら、まるでキルクみたいに、かるがると流されていったっけ。そして、げらげらわらいながら、すこしはスリルもあじわって、砂浜へうちよせられたんだ。）

そこでムーミントロールは、うでをひろげてとんでいきながら、にっこりして、つぶやいたのです。

（さあ、いくらでもおどかすがいいや。もう、おまえのやりかたはわかったぞ。わかってしまえ

ムーミントロールは、四つんばいで、はいつづけました。目は雪でふさがれてしまい、鼻の上には、大きな雪のかたまりがくっついていました。これはてっきり冬のやつが、

「どうだ、おれさまにはとてもかなうまいが。」

とばかり、かれの力をためしているのだと、ムーミントロールは思いこみました。はじめは、ふわふわ舞ってくるきれいな雪のカーテンでだましておいて、いよいよかれが冬をすきになりだしたとたんに、そのうつくしい雪を、むちゃくちゃにかれの顔にたたきつけるとは。

だんだん、ムーミントロールは、はらがたってきました。かれはたちあがって、ふ



きみのわるい風が、こおった海の上をふきぬけては、またふきもどりました。海べの林も、ざわめいています。どす黒い青さがまし、ふきつける風が、はげしくなってきました。だしぬけに、大きな戸が風にふきとばされてきたみたいに、くらやみが、さあっとあたりにひろがったと思うと、すべてのものが、べとべとしたよこなぐりのしめった雪を、いちめんにうけました。

もはや、雪は上からふってくるのではありません。地面にそってとんでくるのでした。いきもののように、ヒューヒューうなって、おしよせました。

ムーミントロールは、からだのつりあいをうしなって、右に左に、ひっかきまわされました。耳の中にまで、雪がいっぱいつまりました。もう、こわくてこわくてたまりません。

時間もなにも、なくなってしまいました。

手でさわれるもの、目に見えるものは、すべてとびさってしまいました。そこにあるのは、おそろしいくらやみの中であれくるっている、しめっぽいつむじ風だけでした。

ものを知っている人なら、いまこそ春がはじまったのだと、かれにおしえてやることができたでしょうに。しかし、このときの浜べには、ものを知った人などいませんでした。ムーミントロールは、すっかりどぎもをぬかれてしまって、風にむかって四つんばいになりながら、まるでけんとうちがいの方角へ、はっていくばかりだったのです。

カーテンがひきあけられたように、海のむこうまで見とおしがきいて、そこには、青黒い雲のかべのあいだから、夕日の光がもれていました。

　ムーミントロールは、遠くでふきあれているらしい、すさまじい空もようをながめました。

　まるで、おしばいのさいごのはげしい場面(ばめん)の、幕(まく)があがったかのようでした。舞台(ぶたい)の上は、水平線(すいへいせん)のかなたまで、白くがらんとしていて、浜(はま)べはぐんぐんくらくなっていきます。ムーミントロールは、ふぶきにみまわれたことなどありませんでしたから、いまにかみなりが鳴るのだと思いこみました。そこで、ゴロゴロッときてもおどろかないように、かくごをきめました。

　けれども、かみなりは鳴りません。

　いなびかりも、しません。

　そのかわりに、海岸(かいがん)のはずれの、白い丘(おか)から、ちょっとした雪のつむじ風がたちのぼりました。



んのことを思いだしました。

サロメちゃんは、たんすからとびおりました。――まず、いすの上へ、それから、ゆかの上へ。へやはからっぽでした。みんな、下の水あび小屋（ごや）へいって、ごはんをたべていたからです。ちょこちょこばしりのサロメちゃんは、まどへよじのぼると、なみだでのどをつまらせながら、ころげるように、雪のトンネルをはしりぬけました。

外には、お月さまも、オーロラの光も、ありませんでした。顔や洋服（ようふく）にくっついて、とても歩きにくくする雪が、ふりしきっているばかりです。サロメちゃんは、ヘムレンさんのイグルーにたどりついて、のぞきました。中はくらくて、だれもいません。

とたんに、サロメちゃんはおそろしくなって、じっとしていられずに、ふぶきの中へとびだしました。

「ヘムレンおじさあん！」

サロメちゃんは、尊敬（そんけい）しているヘムレンさんの名をよびました。でも、まるで羽（はね）まくらをとおしてさけんでいるみたいな、へんなぐあいでした。かの女の小さい足あとは、ふりつもる雪に、すぐさまおおわれてしまいました。

夕がたには、雪もやみました。



あ。）

ムーミントロールは、ほんとにそう思っていたのです。

いつのまにか、空気がやわらいできました。ふりしきる雪で、あたりはなにも見えません。ムーミントロールは、いつでも夏に海にきたときに感じるのとおなじ、あのうっとりした気持ちに、ひきこまれていきました。かれは雨がっぱをぬぎすてて、雪だまりにごろりんとねそべりながら、考えました。

（これが冬か。そんなら、冬だってすきになれるぞ。）

ちょこちょこばしりのサロメちゃんは、なにかにおくれてしまったようなおそろしい感じで、目をさましました。そのとき、ヘムレンさ

「そうなんですよ。ねえ、ここにいてください。ぼくもスキーをおしえてもらいたいし……。」
「そうかい。それなら……。」
と、ヘムレンさんはいって、さいごにいいました。
「きみがそんなにいうなら、ここにいるとしよう。」
ヘムレンさんと話したあと、ムーミントロールは、とてもこうふんしてしまって、まっすぐに家へはかえれませんでした。かわりに海岸へでて、水あび小屋のまわりを、大きくまわり道しました。
歩くにつれて、だんだん気がかるくなりました。しまいには、うきうきしてきたくらいで、思わず口ぶえをふきふき、器用に氷のかけらをけとばしながら、海岸を歩きました。そのうちに、ゆっくりと雪がふりはじめました。それは、新年になってから、はじめての雪でした。ムーミントロールは、たいそうおどろきました。
じぶんのあたたかい鼻の上に、つぎつぎに雪がのっかっては、とけていきます。かれは、それを手でつかまえて、しばらくのあいだ、うっとりとみとれました。それから空を見あげて、それがかぞえきれないほどたくさん、わた毛よりもやわらかく、ふわりふわりと、おちてくるのをながめていました。
（雪って、こういうふうにふってくるのか。ぼくは、下からはえてくるんだと思っていたけどな

する。やわらかい新雪のつもった谷間を、キンキン鳴らしながら、スキーですべりまわるんだ……。」

ヘムレンさんは、なにかにつかれたように、しゃべりつづけました。そうして、こういってムーミントロールに感謝するのでした。

「ぼくのスキーのことを考えてくれるなんて、きみは、なんてやさしいんだろう。」

ムーミントロールは、そんなヘムレンさんをあきれて見つめました。もうだめでした。かれは、思わず声をはりあげてさけびました。

「だけど、あそこの山は、きけんなんですよ。」

「ぼくにとっては、きけんじゃないさ。心配してくれてありがとう。だが、ぼくは、ほんとに山がすきなんだ。」

「でも、あそこの山は、まるでだめなんです。」

と、ムーミントロールは、なおもさけびました。

「がけになってきりたっていて、雪もつもっていないんです。ぼくのまちがいでした。あそこは、ぜんぜんスキーにむいてないことを、いま、きゅうに思いだしました。」

「それはたしかかね。」

ヘムレンさんは、おどろいてさけびました。

にこにこしていました。そこで、ふかく息をすいこんでから、いいました。
「話というのは、『おさびし山』に、とってもすばらしいスロープがあるってことなんです。」
「ほう？」
と、ヘムレンさんはいいました。
「そうなんです。まったくすばらしいスロープですよ。」
ムーミントロールは、せかせかといいつづけました。
「あがったりさがったり、それはすごいんです。」
すると、ヘムレンさんはいいました。
「そりゃ、ぜひいってみなくちゃ。しかし、だいぶ遠いねえ。もし、ぼくがむこうへいったら、もうこの春には、みんなとあえないかもしれん。そうなったらざんねんだなあ。そうじゃないかね。」
「そりゃ、ざんねんですとも。」
ムーミントロールは、心にもないことをいったので、ものすごく赤くなりました。
「けれど、まあ、考えてみてくれたまえ。」
と、ヘムレンさんは、ゆめ見るような顔をしていいました。
「そこには、野天の生活がある。晩にはキャンプファイアをたき、毎朝、あたらしい山頂を征服

た。おかげで、朝のコーヒーも、ごはんも、ぬかしてしまいました。ねすごしてしまったのです。それなのに、だれひとりサロメちゃんがいないことには、気がつかなかったのでした。

コーヒーのあとで、ムーミントロールは、そりすべりをする丘(おか)へのぼっていきました。すると、ヘムレンさんが、大きな声でよびました。

「おうい、よくきたなあ。ごくかんたんな小回転(しょうかいてん)をおしえてあげようか。これならぜんぜんあぶなくないぜ。」

「ありがとう。またこんどね。」

ムーミントロールは、こう答えましたけれど、心の中は、やりきれない思いでした。でも、思いきって、きりだしました。

「じつは、お話があってきたのです。」

「それはよかった。」

と、ヘムレンさんはいいました。

「どうも、あんたたちは、そう話しずきじゃあないらしいね。ぼくがいくと、みんなだまって、こそこそどこかへいってしまうものな。」

ムーミントロールは、あわててあいての顔を見ましたが、ヘムレンさんは、ただゆかいそうに

しかし、おしゃまさんはいいました。

「あの人が住んでるのは、あんたのうちのお庭でしょ。元気をだしなさいよ。あとでは、なにもかも、よくなるのよ。あの人だってもさ。」

それっきりで、あとはしずかになりました。おしゃまさんが、まどからはいだしていったのです。

はい虫のサロメちゃんは、ねどこで目をさましたまま、くらやみの中をにらんで、つぶやきました。

「あの人たち、ヘムレンさんとらっぱを、追いだそうとしてるんだわ。あの人を、谷におとしてしまおうと考えてるんだわ。」

こうなったら、一つしか手だてがありません。ヘムレンさんに、「おさびし山」のことを注意してあげることです。でも、よくよく気をつけて、みんながあの人を追っぱらいたがっていることを、気づかれないようにしなくてはいけません。それからまた、ヘムレンさんがかなしまないように。

ちょこちょこばしりのサロメちゃんは、ひと晩じゅう目をさましていて、あれこれと考えました。サロメちゃんの小さな頭は、そんなむずかしい考えごとには、なれていません。

ですから、朝がやってきたときには、もうどうにもたまらなくなって、ねむってしまいまし

で小さくなっているのよ。こうなっては、だれかがあの人に、でていってくれと、いわなくちゃ。」

「ぼくはごめんだぜ。あの人は、みんなにすかれていると、信じきってるんだものなあ。」

こう、ムーミントロールはいいました。

すると、おしゃまさんがいいました。

「そんなら、だましてでもでていかせなくちゃならないわ。『おさびし山』のスロープは、ここよりずっと高くて、すべるのにいい場所だって、いいなさいよ。」

「だって、あそこには、スキーをやるスロープなんかないじゃないの。ふかい谷や、ごつごつした岩ばかりで、雪もつもらないんだぜ。」

と、ムーミントロールは、なじるようにいいました。

小さいサロメちゃんは、それをきいて身をふるわせて、目になみだをうかべました。

おしゃまさんが、またいいました。

「ヘムルというのは、いつのばあいでも、うまくやるものよ。いったいあんたは、みんながヘムレンさんをきらっていることを、あの人に知らせたほうがいいと思うの。ここのところを、よく考えてごらんなさい。」

「きみがやってくれないかなあ。」

ムーミントロールは、なさけなさそうに、たのみました。

やの小さいサロメちゃんには、それをどけてしまう元気はありません。

そのとき、おくのゆりいすの下で、おしゃまさんとムーミントロールが話しているのが、きこえてきました。ふたりが話しているのは、じぶんの大すきなヘムレンさんのことだと、サロメちゃんには、すぐわかりました。

「いまのままでは、どうしてもこまるわ。」

と、くらやみの中で、おしゃまさんの声がしました。

「わたしたち、なんとかして平和をとりもどさなくちゃ。あの人が、らっぱをブーブーやりだしてからというもの、わたしのとんがりねずみは、ふえをふかなくなってしまったのよ。すがたの見えないお友だちはにげだしてしまったし、お客さんたちは、みんなびくびくして、一日じゅう氷の下でふるえてるわ。それに、めそめそときたら、戸だなの中で、くらくなるま



ちょこばしりのサロメちゃんが、ヘムレンさんをすきでたまらなくなったのは、まったくふしぎなことでした。

サロメちゃんは、もっとらっぱの音楽がききたいと、たえず、ねがっていたのです。ざんねんなことに、ヘムレンさんはとても大きいし、いつでもいそがしいので、そのことには気がつきません。サロメちゃんが、どんなにはしっていっても、スキーをはいたヘムレンさんは、きまって、ぐんぐんさきにすべっていってしまいます。

たまに、らっぱに追いついたと思っても、そのときは、らっぱはもう鳴りやんでいて、ヘムレンさんは、なにかあたらしいことにとりかかっているのでした。

二どか三ど、小さいサロメちゃんは、じぶんが、どれほどヘムレンさんを尊敬しているか、いいあらわそうとしました。けれども、サロメちゃんがあんまり気がよわくて、おどおどしていたものですから、ろくすっぽヘムレンさんは、耳もかさなかったのです。

そんなわけで、意味のあることは、なにひとつ話すことができませんでした。

ある晩、はい虫のサロメちゃんは、海泡石のトロッコの中で、目をさましました。サロメちゃんは、このトロッコのうしろの出入口で、くらしていたのです。そこは、あまりねごこちのいい場所ではありません。なにしろ、その大きな客間のかざりものの中には、ムーミン家の人たちが長いあいだにひろいあつめた、びょうだの、安全ピンだのが、いれてあったからです。はにかみ



ているのでした。
　おおかみの声は、ときにはずっと遠くできこえ、ときには、つい近くでしました。けれども、ほとんど毎晩、きこえたのです。
　そして、それがきこえるたびに、めそめそは鼻を空へつきだして、こっちからも答えました。
　朝がたになると、かれはまた水あび小屋にもぐりこんで、ねむるのでした。
　あるとき、おしゃまさんは、そんなめそめそを見て、ひやかしました。
「そんなことをしていたら、いつまでたっても、おおかみたちをわすれられませんよ。」
　すると、めそめそは答えました。
「ぼくは、わすれたくないのです。だから、毎晩あそこへでかけるんです。」
　そんな中で、いちばんはずかしがりやの、ちょこ

「わかるだろ。わしはおそろしくいぬがすきなんだよ。いつかは、むこうでもすきになってくれるような、そういういぬを飼いたいものと、いつでも考えていたんだ。どういうわけで、きみはわしとあそびたくないのかね。」

「ぼくにも、よくわかりません。」

めそめそは、ぼそぼそいって、顔を赤くしました。そして、すぐまた水あび小屋にもぐりこんで、おおかみたちのゆめを見つづけるのでした。

かれがいっしょにあそびたかったのは、おおかみとなんです。おおかみたちといっしょに狩りをしたり、どこへでもおともをしていって、かれらのやることを、のこらずじぶんでもしたら、どんなに幸福なことでしょう。そうしたなら、じぶんもだんだんに生まれかわって、おおかみのようにつよく、自由になるでしょう。

毎晩、月の光が、まどガラスの氷の花にきらきらとかがやくころ、めそめそは水あび小屋の中で目をさまして、かれらの声をきこうと、耳をすましました。それから、毎晩、毛糸のずきんを耳の上までずりおろして、外へでていくのでした。

かれは、いつもおなじ道をとおって、浜べと丘をよこぎり、南むきの森の中へはいっていきました。そうして、木がだんだんまばらになって、木々のあいだから「おさびし山」がのぞかれる、ずっと遠くまでいくのです。そして、そこの雪の中にすわって、おおかみがほえるまでまっ

（ヘムレンさんが、じぶんでそのことに気がついて、気をわるくしないうちに、ぼくがいって、さそってこなくちゃ。そうだ、ジャムだって、もうじきなくなっちゃうかもしれないからな。）

でも、いかにもほんとうらしくて、しかも気がきいている口実を考えだすのは、そうやさしくありません。

ヘムレンさんは、ときどき海のほうまですべりおりてきて、いぬのめそめそを、水あび小屋からさそいだそうとしました。けれどもめそめそは、いぬぞりにも、スキーのジャンプにも、興味をもちませんでした。ただ、ひと晩じゅう外にでて、お月さまにむかってほえるのでした。そんなわけで、昼はねむくて、ひるねをしたがりました。

しまいに、ヘムレンさんは、スキーのつえから手をはなして、おがむようにしていいました。



「そう、そのとおりよ。」

と、ちびのミイは、しょうじきにいいました。

けれども、すっかりおそわってしまうと、かの女は、だれも知らない、じぶんだけのスキー場へいってしまって、もうヘムレンさんのことは、あいてにしませんでした。

それやこれやで、だんだん多くのものが、氷の下へもぐりこんで、さかなつりをするようになったのです。しまいには、そりすべりをする丘に見られるのは、ヘムレンさんの黒とレモン色のセーターだけになってしまいました。

お客たちは、あたらしいものや、めんどうなことに、ひきこまれるのを、すかなかったのです。

かれらは、じっとすわったまま、氷姫がきて、たべものがなくなってしまうまでのことを、いろいろと話しあうのが、すきでした。めいめい、じぶんはどんなふうに家をかざっていたか、それからまた、あのものすごいさむさがやってきて、すべてがかわってしまったときは、どんなにおそろしかったかなど、それからそれへと話に花をさかせました。

ストーブにかじりついて、おたがいの話をきき、やがては、じぶんも口をきくのです。

ムーミントロールは、ヘムレンさんが、ますますひとりぼっちになっていくのを見て、心の中で思いました。

お客たちは、まえのばんに見たゆめの話をしたり、ムーミントロールが台所でコーヒーをいれている音をきいたりして、できるだけのんびりと、朝のひとときをおくりたがりました。

それなのに、なにもかもヘムレンさんにぶちこわされてしまいました。ヘムレンさんは、きまって、へやの空気がにごっている、ということからはじめて、外は、どんなにつめたくて気持ちがよいか、話してきかせるのでした。

つぎには、きょうという日を、どういうふうにつかったらいいか、しんせつにおしえてくれるのです。じっさい、この大きなヘムルは、みんながたのしい思いをするようにと、できるかぎりのことをしたのです。

しかも、それをことわられても、けっして気をわるくしません。そんなときは、あいてのせなかを、かるくドスンとやって、こういうだけでした。

「うん、そうか。いずれ、ぼくのいったとおりだと、わかってくるだろうがね。」

どこへでも、ヘムレンさんにくっついていくのは、ちびのミイだけでした。おじさんは、スキーについて知っていることは、のこらずすすんでおしえて、ミイがどんどん進歩するのを、目をほそくしてよろこびました。

「おてんばさん。おまえは生まれつきのスキーヤーだよ。わしはじきに追いぬかれるな。」

こう、ヘムレンさんはいいました。



つぎの週、おしゃまさんは氷の下にがんばって、おさかなをつっていました。そのそばには、ムーミン家のお客たちが、みどり色をした氷の下で、一列にならんで、やっぱりさかなつりをしていました。それは、ヘムレンさんとは調子のあわないお客たちでした。

ムーミンやしきでは、元気のない、活発なことのきらいなものたちが、だんだんに、かたまっていきました。

毎朝はやく、ヘムレンさんは、こわれたまどから頭をさしこんで、たいまつでみんなをてらしました。かれは、たいまつやキャンプファイアが大すきでした。だれでも、そういうものはすきですけれど、ヘムレンさんときたら、とくべつなのです。

夜あけのだんだんあかるくなってくるころは、

しょう。そして、にっこりわらいながら、ふりむいたことでしょう。みんなはすっかり感心して、おどろきの声をあげたはずです。

でも、いまは、そんなふうにはいきませんでした。

ムーミントロールは、いったのです。

「ぼく、うちへかえる。あなたはすきなだけ、すべってください。でも、ぼくはかえりますよ。」

それから、だれの顔も見ないで、雪のトンネルの中へもぐりこみ、あたたかいへやのいちばんおくの、ゆりいすの下へ、はいこんだのです。

外からは、スキーをやっているヘムレンさんの、大きな声がきこえてきました。ムーミントロールは、大ストーブの中へ頭をさしこんで、小さな声でいいました。

「ぼくはやっぱり、あいつらがきらいだな。」

ご先祖が、すこしばかり、すすをおとしてよこしました。おそらく、賛成の気持ちをあらわしたのでしょう。

ムーミントロールは、石炭のかけらで、へやのソファーのせなかへ、しずかに絵をかきはじめました。ヘムレンさんが、雪だまりへ頭をつっこんでいるところを、らくがきしたのです。そばの大ストーブの中には、いちごジャムの大きなつぼがはいっていました。

ムーミントロールは、かた足を宙にうかせて、必死で、重心をうしなうまいとしました。ところが、かた足だけが、かってにすべっていきました。

見物人たちは、わいわいいって大さわぎです。まるで、世の中がまた、おもしろくなってきたとでもいうように。

もう、ムーミントロールにとっては、上も下もありませんでした。あるのは、雪と、なさけなさと、おそろしさだけでした。

さいごには、かれはしっぽを氷のような水の中にたらして、川ばたのやなぎの木にぶらさがっていました。目がまわって、そこらじゅうが、にくらしいスキーと、スキーのつえと、みじめなじぶんのすがたとで、うずまって見えました。

「元気をなくしてはだめだよ。さあ、もう一回！」

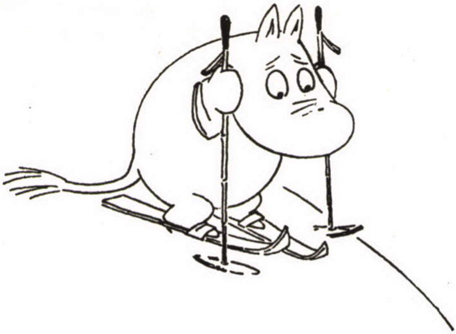
と、ヘムレンさんが、やさしくいいました。

けれども、もういちども、くそも、ありません。ムーミントロールは、すっかり元気をなくしてしまったのでした。まったくのところ、そうだったのです。

ずっとあとになってから、ムーミントロールは、よく空想したものでした。あのとき三回めにすべって、うまく滑走していたら、どうなったろう、と。

そのときは、きっとうつくしいカーブをえがいて、橋の上へ、ひらりと身をおどらせたことで

「いいえ。」
と、ムーミントロールはいいました。
そのとき、どんとせなかをおされて、目をつぶってすべりだしました。はじめは、両方のスキーが、それいじょうははなれないほどに、左右にはなれました。つぎには、両方がくっついてしまって、スキーのつえとからまりました。その上に、ムーミントロールが、へんなかっこうで、のっかっているだけでした。
見ているお客さんたちは、だんだんゆかいに、ほがらかになりました。
ヘムレンさんがさけびました。
「なにごとも、しんぼうがかんじんだ。さあ、ぼうや、元気をだして、もう一回！」
「足がふるえて、だめなんです。」
ムーミントロールは、ぼそぼそといいました。
これでは、ひとりぼっちで冬をすごすよりも、まだわるいくらいでした。かれがあんなにまちこがれたお日さままでが、いまでは谷へまっすぐにさしこんで、ムーミントロールのだらしないありさまを見ていました。
思いきって、すべりだしました。こんどは橋が、もりあがるようにして、こっちをめがけてせまってきました。



ヘムレンさんは、はげますようにいって、ムーミントロールの足にスキーをゆわえつけました。

「だけど、ぼく、ならわなくてもいいの……。」

と、ムーミントロールは、いかにもこまったように、いいかけました。ちびのミイが、そしらぬ顔で見ています。

こうなっては、しかたがありません。ムーミントロールは、かなしそうにいいました。

「やれやれ。だけど、大きな坂はだめですよ。」

「よしよし。橋へおりる坂にしておこうね。」

と、ヘムレンさんはいいました。

「さあ、ひざをまげて。もっとまえへかがむ。スキーが足からはなれていかないようにすること。上体をしゃんとおこして、両うでをからだにつける。さあ、ぼくがいまいったことを、思いだせるかね。」

ちびのミイは、気おくれもせずに、一か八かで、すべりました。あやうくまつの木にしょうとつしかけたけれど、さっと身をかわして、からだのバランスをとりもどしました。それから、ものすごいいきおいで、ムーミントロールのそばの雪の中につっこんで、きゃあきゃあわらいました。

「あの子は、ぼくのむかしからの友だちなんだぜ。」

と、ムーミントロールは、フィリフヨンカに説明しました。

ところが、フィリフヨンカは、にがにがしげにいいました。

「そうでしょうね。――ところで、ここのおうちじゃ、何時にお茶になるんです?」

そこへ、ヘムレンさんが、のっしのっしとやってきました。スキーは、もうはずしていました。その大きな鼻は、気のよさと、あつさで、てかてか光っていました。

「さあ、ムーミントロールくん、スキーをおしえてあげよう。」

「だけど、ぼく……。」

ムーミントロールは、口をもぐもぐさせて、あとじさりしました。たすけぶねをもとめて、いそいで、おしゃまさんのほうを見ました。が、おしゃまさんはいつのまにか、いなくなっていました。たぶん、スープをつくるおさかなを、つりにいったのでしょう。

「こわがることはないさ。」

そのとき、ヘムレンさんが、すべりおりてきました。おそろしいいきおいです。坂のまん中で、きらきらする雪の粉をさっとまいあげて、むきをかえると、こんどはちがうほうへ、すべっていきます。それから、ヤッホーとかけ声をかけて、またむきをかえました。

そうやってヘムレンさんは、さんざんに、すべりまくりました。黒とレモン色のセーターが、いたいほど目にしみました。

ムーミントロールは、目がくらむ思いでした。かれは、心の中で思いました。

（いきものってものは、なんてさまざまなんだろう。）と。

ちびのミイは、丘の上にたって、よろこびと感嘆のまじった声をあげました。かの女は、たるをこわして、その板をくつの下へしばりつけていました。

「こんどは、あたいがいくよ。」

ちびのミイはこうさけぶと、ためらいもせずに、坂を一直線にすべりだしました。

ムーミントロールは、かた目でそっちを見あげて、かの女がりっぱにやりそうなのを知りました。ミイの、おこったような小さい顔は、いかにも自信たっぷりで、両足はしっかりと、大地をふんでいました。

思いがけないことに、ムーミントロールは、きゅうに、とてもほこらしい気持ちになりました。

いったつぼだけは、まだあんまりへっていなかったからです。

しかし、ヘムレンさんは答えました。

「たべないね。いちごのジャムならいいが。」

食後に、ヘムレンさんは、スキーをつけて、ほらあなの上の山からムーミン谷へつづいている、いちばんけわしい坂を、のぼっていきました。下では、お客さんたちが、みんなそろって、それを見ていました。

「いったいあのヘムルは、なにをするつもりだろう。」

と、すこしばかりあやしみながら。

とってもさむい日でした。だから、お客さんたちはみんな、雪の中で足ぶみをしたり、ときどき鼻をかんだりしました。



「つめたい水がすきなのは、すばらしいでしょうね。」
「ぼくの知ってる中で、これがいちばんいいものなんだ。」
ヘムレンさんは、とくいそうにいいました。
「こいつは、よけいな考えや、くよくよした思いを、きれいに追いだしてしまうんだ。たしかに、家にこもってじっとしているほど、わるいことはないね。」
「へえ、そうかしら。」
と、ムーミントロールはいいました。
「そうだとも。そんなことしてたら、すぐにだめになっちまうからな。」
と、ヘムレンさんはいいました。
「ところで、ここでは何時に食事になるんかね。」
「わたしがおさかなをつったとき。」
おしゃまさんが、にこりともせずにいいました。
「ぼくは、さかなはたべないよ。野菜とくだものだけです。」
と、ヘムレンさんはいいました。
「こけもものジャムは？」
ムーミントロールは、期待でむねをふくらまして、たずねました。どろどろのこけももがは

「さむさって、すばらしくないかね。ぼくには、冬ほど調子のよいときはないんだ。どうだい、きみたちも、朝めしまえに、ひとおよぎしては。」

ムーミントロールは、黒とレモン色のジグザグもようになっている、ヘムレンさんのセーターを見つめました。どうしてこのヘムルをすきになれないのかと、ふしぎに思っていたのです。

いままでかれは、えたいの知れないあやしいものではなく、ほがらかでからっとしているものがやってくるのを、まちにまっていたのです。

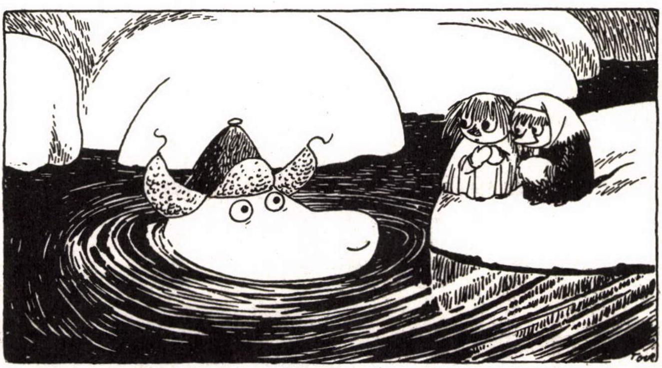
ヘムレンさんこそ、そういう人のはずです。

ところが、いまでは、流しの下にいる、あのおこりっぽい、わけのわからない動物にたいしてよりも、いっそうしたしめない、じぶんとちがうものを、ヘムレンさんにたいして感じるのでした。

ムーミントロールは、じぶんでもこまってしまって、おしゃまさんのほうを見ました。おしゃまさんは、きゅっとまゆをよせて、じぶんの手ぶくろを見つめながら、下くちびるをつきだしました。それでムーミントロールは、おしゃまさんもヘムレンさんをすいていないことを、知ったのです。

ムーミントロールは、ヘムレンさんのほうをむいて、心の中では気がとがめながら、さもしたしそうに、こういいました。

と、おしゃまさんは、まゆをしかめていいました。
「それじゃあ、もう、ここにも平和はなくなるわ。」
こういって、おしゃまさんは、つりざおをおいて、ついてきました。
とちゅうで、ちびのミイが、顔をきんちょうさせて、やってくるのにあいました。
「あんたたち、あの人がつけているもの見た？　スキーっていうものですって。あたいも、いますぐ、あんなのをつくるつもりよ。」
と、ミイは大きな声をだしました。
イグルーは、ぼちぼちできていきました。ムーミンやしきのお客たちは、じぶんにできるおてつだいをしましたが、そうしながらも、ジャムおき場に、ものほしそうな目つきを、ちらちらとなげるのでした。
ヘムレンさんのほうは、川の中でバチャバチャやりながら、こんなことをいいました。





と、ちょこちょこばしりのサロメがききました。
「なんにでも、時期というものがあってね。いまは、はたらくときなのさ。」
と、ヘムレンさんは、ほがらかにいいました。
　しばらくのちには、ぜんぶのお客がよってたかって、ムーミンパパのたばこばたけに、イグルー（エスキモーなどのつくる雪と氷の家）をたてにかかっていました。ヘムレンさん自身は、小さないきものたちが、さむさにふるえて、こわごわ見ている中で、川にはいって、ひとおよぎしたものです。
　ムーミントロールは、ありったけいそいで、水あび小屋へはしりおりると、さけびました。
「おしゃまさん、ヘムルが一ぴきやってきたよ。イグルーをたてるといって、いま、川でおよいでるんだ。」
「まあ、おどろいたヘムルね。」

さい声でいいました。

　ムーミントロールは、ヘムレンさんのところへでていって、いいました。

「どうも、たしかじゃないけれど、いないようですよ。サロメという子ならいますが。」

　ところが、ヘムレンさんは、ムーミンパパのたばこばたけをかぎまわっていて、ろくにきいていませんでした。

「あんたの家は、いいところにありますねえ。ぼくたちも、ここへ、雪の家をたてるとしよう。」

「あなたたちも、ぼくのうちでくらしてもいいのですよ。」

　ムーミントロールは、これはこまったことになりそうだと思いながらも、こういいました。

「いや、ありがとう。」

と、ヘムレンさんは答えました。

「家の中は、きゅうくつでねえ。からだにだってよくないですよ。ぼくは、すがすがしい空気がほしいのです。うんとすがすがしいやつがね。さあ、ぐずぐずしてないで、とりかかるとしよう。」

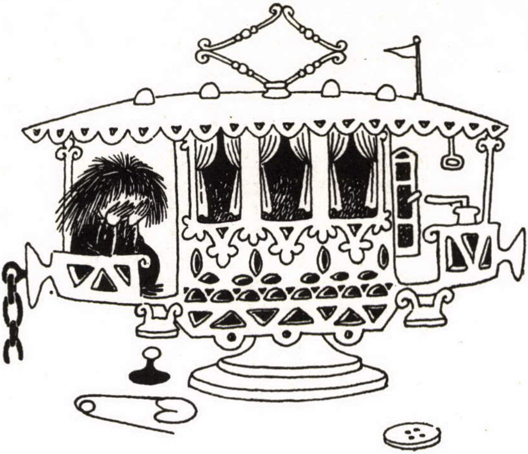
　そのあいだに、ムーミンやしきのお客さんたちが、だんだん家からでてきました。みんなはそこにたちどまって、大きなヘムルを見つめました。

「あの人、もう、らっぱをふかないのかしら。」

「あの人は、たくさんジャムをたべるだろうな。」
と、ムーミントロールは思いました。それに、あの足につけているものはなんでしょう。
　大きなヘムルのヘムレンさんは、らっぱをたきぎ小屋の屋根にのせて、スキーをはずしました。
「いい坂ですねえ。ここらでは、スラローム（スキー用語。くねるように回転しながらすべること）もやりますか。」
「きいてきましょう。」
　こういってムーミントロールは、へやへはいもどって、きいてみました。
「ここに、スラロームという人、いますか。」
「わたしは、サロメっていうんです。」
と、かがみにおびえてしまったはい虫が、小



いこみました。
　ちっぽけなはい虫が、かがみにおびえてしまい、海泡石のトロッコの中で、しくしくないていました。
　そのほかは、しずかでした。ムーミントロールは、心の中で考えました。
（みんな、いろんななやみがあるんだなあ。あのジャムのことなんか、とりたてていうほどじゃないんだ。とくべつのつぼだけ、とりのけておけばいいさ。それは、さしあたり、いちごジャムのつぼだな。）
　日の出ごろ、ムーミン谷は、ほがらかにひびきわたるらっぱの音で、目をさまされました。
　ちびのミイは、ほらあなの中でおきあがって、足びょうしをとりはじめました。おしゃまさんは、耳をそばだてて、なにがおこったのかと耳をすまし、いぬのめそめそは、しっぽをまいて、あわててベンチの下へもぐりこみました。
　ムーミントロールのご先祖は、きげんをそこねたように、調節器をガチャガチャいわせました。お客さんたちも、たいていおきました。
　ムーミントロールは、まどにかけよって、雪のトンネルから外へはいだしました。
　うすい冬の日ざしの中を、大きなヘムルが、坂をすべって近づいてきました。ぴかぴかした金属製のらっぱをもっていて、すばらしく元気そうです。



じゅうがきんちょうして、耳になっていました。

遠くかすかに、おおかみの鳴き声がきこえました。めそめそは、陰気にうなずいて、また、ずきんをふかくずりさげました。

「あれは、ぼくのたくましい兄たちなのです。」

と、いぬはぼそぼそいいました。

「ぼくが、どれほど兄たちをしたっているか、とてもきみにはわからないでしょうよ。」

「きみは、おおかみがこわくないのかい。」

こう、ムーミントロールはたずねました。

「ええ、それがかなしいのです。」

と、めそめそは答えました。

それからめそめそは、ふみかためられた道を、水あび小屋のほうへ、しょんぼりと歩いていきました。

ムーミントロールは、また、おへやの中へ、は

テーブルかけの下にもぐりこみました。いちばん小さなれんじゅうは、ぼうしの中とか、スリッパの中とか、そういうものの中でねむることにしました。

たいていのものが、かぜをひいていました。じぶんの家をこいしがるものもありました。ムーミントロールは、心の中で思いました。

（これはたいへんなことになったぞ。じきにジャム倉は、からっぽになってしまう。春になって、うちの人たちが目をさましたら、ぼく、どういったらいいだろう。絵はでたらめにかけてあるし、家じゅう、よその人でいっぱいだし……。）

ムーミントロールは、トンネルをごそごそとあともどりして、だれか外にのこされていないか、見にいきました。

青い月の光が、あたりいちめんをてらしていました。そんな月の光の中に、いぬのめそめそが、ぽつんと雪の中にすわって、ほえていました。鼻をつきだして、長くひっぱった、いかにもかなしそうな声で、鳴いていました。

「どうしてきみは、うちの中へはいってねないの。」

こう、ムーミントロールはきいてみました。

めそめそは、月の光でみどり色になっている目で、こちらを見ました。かたほうの耳はまっすぐにつったち、もう一方の耳は、よこをむいていました。なにかの声をきいているのでした。顔

かって、雪をかきのけたり、つきくずしたりしたのです。

やっとのことで、ムーミントロールは、雪の中に、細長いトンネルをほりました。ところが、やっと家のかべまでとどいてみると、そこにはドアがなくて、こおりついたまどがあるばかりでした。

「こいつは、ほりそこなっちまったなあ。」

と、ムーミントロールは、思わずぼやきました。

あたらしくべつのトンネルをほってもいいけれど、こんどは、家にいきあたらないかもしれません。そうなったら、たいへんです。そこで、ムーミントロールは、まどガラスを一まいこわしました。お客さんたちは、まどをよじのぼって、家の中にはいりました。

「うちの人たちを、おこさないようにね。」

と、ムーミントロールは注意しました。

「ここにはママがねているし、パパはあそこにいる。むこうにいるのは、スノークのおじょうさんだよ。ご先祖も、大ストーブの中でねむっているんだ。

さあ、みなさん、しきものの下にもぐりこむといいですよ。ほかのとこはぜんぶ、ふさがっちまってるからね。」

お客さんたちは、ねむっている家族におじぎをしました。それから、おとなしく、しきものや

「冬がくることはわかっているんだから、あんたがあらかじめ、その用意をしておかなかったのがわるいのよ。」
といわれたというのです。

夕がた、ムーミン谷は、ジャムの倉庫をあてにしてきた人たちで、いっぱいになりました。いくらかでも足に力がのこっているものは、浜べの水あび小屋までおりていって、そこへ住みつきました。けれども、ほらあなには、だれだって住むわけにはいきませんでした。

「ミムラねえさんを、しずかにしておいてあげなくちゃだめ。」
と、ちびのミイが、いいはったからです。

ムーミンやしきのまえでは、いちばんかわいそうな動物たちが鳴いていました。

ムーミントロールは、石油ランプを手にもって、引きまどからでていき、みんなをてらしていいました。

「さあ、夜にならないうちに、中へおはいり。モランだの、そのほか、きみのわるいものが、そのうちにでてくるよ。」

「わしには、なわばしごはのぼれませんのじゃ。」
と、年とったホムサがいいました。

そこで、ムーミントロールは、入り口のドアまで、雪をかきわけてやりました。シャベルをつ

て、ふたに赤いひもがまいてあるのよ。」

「パパやママがねているあいだは、ぼくが、家にあるものを見はってるんだぞ。」

と、ムーミントロールはいって、赤くなりました。

「ごもっともです。」

めそめそは、おとなしくつぶやきました。

ムーミントロールは、ベランダのほうを見やってから、めそめその、しわのきざまれた顔を見ながら、おこったような声でききました。

「きみは、ジャムがすきなのか。」

「ぼく、知りません。」

と、めそめそがいいました。ムーミントロールは、ため息をついて、いいました。

「まあ、いいよ。だけど、いちばんふるいつぼからあけるんだよ、わかったね。」

しばらくすると、一団の小さい虫たちが、橋をわたってやってきました。一ぴきのフィリフヨンカは、気がちがったみたいに庭をはしりまわって、あわれっぽくなきました。

フィリフヨンカの鉢植えが、こおってしまったのでした。おまけに、じぶんのたべものが、だれかにたべられてしまったのでした。しかも、ムーミン谷へくるとちゅうであった、いばりやのガフサ夫人に、

ました。一ぴきのヘムルなんかは、じぶんがあつめていたこがねむしのコレクションを、あんまりおなかがすくもので、たべてしまったといいます。でも、それはきっとうわさだけでしょう。たぶん、友だちのコレクションでもたべてしまったのでしょうね。」

いずれにしても、おおぜいのものたちが、ムーミン谷へやってきたわけです。

「あそこへいけば、ななかまどの実もあるし、ジャムの倉庫もある。」

と、だれかがいったのでした。ジャムの倉庫というのは、うわさにすぎませんでしたけれど。

いぬのめそめそは、ほそいしっぽをまいて、雪の中にすわりました。あんまり苦労をしたので、顔じゅう、しわだらけになっていました。

「わたしたち、おさかなのスープでくらしているの。だけど、ジャムの倉庫なんて、きいたことがないわ。」

こう、おしゃまさんがいいました。

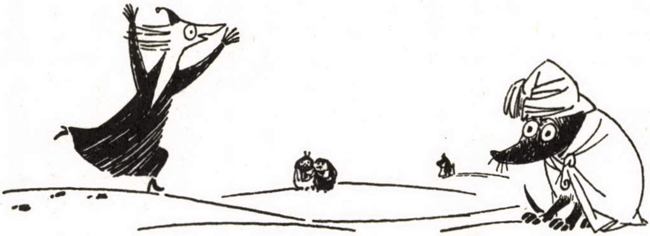
ムーミントロールは、たきぎ小屋のうしろの、まるくもりあがった、ふきだまりのほうへ、ちらりと目をやりました。

「あれがそうよ。」

と、ちびのミイがいいました。

「あそこには、いやになるほどたくさん、ジャムがあるんだわ。みんな、こしらえた年をしるし

第5章



あたらしいお客たち

まいにち、お日さまは、すこしずつ高くのぼりました。そのうちに谷間へも、よわい光がさしこむまでになりました。それは、たいへんだいじな日でした。その日の午後に、よその人がきたからでもあります。

それは、ぼろぼろの毛糸のずきんを、目の上までずりおろした、小さなやせいぬでした。「めそめそ」という名まえなのだそうです。かれのいうには、むこうの谷は、どこにも、たべものがなくなってしまったのだそうです。

「氷姫が谷間へやってきてからというもの、たべるものを見つけるのは、いよいよむずかしくなり

こんなふうに、ムーミントロールは、たのしく思いふけりました。

えんとつをとおして、かれはなにかご先祖に声をかけてみようかと、ちょっと考えてみました。なにか、したしいあいさつのようなものを――。

けれども、思いなおして、そんなことはしませんでした。

ムーミントロールは、ランプをけすと、きわたの中へ、ふかくもぐりこんだのです。

かれは、しばらく思案していました。それから、ごちゃごちゃした道具や、から箱や、おさかなをとるあみや、まるめた紙や、ふるいかごや、お庭の道具のかたまっている中へ、もぐりこんでみました。そうすると、たちまちそこが、すばらしくいごこちがよいのに気がつきました。

ムーミントロールは、ひっくりかえったゆりいすの下にちらかっていた、きわたの中で、ねむることにしました。

だいたいかれは、まどのこわれた、うすぐらいへやの中では、心から安心してねむったことがなかったのです。そんなわけで、家じゅうのみんながぐっすりねむっているのを見ると、かなしくなったものでした。

ところが、いま、から箱と、ゆりいすと、ソファーのうしろの、せまいすきまにはいると、とてもおちついた気持ちになりました。すこしもさびしさを感じなかったのです。

大ストーブのたき口の中に、すこし黒いものが見えました。でも、ご先祖のじゃまをする気は、かれにはありませんでした。そこで、できるだけしずかに、じぶんの寝場所のまわりにかべをめぐらしました。

夕がた、ムーミントロールは、ランプをもってきて、そこによこになりました。大ストーブの中では、ご先祖がごそごそやっている音がしました。

(千年まえは、ぼくはたぶん、こんなふうにくらしていたんだろうな。)

ありました。
それとも、大すきな絵を、そうしたのでしょうか。それはなんともわかりませんね。
家じゅうの道具は、のこらず場所がかわりました。目ざましどけいは、くずいれになげこまれていました。そのかわり、屋根うらから、がらくた類が、いっぱい、ひっぱりだされて、大ストーブのまわりに、つみあげられていました。
おしゃまさんが、そのようすを見にきました。
「いごこちがよくなるように、こうしたんだと思うわ。きっとトロールは、じぶんの寝場所のぐるりに、気持ちのいい草むらみたいなものをつくろうとしたのね。安心していられるように。」
こうおしゃまさんは、鼻をうごめかしていいました。
「でも、ママがなんていうだろうかなあ。」
と、ムーミントロールはつぶやきました。
おしゃまさんは、かたをすくめていいました。
「そんなら、いっそのこと、あの人を追いだしたら、どうなの。とにかく、このトロールは、なにもたべないんだわ。それは、あんたのためにも、あの人のためにも、とてもいいことね。ものごとというものは、なんでも、たのしいほうに考えるものよ。」
ムーミントロールは、うなずきました。



こう、ムーミントロールは、えらそうにいいました。

きゅうにムーミントロールは、先祖をもっていることが、ひどくとくいになりました。ちびのミイなんかには、先祖というものがぜんぜんなくて、まるでまぐれみたいにして生まれてきたのです。そのことを思うと、ムーミントロールは、とてもゆかいになりました。

その晩、ムーミンやしきのご先祖さまは、家じゅうのもようがえをしました。まったくしずかに、けれど、びっくりするような力をだして、それをやったのです。

トロールは、いすを大ストーブのほうへよせてしまいました。絵はすっかり、かけかえられていました。あまりすきでないのは、さかさにかけて

（ぼくらは、たしかに血がつながっているんだ。ママがいつも、ご先祖は大ストーブのうしろでくらしていたと、いってたっけ……。）

とつぜん、ムーミントロールの目ざましどけいが、けたたましく鳴りました。いつも日ぐれどきに、なかまがほしくてたまらなくなるものですから、そのころ鳴るようにしておいたのです。トロールはぎょっとして、つぎのしゅんかんには、灰かぐらをたてて、大ストーブの中へとびこみました。しばらくすると、トロールはおこったのでしょうか、調節器をガチャガチャやりだしました。

ムーミントロールは、目ざましどけいをとめ、むねをどきどきさせながら、耳をすましました。だけど、それいじょうは、なにもきこえませんでした。

すすがすこしばかり、えんとつからゆっくりとおちてきました。調節器のひもが、ふらふらゆれていました。

ムーミントロールは、気をしずめるために、屋根の上へでました。

「いいわね、おじいさんといっしょで。」

と、ちびのミイが、そりすべりをする丘でさけびました。

「とってもすばらしいさ。ぼくたちみたいに、家がらのふるいものは、礼儀というものを知っているからね。」

そこでかれは、ランプをもって、「まどぎわのヨンカ」といううつくしい絵を、てらしてみせました。トロールは、その絵を見つめて、からだをゆすぶりました。

ムーミントロールは、つぎにはビロードのいすのところへいって、それをてらしてみせました。いすというすを、ひとつひとつじゅんぐりに見せ、それから、おへやのかがみや、海泡石のトロッコや、そのほか、ムーミン家の、ねうちのあるうつくしいものは、なにもかも、すっかり見せてやりました。

トロールは、いちいちねんいりにながめました。でも、それがどういうものなのか、ぜんぜんわかっていないようすなのです。しまいに、ムーミントロールは、ため息をついて、ランプを大ストーブのたなの上にのせました。ところが、そのとたんに、トロールが、ひどくねっしんになったのです。

シャンデリアからドスンととびおりると、小さい灰色のぼろのかたまりみたいなかっこうで、大ストーブのまわりをちょろちょろしはじめました。たき口へ頭をつっこんで灰のにおいをかいだり、ししゅうのついた調節器のひもに、つよい興味をしめして、大ストーブとかべのすきまを、じっとのぞきこんだりしました。

(あれは、ほんとなんだな。)

と、ムーミントロールは、こうふんして思いました。

のまゆ毛のこい小さい動物がしゃべったように、わからないことばをしゃべったら、どうしましょう。もし、ご先祖がおこって、「ラダムサ。」とかなんとか、そんなことをいったとしたら、どうでしょう。そうなったら、おたがいがなかよしになることは、ぜったいにできないでしょう。

「しいっ。なにもいわないで。」

と、ムーミントロールは、いそいでいいました。

なんといっても、ふたりは親類なのです。親類の人がたずねてきたら、ゆっくりしてもらうのが、礼儀というものです。まして、ご先祖だとしたら、いつまででもいてもらいます。そんなことは、いうまでもありません。

気をつけないと、トロールがかんちがいをして、おこってしまうかもしれません。そしたら、一生のあいだ、ご先祖をおこらせたまま、くらさなければならないでしょう。

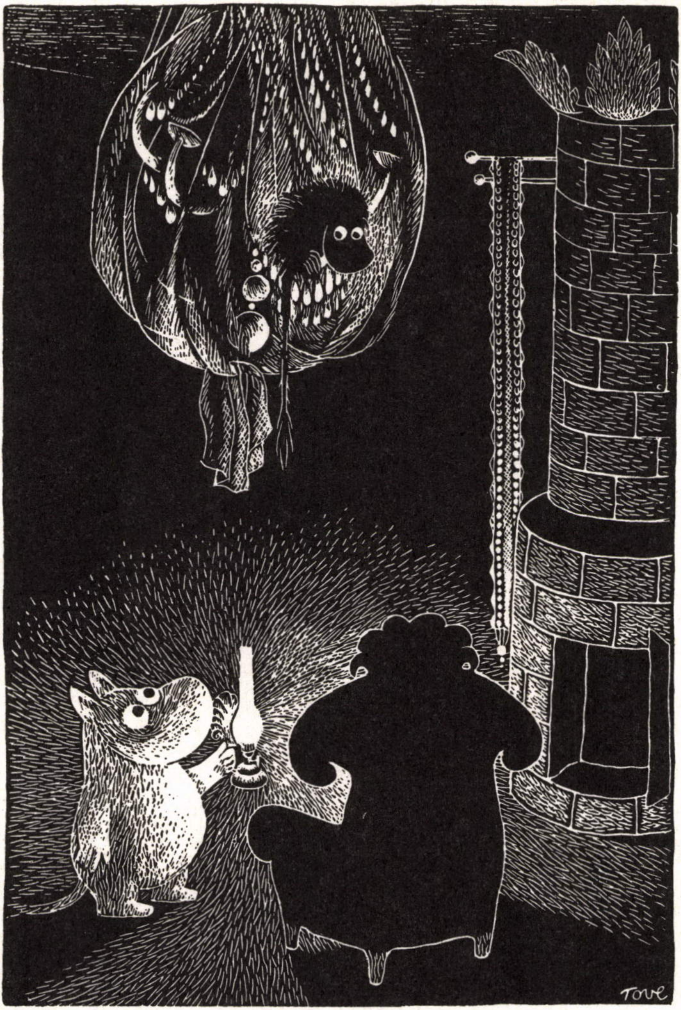
「しいっ、しいっ。」

と、ムーミントロールは、くりかえしました。

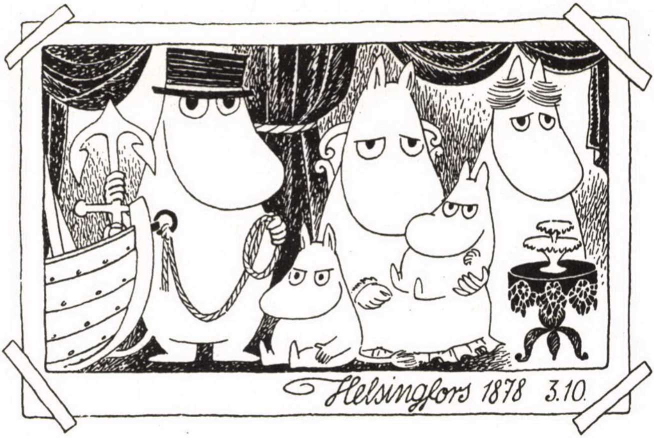
ご先祖は、シャンデリアをゆすぶりましたが、なにもいいませんでした。

（そうだ、うちの中を見せてあげよう。親類の人がたずねてくると、ママはそうするものね。）

こう、ムーミントロールは考えました。


Tove

ほこりよけのレースの中で、なにかがうごいています。それは、毛むくじゃらの小さないきもので、長い黒いしっぽが、ガラス玉のあいだから、たれさがっていました。
「あ、あんなとこにいるよ。」
と、ムーミントロールは、つぶやきました。
「ぼくのご先祖は、シャンデリアの中に住みついたんだな。」
でも、それほどきみわるくは思いませんでした。ムーミントロールも、ふしぎな冬の世界に、いままでは、なれてきていたのです。
「お元気ですか。」
と、ムーミントロールは、おちついて、たずねました。トロールは、レースの中からこちらを見て、耳をうごかしました。
「シャンデリアに気をつけてください。それは、うちのたからものですからね。」
こう、ムーミントロールは、つけくわえました。
トロールは、くびをかしげて、じっと耳をかしているようすです。
(なにかいうつもりかな。)
と、ムーミントロールは思いました。
すると、そのとたんに、ご先祖さまがなにをいうか、心配でたまらなくなりました。もし、あ



と、ムーミントロールはどなりました。それから、屋根うらへあがっていって、一家のアルバムをさがしてきました。

　どのページにも、ムーミンたちがすましこんで、たいていは、大ストーブのまえか、ベランダで、うつっていました。あそこの戸だなにいたトロールとにているものなど、ひとりもありません。

（あんなの、うそっぱちだ。ぼくは、あんなやつと、血のつながりなど、ありっこがないさ。）

こう、ムーミントロールは考えました。

　かれは、ねむっているパパをながめました。あのトロールとにているのは鼻だけでした。でも、千年まえは……。

　ふいに、シャンデリアのところで音がしました。ゆっくりと、シャンデリアは前後にゆれて、

ぐひきぬかれて、そのいきものは、たちまち見えなくなってしまいました。
そこへ、おしゃまさんが、スープなべをもってやってきて、いいました。
「おやおや、あんたはけっきょく、戸だなをあけずにはいられなかったのね。」
こう、ムーミントロールは、にがにがしげにいいました。
「あそこには、おいぼれのねずみみたいなものが、いただけだい。」
と、おしゃまさんがいいました。
「あれはねずみじゃないわよ。」
「あれは、トロールなの。あんたも、ムーミントロールになるまえは、ああいうトロールだったのだわ。千年まえには、あんたも、あんなだったのよ。」
ムーミントロールは、どうへんじをしたらいいのか、いうべきことばが見つかりませんでした。かれは、家へかえると、おへやの中で考えこみました。
しばらくすると、ちびのミイが、ろうそくとおさとうをかりにきました。ミイは、にやにやしていいました。
「あんたのことで、おそろしいことをきいたわ。あんた、じぶんのご先祖(せんぞ)を、戸だなから追(お)いだしたんだってね。あんたたち、にているそうじゃないの。」
「えい、やかましい。」

す。
　ところが、ゆかの上に、なにか小さいものがいて、こっちをにらんでいるではありませんか。それは、長い毛におおわれた、大きな鼻をした、灰色のものでした。
　それが、さっとうごいたかと思うと、風がふきぬけるように足もとをすりぬけて、にげていきました。しっぽが、黒いひものように、水あび小屋の入り口をすべっていくのが見えました。毛のふさが、ほんのちょっとのあいだ、ドアのすきまにはさまりました。でも、それもす



おしゃまさんは、こういうと、スープなべに海の水をいれるために、氷の下へもぐりこみました。

もちろん、おしゃまさんがいったとおりです。太陽が空に高くのぼるには、それだけのわけがなくてはなりません。けれども、あいてのいうことがあんまりただしいと、かえってうんざりしてしまうものですね。

ムーミントロールは、じっと氷の下を見つめているうち、なぜだか知らないが、きゅうに、はらがたってきました。おなかが、にえくりかえるような気持ちでした。じぶんがばかにされたと思ったのです。

考えてみれば、じぶんが大さわぎをしたのは、はずかしいことでした。耳に金のリボンなんかつけたのも、はずかしいことでした。そう思うと、よけいにはらがたってきました。しまいには、なにかとんでもなくらんぼうな、いけないことをしないと、おさまらなくなってしまいました。それも、いますぐやらなくてはだめです。

ムーミントロールは、ぱっとはねおきると、橋をいそいでわたって、水あび小屋へかけこみました。そして、まっすぐに戸だなのところへいくと、ドアを、さっとあけました。そこには、水着がつるしてありました。

もうふくらまなくなったへムル形のうきぶくろも、ころがっていました。去年の夏のまんまで

「これが、大さわぎするほどのことなの？」
「そうとも。」
と、ムーミントロールは、さけびました。
「春になるんだ。あたたかくなるんだ。みんなが、目をさますんだ！」
かれは、四ひきのおさかなをつかんで、高くほうりあげると、氷の上で、さかだちしました。
こんなにうれしく思ったことは、いままでについぞありませんでした。
そのとたんに、氷の上は、またもやくらくなりました。
からすはとびたって、陸地のほうへ、のろのろととびさりました。おしゃまさんは、じぶんのおさかなをひろいあつめました。糸のようにほそい、赤い太陽は、水平線からもうしずんでしまったのです。
「お日さまは、でてくるのをいやがっているのかなあ。」
ムーミントロールは、おろおろしていいました。
「あんたが、あんなことをするからよ。」
ちびのミイは、こういって、ブリキのふたですべっていってしまいました。
「お日さまは、またあしたでてくるわ。そのときは、もうすこし大きくなってるわよ。チーズの皮くらいだけれどさ。だから、安心しなさい。」

陸のほうから、年とったからすが二わとんできて、水あび小屋の屋根にとまりました。

一分、二分、時がたちます。

ふいにムーミントロールは、どきっとして、むねをとどろかしました。赤い光線が、はるか水平線のかなたの、うすぐらい空に、あつまるのが見えたのです。それは、小さな赤いかたまりになって、長い光のすじを、氷の上になげました。

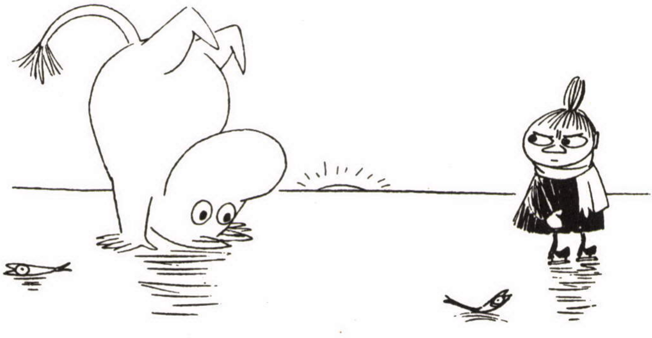
「お日さまだ！」

ムーミントロールは、思わず大きな声をだしました。

かれは、ちびのミイをだきあげて、その鼻の頭にキスしました。

「いやよ、ばかなことしないで。」

と、ちびのミイはいいました。



ムーミントロールが、どなりました。
「お日さまが。」
と、こだまが、くりかえしました。
「お日さまが、お日さまが、お日さまが……。」
氷の下の、ずっとずっと遠くまで、声はだんだんよわまりながら、ひびいていきました。
おしゃまさんは、つり糸をしまいこみながら、いいました。
「あんた、そんなにあせっちゃだめよ。お日さまは、毎年この日にやってきたのよ。だから、こんどだって、きっとくるわ。ちょっと鼻をひっこめてよ。わたし、あがるから。」
おしゃまさんは、氷のあなからはいあがって、水あび小屋の階段にこしをおろしました。それから、ぴくぴく鼻をうごめかし、耳をすましてから、こういいました。
「もうじきよ。ここにすわって、まってなさいな。」
ちびのミイが、氷の上をすべってきて、ふたりの横へこしかけました。すべりやすいように、長ぐつの下に、ブリキのふたを、しっかりとゆわえつけていました。
「これから、なにかすばらしいことが、はじまるらしいわね。」
こう、ミイがいいました。
「あたいだって、あかるくなることには、ちっとも反対じゃないのよ。」

クしました。ちょっとまってから、またノックしました。
「ほうい、あたし、氷の下よ。」
と、おしゃまさんは、声をはりあげました。
　こだまが、氷の天じょうにはねかえって、
「ほうい。」
とさけびました。かの女の声は、なんべんもいったりきたりして、さけびました。
「氷の下よ。」って。
　やがてムーミントロールが、おそるおそる、氷のあなから、鼻をつきだしました。耳には、ふさふさした金のリボンをつけています。
　ムーミントロールは、さむさで湯げをたてている黒い水と、おしゃまさんがつった、四ひきのかちかちにこおったおさかなとを見ました。
　かれは、ぶるぶるふるえながら、いいました。
「もう、こないんだよ。」
「だれが？」
と、おしゃまさんがききました。
「お日さまが。」



おしゃまさんは、氷の下で、おさかなをつっていました。
「海が、ときどき水がへって、すこししずむのは、とってもよいことだわ。」
と、おしゃまさんは考えました。
水あび小屋のそばの、氷のあなからもぐりこんで、岩の上から、つり糸をたれさえすれば、それでいいのです。頭の上には、気持ちのよい青々とした氷の天じょうがあるし、足の下は、海ですからね。その黒いゆかと、みどりの天じょうがくっついて、どこまでもつづき、遠くのほうはまっくらに見えます。
おしゃまさんのそばには、小さなおさかなが四ひき、ころがっていました。もっとたくさんつって、おさかなのスープをつくろうというのでした。
とつぜん、せかせかした足どりが、桟橋をゆさぶりました。頭の上で、ムーミントロールが、水あび小屋の戸をノッ

ンプのところへいきました。ムーミントロールが見ていると、ランプもすぐにきえてしまいました。

しばらくのあいだ、モランは、じっとうごきませんでした。

山にはもうだれもいません。みんな、かえっていってしまったのです。モランは、また、こおった海の上へすべりおりて、くらやみの中へきえていきました。きたときとおなじように、ひとりさびしく、さっていったのです。

ムーミントロールも、家へかえりました。

ねるまえに、かれは、そっとママの耳をひっぱって、いいました。

「お祭りは、あんまりたのしくなかったよ。」

「そうかい、そうかい。だけどね、このつぎのときは……。」

ママはゆめの中で、むにゃむにゃいいました。

しかし、流しの下には、あのブラシのようなまゆ毛をした動物がいて、ひとりでぶつぶつ、いっていました。

「ラダムサ。ラダムサ！」

そういってかれは、かたをすくめました。おそらく、それがどんな意味かは、じぶんだけにしか、わからないことでしょう。



が晴れたかと思うと、もうのこり火は、なくなっていました。大きな、灰色のモランが、湯げをもうもうとたてているばかりでした。

ムーミントロールは、海岸へおりていくと、おしゃまさんをつかまえてさけびました。

「どうなるだろう。モランが、お日さまをけしてしまったよ。」

「しっかりしなさい。」

と、おしゃまさんはいいました。

「あの人は、火をけしにきたんじゃないの。かわいそうに、あたたまりにきたのよ。でも、あたたかいものは、なんでも、あの女の人がその上にすわると、きえてしまうの。いまは、またきっと、しょげかえっているわ。」

モランがごそごそやって、ひえきったもえがらのにおいを、かいでいるのが見えました。それからかの女は、山の上でもえつづけている、ムーミントロールの石油ラ

「さあ、しまった。ぼく、なにかいいことをいおうとしただけなのになあ。あの人は、それとも知らないで、これからまる一年も、また流しの下でくらすことになるんだ。」
「そういうことだってあるものよ。」
と、おしゃまさんは、平気でいいました。
庭のベンチが、火の粉をあげて、もえくずれました。
もう、もえるものがありません。すべてのものが、まっかなおきになり、雪どけの水は、岩のあいだでにえたぎっていました。
そのとき、とんがりねずみが、歌をやめました。みんなは、ふしぎに思って、氷の上をながめました。
そこには、氷の精みたいなあのモランが、すわっていたのです。その小さいまるい目には、火がうつっていました。しかし、そのほかは、ものすごく大きいだけの、灰色のかたまりです。夏のころよりも、ずっと大きくなっていました。
そんなモランが、のそのそと山へのぼってくると、たいこも鳴りやみました。
モランはまっすぐに、かがり火のところへいきました。そして、ひとこともいわずに、そのまん中へ、のっそりとすわりこんだのです。
ジューッと、すさまじい音がして、火の山ぜんたいが、湯げにつつまれてしまいました。それ

「なんですって。」

ムーミントロールは、びっくりして、ききかえしました。

「ラダムサ。」

あいては、おこっていいました。

「この人は、じぶんだけのことばを、もっているんですよ。あんたが、わるいことをいったと思って、おこってるのよ。」

こう、おしゃまさんが、説明しました。

「でも、ぼくはちっとも、そんなつもりじゃ、なかったんだけどなあ。」

ムーミントロールは、心配そうにいって、

「ラダムサ、ラダムサ。」

と、いのるような気持ちで、つけくわえました。

すると、まゆ毛のある動物は、ほんとにかっとなってとびあがって、どこかへいってしまいました。



のつのをしたのが、ムーミントロールのそばを、のっしのっしととおりすぎました。火の上を、なにか黒いものが、大きくはばたいて、北のほうへとんでいきました。

　でも、みんなとてもはやくて、ムーミントロールは、顔をあわせるひまもありません。

「ねえ、おしゃまさん。」

　ムーミントロールはなきそうになって、おしゃまさんのセーターをひっぱりました。

　すると、おしゃまさんは、やさしくいいました。

「むこうに、流しの下に住んでいる人がいるわ。」

　それは、ブラシのようなまゆ毛をした、かなり小さな動物でした。ひとりでぽつんとすわって、火の中を見つめていました。

　ムーミントロールは、そのそばにいってこしをおろして、きいてみました。

「らいむぎのパンは、かたすぎないですか。」

　その動物は、こちらに目をむけましたが、なんとも答えません。

「あなたは、まるでブラシみたいな、すごいまゆ毛を、もってるんですね。」

　こうムーミントロールは、ていねいにつづけました。

　すると、まゆ毛のある動物が、へんじをしました。

「シュナダフ、ウムウ。」

「どうして、みんな、いってしまったんだろうな。」
と、ムーミントロールは、つぶやきました。
　おしゃまさんが、そのしずかな青い目で、ムーミントロールを見つめました。けれども、ほんとうにムーミントロールを見たのかどうか、よくわかりません。おしゃまさんは、ムーミンたちがうちの中で、ぬくぬくとねむっているあいだに、毎年、ちゃんとうごいていく冬の世界を、のぞきこんでいるのでした。
「水あび小屋の戸だなに住んでいる動物たちは、どこにいるの。」
と、ムーミントロールは、きいてみました。
「あんた、なにかいった？」
と、おしゃまさんは、うわのそらでいいました。
「ぼく、戸だなに住んでる人たちと、あいたいんだ。」
　ムーミントロールは、くりかえしました。
「あの人たちは、でてこないわ。」
と、おしゃまさんがいいました。
「ああいう人の考えてることって、わたしたちにゃ、とてもわかりっこないわ。」
　足の長い、小さないきものが、ぞろぞろとけむりのように、氷の上をすすんできました。銀色

がたの見えないとんがりねずみが、冬祭りにおくれてはたいへんと、いそいでいたのです。
小さいかげや、大きいかげが、山の上の火のまわりを、おごそかにはねまわりながら、うごいていました。しっぽで、たいこをたたきながら。
「ほら、あんたの庭のベンチも、もえてるわ。」
と、ちびのミイがいいました。
「ベンチなんか、なんだい。」
ムーミントロールは、おこったようにいいました。それから、火の光にてらされている、こおりついた山を、よろめきながらのぼりはじめました。雪が熱でとけて、あたたかい水が、ムーミントロールの足の上を流れました。
（お日さまが、かえってくるんだ。くらやみも、ひとりぼっちも、おしまいになるんだ。ベランダで日光にあたって、せなかをあたためて……。）
ムーミントロールは、こうふんして、こんなことを心の中で考えました。
やがて、ムーミントロールは、山の上へでました。かがり火のまわりは、あついくらいです。すがたの見えないとんがりねずみたちが、べつの、あらっぽい歌を、うたいはじめました。だけど、さっきまでおどっていたかげたちは、いなくなってしまい、たいこも、火のむこうで鳴っているだけでした。


Tove

引きまどをあけてみましたが、月はまだ見えませんでした。でも、谷間はオーロラの光でほんのりとてらされていました。下の、橋のきわには、一列のたいまつが、ちらちらするかげにつつまれて、うごいていました。海のほうへいくのもあるし、山のほうへいくのもあります。

ムーミントロールは、火をつけたランプを手に、用心ぶかく、なわばしごをおりました。庭も森も、ぼんやりした光と、ざわざわいう話し声であふれています。足あとという足あとは、山のほうへ、山のほうへとつづいていました。

海岸へでると、月が青白く、はるか遠くまで、氷の上をてらしていました。

そのとき、なにかがムーミントロールのそばで、うごきました。よく見ると、それはちびのミイの、おこりっぽい目が、きらきら光っているのでした。

「さあ、大かがり火よ。お月さまの光なんか、すっかりけしちゃうんだ。」

こういってミイは、けらけらわらいました。

それと同時に、ふたりは山のほうをながめました。黄色いほのおが、いきおいよくのぼりました。おしゃまさんが、たきぎの山に火をつけたのです。

つぎのしゅんかんには、たきぎの山は、下から上までもえさかって、ライオンのようなうなり声をあげました。すぐ下の、黒い氷の上に、そのすがたが、あざやかにうつりました。

とたんに、小声のさびしい歌声が、ムーミントロールのそばを、いそいでかけぬけました。す

そこへちびのミイが、じぶんのボール紙の箱を、ひきずってきていいました。
「これはもういらないの。銀のおぼんのほうが、のりいいし、それに、ねえさんも、おへやのしきものの中でねるほうが、いいらしいもの。ところで、いつ火をつけるの。」
「お月さまがのぼったらよ。」
と、おしゃまさんはいいました。
その晩はずっと、ムーミントロールは、すごく気がたっていました。へやをつぎからつぎへとまわって、いつもよりずっとたくさん、あかりをつけました。
ときどき、じっとたちどまって、耳をすましては、ねむっているものたちの寝息をききました。そのうちに、いよいよさむさがひどくなって、かべの中でなにかがはじける、ミシミシいう音がきこえました。
たしかに、いま、あのおかしな動物たち——おしゃまさんのいっていた、光をおそれる、この世のものではない動物たちが、ぞろぞろと、ひみつのあなからはいだしてくるのでしょう。くらやみとさむさをやわらげるために、いま小さな動物たちがもやすかがり火のところへ、きっとやってくるのでしょう。そうなったら、きっとムーミントロールも、そういう動物たちを、見られるはずです。
ムーミントロールは、石油ランプをつけて、屋根うらへあがりました。

ムーミントロールは、しばらくのあいだ、口もきけませんでした。それから、心配そうにいいました。

「庭のベンチのこと、お日さまは気がつくだろうか。」

「なにをいってるのよ。」

と、おしゃまさんがきびしくいいました。

「このかがり火は、あんたのお庭のベンチなんかより、千年もふるいのよ。あれがこの火の中へいれてもらえたことを、あんたは、ほこりに思うべきだわ。」

こういわれては、ムーミントロールは、それいじょう、なにもいえませんでした。そこで、心の中で考えました。

（うちのみんなに、そのとおりにいってやらなくちゃ。それに、春のあらしがきたら、あたらしい材木や、あたらしいベンチが、きっと流れつくだろうものな。）

たきぎの山は、どんどん大きくなりました。かわいた木が、その山の上へ、ぐいぐいひっぱりあげられました。海岸で見つかった、くさった木やみきや、ふるいたるや板も、つみあげられました。

それなのに、まだ、だれのすがたも見えません。ムーミントロールは、山じゅうに、なかまが大ぜいいるのを、知っていました。しかし、そのすがたを見ることは、できませんでした。



まっくらやみの夜を

「きみたちのやみ夜は、もうたくさんだよ。」と、ムーミントロールがさけびました。

「いや、そんな歌のくりかえしはききたくない。ぼくは、さむさでこごえそうだ。おまけに、ひとりぼっちで、さびしくてたまらない。はやくお日さまがかえってこないかなあ。」

「だからこそ、こんばん、冬の大かがり火をもやすんじゃないの。」

こう、おしゃまさんはいいました。

「あんたのお日さまは、あしたかえってくるはずよ。」

「ぼくのお日さまが？」

ムーミントロールは、ぶるぶるふるえながら、あいてのことばをくりかえしました。

おしゃまさんはうなずいて、とくいそうに、鼻(はな)をこすりました。

「冬の大かがり火をたく、おしゃまさんの歌をききたくない？」
「そりゃ、ききたいさ。」
と、ムーミントロールは、いきおいこんでいいました。
するとおしゃまさんは、雪の中を、ゆっくり足ぶみしてまわりながら、うたいはじめました。

さあ　おいで　口のきけないものや
さびしいもの　道にまよっているもの
らんぼうものも　おとなしいものも
――たいこがドンドコ
かがり火が　はじける
白く　また　黒く
しっぽをふって
はねたり　おどったり
――たいこをドンドコ
たたいて　おどろう

わざだぞ。）
ムーミントロールは、かんかんになって、あとをつけました。一家の燃料の番ができるのは、ムーミントロールよりほかにはないのですから、それがぬすまれては、かれの名誉にかかわります。
ふくろをひきずったあとは、ほらあなのうらの、山のところでおわっていました。そこに、泥炭のふくろが、山のようにつみかさねられていて、その上に、ムーミン一家の庭のベンチまで、のせてあるではありませんか。去年の八月に、まえ足がとれてしまったベンチです。
「このベンチは、きっとよくもえることよ。」
おしゃまさんがこういって、山のうしろから、顔をだしました。
「ふるくなって、かれ草みたいに、かわいてるものね。」
「うん。あれは、もうずいぶん長いこと、ぼくのうちにあったんだものね。でも、修繕すれば、まだつかえるのになあ。」
こう、ムーミントロールはいいました。
「いっそ、あたらしいのをつくることね。」
といって、おしゃまさんは、それからムーミントロールにききました。

第4章



おかしな人たち

りすのお葬式がすんで、何日かたったときです。

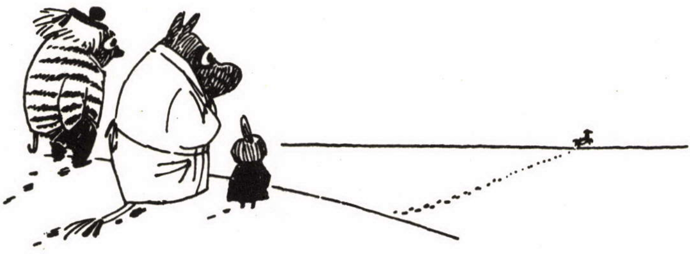
　ムーミントロールは、たきぎ小屋から、泥炭がぬすまれているのを、発見しました。

　戸の外には、だれかがふくろをひきずっていったような、はばひろいあとが、雪の中につづいています。

（これは、ちびのミイのしわざじゃないな。）

と、ムーミントロールは考えました。

（あいつは、こんなことをするには、小さすぎる。そして、おしゃまさんだったら、必要なだけしかとらないはずだ。これは、きっとモランのし



それでもやっぱり
すばらしいしっぽをもったりすです

雪のうまは、足の下にかたい氷がさわると、頭を高くもたげました。目はあかるくもえあがりました。そして、だしぬけにおどりあがったと思うと、すばらしいはやさではしりだしました。目に見えないとんがりねずみのふえは、テンポのはやい、陽気なしらべにかわりました。白い雪のうまは、りすをせなかにのせたまま、みるみる遠ざかっていって、しまいには地平線の上の、ただの点になってしまいました。

「お葬式はこれでよかったんだろうか。」

ムーミントロールが、気がかりそうにいいました。

「これいじょううまくは、いきゃしないわ。」

と、おしゃまさんはいいました。

「そうかもしれない。ただ、あのきれいなしっぽは、あたいのマフにしたかったけどなあ。」

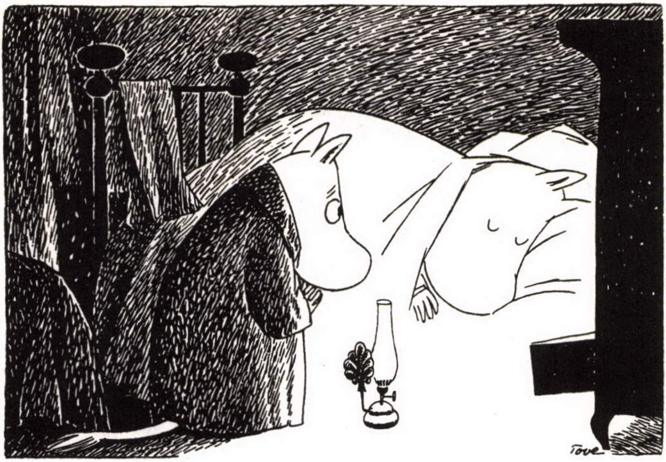
こう、ちびのミイはいいました。

というように、ムーミントロールを見つめました。
そのとたんに、目に見えないとんがりねずみが、かなしげにふえをふきはじめました。
ムーミントロールは、
「ありがとう。」
というように、顔をうなずかせました。
すると雪のうまは、子りすをもちあげて、じぶんのせなかにのせました。――もちろん、しっぽも、海水帽もいっしょです。こうやって、みんなそろって、浜べのほうへひきかえしました。
おしゃまさんは、りすくんについて詩をつくって、それを朗読しました。

子りすがいました
とてもちっちゃいりすです
りこうではなかったけれど
毛皮はとてもきれいで　あたたかでしたが
いまではつめたくなりました
すっかりつめたくなって
手足もしびれてしまいました

ますからね。そうしたら、たぶんあの女だって、子りすがふさふさした毛をしていてかわいいからって、耳のうしろをくすぐるなんてことは、しないようになると思うわ。」
　こう、ちびのミイはいいました。
「それはそうかもしれないわね。だけど、ムーミントロールのいうことだって、もっともよ。さあ、これからどうするの。」
と、おしゃまさんはいいました。
「ここにおはかをほるんだ。ここはとてもいい場所で、夏にはいっぱいマーガレットがさくんだよ。」
　こう、ムーミントロールがいうと、おしゃまさんが、かなしそうにいいました。
「だけど、ねえ、土がこちこちにこおってるじゃないの。これじゃあ、ばった一ぴき、うずめられないわ。」
　ムーミントロールは、がっかりしておしゃまさんを見つめるだけで、へんじもできませんでした。だれも、ひとこともいいません。
　そのとき、あの大きな雪のうまが、頭をかがめて、注意ぶかく子りすをかぎまわしました。それから、ほうきのしっぽをかすかにうごかして、そのガラスの目で、
（いったい、りすくんはどうしたんだね。）

いくのでした。
　ムーミントロールは、さっそく階段の下からはしごをだしてきて、たんすの上の段まで、よじのぼりました。
　そこには、いろんながらくたをいれた箱がありました。そんなよけいなものが、ときには、ぜったいに入り用になるのです。——お葬式のときの黒いリボンとか、お祝いのときの金のリボン、いろんなかぎだの、せんぬき、セメダインのチューブ、よぶんなしんちゅうのボタン、そのほかいろいろ。
　ムーミントロールが、また外へでてきたときには、しっぽに黒いリボンをむすんでいました。それからかれは、おしゃまさんのぼうしにも、小さい黒いリボンをつけてやりました。
　ところが、ちびのミイは、そっけなく黒リボンをつけるのをことわっていいました。
「あたい、もしかなしいとしたって、なにもそれを黒いリボンであらわす必要はないわ。」
「きみがかなしんでいるんなら、それでいい。だけど、かなしんじゃいないんだからなあ。」
と、ムーミントロールはいいました。
「そうよ、あたいにゃ、かなしむってことはできないの。あたいは、よろこぶか、おこるだけ。いったい、あたいがかなしんだら、それがりすさんにとって、なにかの役にたつの。たちゃしません。ところが、あたいが氷姫のことではらをたてたら、あたいはいつか、足にくいついてやり



かれは、ひきだしというひきだしをさがしました。どこからどこまで、徹底的にかきまわしました。でも、かれのほしいものは、ついに見つかりません。

とうとうかれは、ママのベッドのところへいって、ママの耳の中になにかをささやきました。ママはため息をついて、くるりとむこうをむきました。

ムーミントロールは、それでもあきらめずに、質問をくりかえしました。

とうとうママはへんじをしました――なんでもおぼえている、母親としてのふかい記憶のそこから。

「黒いリボンなら、そう……わたしのたんすの……いちばん上の段の……右がわよ。」

それからまたママは、ふかい冬眠の中におちて

た――じぶんの鼻がこわばって、しわをよせることもできなくなったのを。
「こりゃ強行軍ね。」
ちびのミイはうれしそうにいって、こおった波うちぎわを、スキップしていきます。
「もうすこしゆっくり歩けないの。お葬式なんだぜ。」
と、ムーミントロールはいいました。空気があんまりつめたくて、かれはみじかい息しかつけなかったのです。
「あんたにまゆ毛があるなんて、ちっとも知らなかったわ。もうそれがまっ白になって、顔がとってもおかしなふうになったわ。」
と、ちびのミイは、おもしろそうにいいました。
「しもができただけよ。」
と、おしゃまさんは、きびしくいいました。
「さあ、だまりなさい。あんたもわたしも、お葬式のことは、ちっとも知らないのですからね。」
こういわれて、ムーミントロールは元気がでました。かれはりすを家まではこんでいって、雪のうまのまえにそれをおきました。
それからなわばしごをつたって、あたたかい広間にはいっていきました。みんなまだねむっています。



さまの中にころがっていたときのぬくみが、まだいくらか、
その石にはのこっているようにさえ思われたのです。
「あんたは、まちがったなかまの中にはいったみたいね。」
と、ちびのミイがいいました。
ムーミントロールは、そんなミイには目もくれないで、おごそかにいいました。
「きみたちは、お葬式にくるの、こないの?」
「もちろんいきますよ。あの人は、それなりに、りっぱなりすでしたものね。」
と、おしゃまさんはいいました。
「わけても、しっぽがね。」
ちびのミイがいいました。
みんなはりすをふるい海水帽にくるむと、身をさすようなさむさの中にでていきました。
足の下で氷がミシミシいい、みんなのはく息は、白い雲のけむりになりました。たちまちムーミントロールは感じまし

つぎの日は、水あび小屋は、とてもさむかったのです。ストーブに火はもえていたけれど、たしかに、目に見えないとんがりねずみたちも、ぐったりしているふうでした。ムーミントロールが家からもってきた、コーヒーわかしのふたのうらにまで、うすく氷がはっていました。

死んだりすのことを思って、ムーミントロールは、コーヒーものみませんでした。かれはおごそかにいいました。

「ぼくの水着をだしてくれないか。おかあさんがいったけど、お葬式のときは、いつでもさむいものだって。」

「うしろをむいて、十までかぞえていなさい。」

と、おしゃまさんはいいました。

ムーミントロールはまどのほうをむいて、数をかぞえました。八つまでかぞえたとき、おしゃまさんは戸だなの戸をしめて、ムーミントロールに、かれの青い水着をさしだしました。

「おや、あんたはぼくの水着が青いのだってことを、おぼえていたのね。」

ムーミントロールは、うれしくなっていいました。そうして、すぐポケットに手をさしこんでみましたが、日よけのめがねはなくて、すながすこしばかりと、まんまるい、すべすべした、白い小石がでてきただけでした。

かれはその小石をにぎりしめました。そのまるみが、夏のたのしさを思いださせました。お日

ムーミントロールは、びっくりぎょうてんして、こういいました。

「おはかへいれるには、しっぽもつけてやらなくちゃ。だって、お葬式をしてやるんだろ、おしゃまさん。」

「さあ、死んでもまだしっぽがいるかどうか、これはむずかしい問題ね。」

と、おしゃまさんは答えました。

「おねがいだから、あの人をもう死んだものとしてあつかうのは、やめてくれないか。それじゃあ、あんまりかわいそうだもの。」

こう、ムーミントロールはいいました。

「死んだら、死んだのよ。このりすは、そのうち土になるでしょ。やがて、そのからだの上に木がはえて、あたらしいりすたちが、そのえだの上ではねまわるわ。それでもあんたは、かなしいことだと思う?」

「たぶん、そうは思わないだろうけど。」

といって、ムーミントロールは、鼻をかみました。

「でも、とにかくあしたは、うめてやろうよ。しっぽもいっしょにさ。それでこそ、ちゃんとしたお葬式じゃないか。」



んはぱっと外へとびだしていったかと思うと、たちまちはしりもどってきて、りすをテーブルの上におきました。

目に見えないとんがりねずみたちは、お湯をもってとびだしてきて、あたためたタオルでりすをくるみました。しかし、りすはその小さい手足を、かなしくこわばらせたまま、空につっぱっているだけです。ひげ一本うごかしません。

「りすはもうすっかり死んでるわよ。」

と、ちびのミイは平気でいいました。

「すくなくともかれは、死ぬまえにうつくしいものを見たのだ。」

ムーミントロールは、声をふるわせて、こういいました。

「そうかもしれない。でも、とにかくもう、そんなことはわすれちまってますよ。あたい、この人のしっぽで、かわいい上等のマフをこしらえるわ。」

こう、ちびのミイはいいました。

「そんなことはさせないぞ。」

くらくなりました。

でも、それはたちまちとおりすぎました。すこしばかりふらふらしながら、すがたの見えないとんがりねずみたちは、ちびのミイのひざからとびおりました。それからみんなは、まどのところへはしっていって、外をのぞいたのです。

氷姫(こおりひめ)は、かれたあしのそばにたっていました。せなかをまるめて、雪の上にかがみこんでいます。

「あれ、りすくんだわ。あの人、家にはいるのをわすれてしまったのね。」

と、おしゃまさんがいいました。

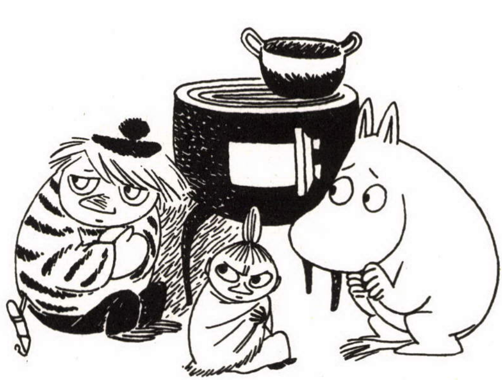
氷姫(こおりひめ)は、そのうつくしい顔をりすにむけて、かれの耳のうしろを、やたらにくすぐりました。りすは、まるでまほうにかけられたみたいに、姫(ひめ)のつめたい青い色にすんだ目の中を、じいっと見かえしました。氷姫(こおりひめ)はにっこりわらって、さらにさきへすすみました。

しかし、ばかな子りすは、すっかりからだがしびれてしまって、四本の手足を空にあげたま
ま、そこにころがりました。

「これじゃ、あんまりだわ。」

おしゃまさんは、おこったようにいって、ぼうしを耳の上までひきさげると、ドアをあけました。たちまちまっ白い雪けむりが、うずをまいて、へやの中にとびこんできました。おしゃまさ

「外を見ちゃ、だめ。」
と、おしゃまさんがいいました。
「あれ、だれかがあたいのひざの上に、はいあがってきたよ。」
と、ちびのミイが、おどろいてさけんで、スカートの上をじろじろ見ました。そのくせ、スカートの中は、からっぽでした。
「うちのとんがりねずみよ。あれたちは、こわがってるんだわ。じっとしてらっしゃい。そうしたら、またじきにでていきます。」
と、おしゃまさんはいいました。
そのとき氷姫は、水あび小屋のそばをとおりかかりました。姫がじろりとまどごしにこちらを見つめたのでしょうか、だしぬけに、氷のようにつめたいものが、へやをとおりぬけて、まっかにもえているストーブまでが、いっしゅん、さあっと



と、ちびのミイがききました。
「くると思うの。ちょっと外をのぞいてみましょうか。」
と、おしゃまさんは、しずかにいいました。
みんなは桟橋の上にでて、海のほうをながめました。夕がたの空は、すっかりみどり色になって、世界じゅうがまるで、うすいガラスでできているように見えました。
どこもかしこも、ひっそりとして、身うごきひとつするものもありません。小さい星が、かずかぎりなくまたたいて、氷の上にかげをおとしています。おそろしいほどのさむさでした。
「うん、たしかにやってくる。もう、中にはいったほうがいいわ。」
こう、おしゃまさんはいいました。
とんがりねずみも、テーブルの下で、ふえをふくのをやめました。
こおった海の遠くのほうから、氷姫は近づいてきました。姫はまるでろうそくのように、まっ白いすがたをしています。ところが、もし右のまどガラスをとおしてみると、そのすがたは赤く見えるし、左がわのまどガラスから見ると、うすみどりをしているのでした。
だしぬけにムーミントロールは、まどガラスがいたいほどつめたくなったのを感じて、おしつけていた鼻づらを、あわててひっこめました。
それからみんなは、ストーブをかこんですわって、まちました。

りながら歩いてる。そのくせ、まえには世界がどんなで、どんなくらしをしていたか、だれもきこうとしないんだ。ちびのミイでさえ、あのほんとうの世界のことを、話そうとしないんだからなあ。」

「だけど、いったいどっちの世界がほんとうだか、どうやってわかるの。おや、あの子がきたらしいわ。」

と、おしゃまさんは、まどガラスに鼻をくっつけて、つぶやきました。

ドアがバタンとあいたと思うと、ちびのミイが、ガチャンと銀のおぼんをなげこみました。

「あの帆はわるくなかったわ。でも、わたしがほんとうにいるのは、マフ（女性が手をあたためる毛皮）だわ、あんたのママのたまごいれは、どこにあなをあけてみても、つかいものにならなかった。あれはもう、宿なしのはりねずみにゆずるのも、きまりがわるいくらいになっちゃったわ。」

こう、ちびのミイはいいました。

ムーミントロールは、あなだらけになったたまごいれを見て、さびしそうにいいました。

「こうなっちまっちゃねえ。」

ちびのミイが、それをゆかの上になげだすと、たちまち目に見えないとんがりねずみが、それをまるめて、ストーブの中へほうりこんでしまいました。

「で、あの人はくるの。」

といって、話しだしました。

「この世界には、夏や秋や春にはくらす場所をもたないものが、いろいろといるのよ。みんな、とっても内気で、すこしかわりものなの。ある種の夜のけものとか、ほかの人たちとはうまくつきあっていけない人とか、だれもそんなものがいるなんて、思いもしないいきものとかね。その人たちは、一年じゅう、どこかにこっそりとかくれているの。そうして、あたりがひっそりとして、なにもかもが雪にうずまり、夜が長くなって、たいていのものが冬のねむりにおちたときになると、やっとでてくるのよ。」

「あんたは、そういう人たちのことを、よく知ってるの。」

と、ムーミントロールはききました。

「すこしはね。たとえば、流しの下の住人なんか、とてもよく知ってるわ。だけど、あの人は、だれにも知られないでくらしたいと、こうねがっているんだもの、あんたを紹介するわけにはいかないのよ。」

こう、おしゃまさんは答えました。

ムーミントロールは、テーブルの足をけとばして、ため息をつきながらいいました。

「わかったよ、わかったよ。だけど、ぼくはだれにも知られない、ひみつな生活なんて、ごめんだな。ここじゃ、みんな、まるっきりちがった、ふしぎな世界の中を、いまにもころびそうにな

く、その知らせの音なのでしょう。
水あび小屋は、ほかほかとあたたかでした。テーブルの上には、ムーミンママの青いお茶道具が、ちゃんとのっかっていました。

ムーミントロールは、とういすにこしをおろすと、

「いつ、あの人はくるの。」

とききました。

「もうじきよ。でも、心配しなくてもいいわ。」

と、おしゃまさんはいいました。

「そうさ、氷姫のことなんか心配するもんか。ぼくが気にかけているのは、ほかのれんじゅうのことですよ。」

こう、ムーミントロールはいいました。

「だって、あの人たちのことは、ぼく、なにも知らないんだものね。流しの下のやつとか、そこの戸だなにいるれんじゅうとか、それから、じいっと見つめるだけで、ひとことも口をきかないモランとかさ。」

おしゃまさんは鼻をこすりこすり、考えこんでいましたが、やがて、

「そうね、それはこういうわけなのよ。」

「いちばんこわい人なのよ。夕がたになったら、きっとくるわ――空の色が青からみどりにかわるときに、海のほうからまっすぐにくるのよ。」

「じゃあ、女の人？」

「そうよ。しかも、とてもきれいな人。だけど、もしその人の顔を見つめたら、あんたはこおりついてしまいますよ。まるでビスケットみたいに、こちこちになって、ぶったおれることさえできなくなるの。だから、今夜は外へでたらだめよ。」

こう、おしゃまさんはいうと、また屋根の上へはいもどっていきました。ムーミントロールは地下室へいって、ストーブの中に、もっと泥炭をつめこみました。それから、ねむっている家族たちの上に、もうふをなんまいもかけてやりました。

それからとけいのねじをまいておいて、外へでました。氷姫がやってきたら、つきあってみたいと思ったのです。

ムーミントロールが水あび小屋まできたときは、空はもうよほど色がうすくなって、みどり色に近づいていました。風もとろとろとねむりかけています。岸べの氷の中からは、かれたあしが身うごきもせずにつったっていました。

耳をすましてみると、ひっそりしたしずけさの中に、とてもひくく、しずかな、やわらかいハミングの声が、きこえるようでした。たぶんその音は、海がだんだん下のほうまでこおってい

「だけど、わたしのいったことをわすれてはだめよ。夕がたからあとは、外にでないこと。でたら、たいへんなことになりますよ。」

子りすはうなずきましたが、いかにも気がないふうでした。

おしゃまさんはムーミンやしきまでくると、ムーミントロールがたらしておいたなわばしごをつたって、引きまどのところまでいって、よんでみました。

ムーミントロールは、水着（みずぎ）をいれるバッグを、赤いもめん糸でかがっていました。

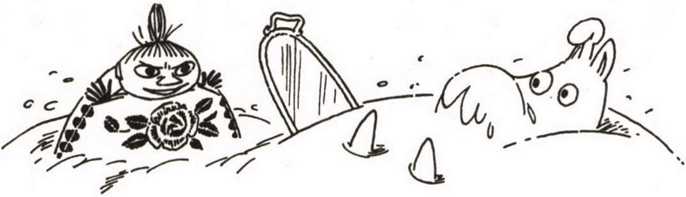
「ちょいと、今夜は氷姫（こおりひめ）さまがくるらしいことを、知らせにきたのよ。」

こう、かの女がいうと、ムーミントロールは、びっくりしていいました。

「あのまっ白い雪のうまよりも、その人はもっと大きいの。どれぐらい大きい？」



その夕がた、おしゃまさんの鼻は、氷姫がやってくるのを、かぎつけました。そして、雪のうまに川の水をかけてやってから、水あび小屋にたきぎをはこびこみました。
「きょうは家の中にいなくてはだめよ。あの人がやってくるんだから。」
こうおしゃまさんはいいました。
目に見えないとんがりねずみたちの、それをしょうちしたざわめきが、戸だなの中からきこえました。おしゃまさんは外へでていって、ほかのものたちにも用心させました。
「心配しなくてもいいわよ。わたしの足がぴくぴくふるえてきたら、わたしはちゃんと家の中にはいるわ。ミムラねえさんには、わらをなげかけておいてさ。」
こういってちびのミイは、銀のおぼんにのって、氷の上にでていきました。
おしゃまさんは、ムーミン谷のほうへ、道をとりました。とちゅうでかの女は、「すばらしいしっぽをもったりす」とであったので、いってきかせました。
「今夜は家の中にいなくてはだめですよ、氷姫さまがくるんだから。」
「そうですか。ところで、あなたはぼくがここらにおいといた、もみの実を見ませんでしたか。」
と、子りすはいいました。
「見なかったわ。」
と、おしゃまさんはいって、



と、ムーミントロールは話しました。
「わかったわ、わかったわ。それであんたは、かべに絵をはりつけだしたのね。ムーミントロール、あんたはまったく、あいかわらずね。ところで、このおぼんにろうをぬったら、もうすこしスピードがでないかしら。」
こう、たのしそうにちびのミイはいいました。
「それはおもしろい思いつきね。」
と、おしゃまさんはいいました。
「もしムーミンやしきで、なにか帆のかわりにするものを見つけることができたら、これで氷の上を、すいすいと遠くまですべっていけると思うのよ。」
こう、ちびのミイはいいました。
ムーミントロールは、ふたりの顔を見て、しばらく考えこんでいましたが、やがていいました。
「ぼくの日よけでよきゃ、いつだってかしてあげるよ。」

ところが、もうひとり、わらったものがいました。そんなわらいかたをするものは、世界にひとりしかいないはずです。
「ちびのミイだ。」
ムーミントロールは、口の中を雪でいっぱいにしながら、さけびました。かれは幸福な気持ちと期待でむちゅうになって、雪をかきわけて、おきあがりました。
そうです、そこにはちびのミイが、雪の中にすわっていました。ミイは、たまごいれのふくろに頭をさしこみ、両手をつきだすあなをあけて、それをセーターのかわりに着こんでいました。ししゅうのばらが、ミイのおなかのまん中をかざっていました。
「ちびのミイ。おまえにゃわからないだろうけれど……ぼくはとってもさびしい、へんな気持ちになっていたんだぜ……去年の夏、きみが……。」
こういって、ムーミントロールが話しだしたとき、
「だけど、いまは冬ですよ。」
こういってミイは、雪の中から、銀のおぼんをひっぱりだしながら、いいました。
「どう、すばらしいジャンプだったでしょ?」
「ぼく、目がさめちまって、それっきりねむれないでいるんだよ。ドアはこおりついているし、お日さまはきえちまったし、流しの下のやつはでてこないし……。」

かれはたちどまって、じっと耳をすましました。でも、だれひとり反対の声をあげるものはなかったのです。

ムーミントロールの中を、ある身ぶるいがとおりぬけました。かれは、

（なにかがおきるぞ。）

と感じました。そうして、はたしてなにかがおこったのです。

ずっと高くの山のてっぺんのほうから、なにかへんなものが、すべりおりてきました。それはきらきら光る雪の羽となっておちてきながら、さけびました。

「よけろっ、そこをどけっ！」

ムーミントロールは、ただあきれて、見つめているばかりでした。

そのかれをめがけて、矢のように銀のおぼんがすべってきました。その上には、なくなったたまごいれも、のっかっていました。ムーミントロールは、おどろきからさめると、こんなふうに思いました。

（これはきっとおしゃまさんが、川の水をぶっかけたんだ。だから、おぼんもたまごいれも生きてきて、はしりだしたんだ。きっともう、かえってはこないんだろうな……。）

とたんに、ドスン、とぶつかりました。ムーミントロールははねとばされて、雪の下にうずまりました。雪の下にいても、おしゃまさんのからからわらう声が、きこえてきました。

「ぼくのお日さまがでてくるまでまってろ。きみたちなんか、みんな、とんだまぬけに見えるから。」

ムーミントロールはこうさけんで、もう、ふしまわしもなにもかまわず、ありったけの声でうたいました。

そのときはぼく　ひまわりの花の上でおどろ
あたたかいすなに　はらばいになろ
まどを一日あけっぱなしにしてながめよう
花のさいてる庭（にわ）や　ブンブンいうみつばちや
青い青い空や
それからぼくの大きな大きな
オレンジ色の
お日さまを

ムーミントロールがこんなたたかいの歌をうたいおえたとき、あたりはおもくるしいほど、しいんとしずまりました。

てる、きみたちのいやらしい冬のことをね。」

こうムーミントロールは、どなりたくなるほどはらをたてながら、口の中でつぶやきました。

かれは雪をけとばしながら、よたよたと坂をのぼっていきました。なみだが、鼻づらにこおりつきました。

ところが、だしぬけにかれは、じぶんでもうたいはじめました。おしゃまさんの耳までとどいて、あいての歌をうちけしてしまうように、ありったけの大きな声で。

それはこんな歌でした。

よくおきき　お日さまをぬすんでしまった冬のやつら
暗やみにかくれて谷間をすっかり灰色にしたやつら
ぼくはまったくひとりぼっちで
ほねのしんまでうんざりしてるんだ
ふぶきはぼくをころがして　うめかせるばかり
ぼくは青いベランダや　かがやく夏の海がこいしいな
きみたち冬のなかまなんか　くそくらえ!

「まあ、すばらしい。」
と、おしゃまさんは、さもゆかいそうにいいました。
「あんたたちはいったい、あんまりいろんなものをもちすぎてるのよ。思い出の中のものや、ゆめで見るものまでさ。」
　こういってかの女は、第二節をうたいはじめました。
　ムーミントロールは、せなかをむけて、
（――あの子には、ちっともぼくの気持ちはつうじないんだな。）
と考えながら、その場をたちさりました。
　ようきなおしゃまさんの歌声が、うしろから追いかけてきました。
「すきなだけうたうがいいさ。黒い氷や、ぶきみな雪のうまや、流しの下や戸だなの中にかくれてばかりいて、ちっともでてこないへんなれんじゅうでうずまっ



わたしはおしゃま
うまはわたしがこしらえたのよ
元気のいいまっ白いうまで
夜の雪と氷の上をはしるんだわ
まっ白なおごそかなうまで
氷姫さまをせなかにのせてはしるんだわ

それからくりかえしになります。

「それはどういう意味なの。」

と、ムーミントロールはきいてみました。

「わたしたち、今夜あのうまに川の水をかけてやるのよ。そうすると、うまは夜のあいだにこおって、全身氷になってしまうの。そうすると、氷姫さまがやってきて、あれにのってはしっていって、それっきりもどってこないのよ。」

こう、おしゃまさんはいいました。

ムーミントロールは、しばらくだまっていましたが、やがて口をきりました。

「だれか、ぼくの家から、いろんなものをぬすみだしたんだよ。」

とこちらを見つめました。

　ムーミントロールは、用心ぶかくそちらへ近づいていって、

「こんばんは。」

と、声をかけました。

　よく見ると、そのうまは雪でこしらえたものでした。しっぽは、たきぎ小屋からもちだしてきたほうきだし、目玉には小さいかがみがはめこんであるのです。そのかがみの目の中には、ムーミントロール自身のすがたがうつっていました。かれはすこしこわくなって、ジャスミンのやぶのほうへまわり道をしました。

（たったひとりでも、ぼくがむかしから知っているものがいるといいんだがなあ。）

　こうムーミントロールは思いました。

（だれか、ふつうの生きもので、やっぱり目がさめて、さびしく思っているものがさ。そうしたら、いうことができるんだ――「ハロー、ひどくさむいじゃないか。雪なんて、まったくばかなものだねえ。あんたはジャスミンのやぶを見たかい。ひどいことになってるじゃないか。去年の夏のことをおぼえてる？　あのころは……。」なんてさ。）

　おしゃまさんは、橋の手すりにこしかけて、うたっていました。



でも、犯人はどんなところにいないともかぎりません。冬というものは、たぶん、すがたを見せないでこそこそやっている、気まぐれなへんな動物たちで、うずまっているのでしょうからね。

（おしゃまさんにきいてみなくちゃ。）

と、ムーミントロールは思いました。

（そりゃ、ぼくはお日さまに思い知らせてやるために、あの人がもどってくるまで、家を一歩もでないでいてやりたいさ。でも、これは重大なことだからね。）

ムーミントロールがうすぐらい外へでていくと、見たこともないまっ白いうまが一ぴき、ベランダのそばにたっていました。うまはきらきら光る目で、じいっ

おぼんが見えなくなっているのに、気がついたのです。そのおぼんは、いつでも、かがみの右手の、ちどりがけにあんだおぼんいれの中に、ちゃんとはいっていたのです。それなのに、いまはおぼんいれだけがのこっていて、かべ紙の上には、おぼんがあったしるしの、まるいしみがついているだけでした。

この銀のおぼんは、ムーミンママがとてもだいじにしている、たからものなのです。それがなくなっているのですから、ムーミントロールは、びっくりぎょうてんしてしまいました。なにしろ、これはムーミン家のたからものですから、だれにもつかわせないのです。夏至祭りのときに、ぴかぴかにみがいて、ただいちど、つかうだけなんです。

ムーミントロールは、むちゅうになって、そこらをさがしました。でも、おぼんはどこにも見えません。そればかりか、まだいろいろのものがなくなっているのがわかりました——まくらとふとん、メリケン粉とおさとう。それから、おなべが一つ。いや、ばらのもようのついた、ゆでたまごがさめないようにするたまごいれまで、なくなっているではありませんか。

ムーミントロールは、とてもふんがいしました。しかも、家のものはみんなねむっているのですから、どろぼうをさがすのは、これはぼくの責任だと感じました。

第一番には、流しの下の住人があやしいと思いました。つぎにはモランばあさんと、水あび小屋の戸だなにいる、目に見えないへんなやつがあやしいでしょう。

モランばあさんは、だれにもわからない、もの思いにしずみながら、氷の上をぶらついていま す。水あび小屋の戸だなの中では、水着のあいだに、なんだかきみのわるいやつらが、もぐりこんでいるらしい。ああいうれんじゅうを、どうしたらよいものでしょう。

ああいうれんじゅうは、ただそこにいるからいるのですが、なぜそういうものがいるのか、それはだれにもわかりません。いくら考えてみても、がっかりするだけのことでした。考えようにも、まるで手がかりがないのですもの。

ムーミントロールは、屋根うらべやで、石版画をいれた大きな紙いれを見つけました。夏らしいうつくしさにあふれた絵は、かれのあこがれをかきたてました。

花や、お日さまののぼるところをかいた絵や、すばらしい車のついた小さい馬車の絵。目のさめるような、きれいで平和な絵を見ると、じぶんがなくしてしまった世界のことが、思いだされてしかたがありませんでした。

かれはまずそれらの絵を、広間のゆかにひろげてみました。そのうちに、これをかべにはりつけたらおもしろいぞと、こう思いつきました。そこで、できるだけこのたのしいしごとが長くつづくように、ゆっくりと、ねんにはねんをいれて、一まい一まいはっていきました。ねむっているママの上には、いちばんきれいな絵を、はってあげました。

ところが、そうやって、つぎからつぎと絵をはりつけて、かがみのところまできたとき、銀の

でも、ひとつのことだけは、どうしても気になってしかたがありません。それは、おそろしいことでした――。

（お日さまは、これきりもう、のぼらないのではないだろうか。）

そうです、じっさいそれは、たしかなことのようでした。

朝がくるごとに、灰色のうすい光が、さしてはきます。でも、それがたちまちまた、長い長い冬の夜の中に、そのまますいこまれてしまって、お日さまはいつまでたっても、すがたを見せません。

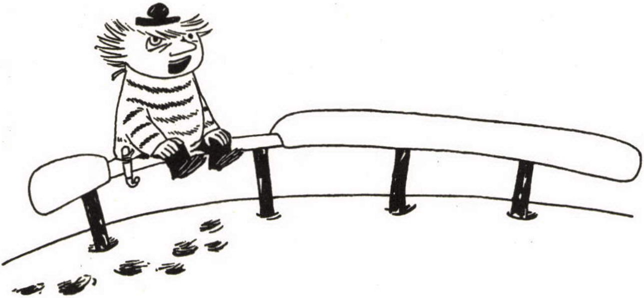
きっと、なくなってしまったのです。たぶん、お日さまは、宇宙のはしから、ころがりおちてしまったのでしょう。

ムーミントロールは、はじめのうちは、そんなことは信じたくありませんでした。だから、いつまでもいつまでも、まっていました。

まいにちかれは、浜べまでおりていくと、鼻づらを東南のほうへむけて、そこにすわってまちました。でも、なんにもおこりません。しかたなしに、かれはまた家にもどって、屋根の引きまどをしめ、広間のマントルピースの上に、ろうそくをたてならべるのでした。

流しの下の住人は、まだパンくずをたべにでてきません。でも、あいかわらずそこに住んで、ひとりでこっそりと、ひみつの生活をおくっているらしく見えました。

第3章



大きな白うま

とけいがみんなまた、うごきだしました。とけいのねじをまいてからというもの、ムーミントロールは、それほどさびしくは感じなくなりました。正確な時刻がわからなかったので、とけいはひとつひとつ、ちがった時刻にしておきました。

（こうやっておけば、ひとつはたぶん、あってるだろうさ。）

と考えたわけです。

そんなわけで、とけいたちはしきりに時をうちました。そのあいだには、目ざましもちょいちょい鳴りました。それをきいていると、ムーミントロールは、なんとなく心がおちつくのでした。

した。遠い遠い雪の山のほうで、おおかみがぶきみにほえる声がしました。

「血(ち)がこおりつくようだわ。」

くらやみの中で、顔をしかめながら、ちびのミイは、つぶやきました。

鼻(はな)をクンクンやっているうちに、ムーミン谷へいく小道がわかりました。あそこへいけば、たぶんあたたかいふとんが、ひょっとすると、あたらしいねぶくろだって、あるかもしれません。

そう思うと、ちびのミイはさっと浜(はま)べをはしりぬけて、林のなかへとびこみました。かの女はとても小さいので、足あとひとつ、雪の上にはつきませんでした。



した。あなの入り口まではっていって、寒々とした夜のけしきをながめたときには、あるよろこびを感じました。

「さあ、おまえになにもかも見せてあげましょ。」

ちびのミイは、おこったようにこうつぶやくと、切りたった岩山を、すべりおりました。

浜べは、世界のはて——だれか、そこへいったことがあるかしら——よりも、なおさびしいながめをしていました。ひくい声でぶつぶつつぶやきながら、雪が、こおった海の上に、大きなおうぎをひろげていました。お月さまがしずんでしまったので、なにもかも、まっ黒に見えました。

「かまうもんですか。ここを歩いていきましょ。」

こういってミイは、いじわるい北風の中に、スカートをひろげました。そうやって、右に左に、雪だまりをうまくよけながら、いかにもミイらしい身のこなしで、すいすいすすんでいくのでした。

水あび小屋のろうそくは、ミイが通りかかったときには、とっくにもえつきていました。ですから、とんがった小屋の屋根が、くらい夜の空にそびえているのが、見えるだけでした。これがおなじみの水あび小屋だとは、ちびのミイは、すこしも気がつきませんでした。

ちびさんは、波うちぎわにたちどまると、クンクンやって、するどい冬のにおいをかいでみま



ラックのしげみが、なつかしいみどり色のかげで、すぐさますっぽりとかれをつつんでくれるのでした。

　ちびのミイは、ほころびたねぶくろの中にもぐりこみましたが、どうにもぐあいがよくありません。夜になると風がでて、ほらあなの中まで、ピューピューふきこみました。それにボール箱は、三つにわれて、中のつめものは、ほらあなのすみからすみへ、むちゃくちゃにふきとばされていきました。

「あれ、ねえさん、たいへんよ。」

　ミイはこうさけんで、ミムラねえさんのせなかをぶちました。しかし、ミムラねえさんは、目をさましません。身うごきひとつしないのです。

「あたい、おこるわよ。いちどぐらい、じぶんのきょうだいをたすけることができないの。」

　ちびのミイは、ねぶくろをけやぶって、とびだしま

う色をけしてしまうのですからね。
やっとのことで、ムーミントロールは、みんながねむりにおちている家に、かえってきました。
かれは、家の北がわにできている大きな雪のふきだまりによじのぼって、屋根（やね）についている引きまどから、やっとこさ家の中にもぐりこみました。
家の中の空気はあたたかく、ムーミンたちのにおいが、むんむんたちこめています。かれが歩いていくにつれて、天じょうのシャンデリアが、なつかしい歌をうたってくれました。
ムーミントロールは、じぶんのベッドからかけぶとんをとってきて、おかあさんの上にかけてやりました。
おかあさんは、ねむりながら、ふかいため息（いき）をひとつついて、なにやらむにゃむにゃいいました。でも、なんていったんだか、それはわかりませんでした。それからおかあさんは、ひとりでくすくすわらって、かべのほうへ、すこしばかりころがっていきました。
（ぼくはここでも、ひとりぼっちか。それにまた、あのれんじゅうのなかまにもなれないしなあ。いったいぼくは、目がさめているのだろうか。それともゆめを見ているのだろうか。）
ムーミントロールは、こんなことを考えました。
ところが、そう思っているうちに、たちまちねむりにおちていきました。すると、夏のライ

「今夜はぼく、家へかえってねますよ。」
ムーミントロールは、つきはなすようにいいました。
「いいわ、お月さまがまだしずまないから、道はわかるでしょ。」
と、おしゃまさんはいいました。
とびらは、ひとりでにあきました。ムーミントロールは、雪のつもっている桟橋にでていきました。
「くよくよするない。とにかく、ぼくの青い水着は、あの戸だなの中にあるんだ——スープをごちそうさま。」
とびらはまたひとりでにしまりました。まわりは月の光と、ひっそりしたしずけさだけでした。
ムーミントロールは、いそいでこおった海の上を見ました。遠い水平線のあたりを、ぶかっこうな、大きなモランが、のそのそとはっていくのが、見えた気がしました。
(海岸の岩のかげにかくれて、ぼくをまちぶせているんじゃないかな。)
なんだか、そんなふうに思われるのでした。それからまた、林をぬけて家のほうへかえっていくときには、一本一本の木のかげから、あのきみわるいおばあさんが、のっそりと、はいだしてくるような気がしました。モランときたら、あらゆるあかるいものの上にすわりこんで、色とい

「ぼくたち、いつでもあそこに、ぼくたちの水着をしまっておくんだ。ママのが、いちばんおくにかかってるはずだよ。」

　おしゃまさんは、手をのばしてサンドイッチをうけとって、

「ありがとう。」

といっておいてから、ムーミントロールにいいました。

「あんた、あの戸だなをあけてはだめよ。あけないって、やくそくするわね。」

「ぼくは、どんなやくそくもしませんよ。」

　ムーミントロールは、スープざらの中に目をおとしながら、きっぱりと答えました。きゅうにかれは、発見したのです――あの戸だなをあけて、水着がまだはいっているかどうか、それをたしかめることほど、この世でたいせつなことはないのだと。

　火は気持ちよくもえて、えんとつの中でゴーゴーうなっていました。水あび小屋は、あたたかでたのしく、テーブルの下では、ふえが、しずかなしらべをかなでていました。

　目に見えない手が、からになったおさらを、そっとはこんでいきました。ろうそくはもえつきて、しんは油の湖の中に、おぼれています。いまでは、ストーブの赤い目から流れでる光と、ゆかの上になげているお月さまの赤とみどりの四角もようだけが、小屋をかすかにあかるくしているだけでした。

も、たしかじゃないのね。」
　さかなスープのさらが、用心ぶかく空中をすべってきて、ムーミントロールのまえで、テーブルにのっかりました。
「あんたのなかよしのとんがりねずみたちは、どこで空をとぶことをならったの。」
と、かれはききました。
「いや、なにもかもききただそうとするもんじゃなくてよ。あの子たちのほうでは、ひみつをまもりたいのかもしれないものね。とんがりねずみのことなんか、気にかけないこと。雪のこともね。」
　おしゃまさんは、こう答えました。
　ムーミントロールは、スープをのみました。それからへやのすみにある戸だなを見て、
「あの中に、ぼくの去年の水着がかかっているのをたしかめたら、さぞうれしいだろうな。」
と、こんなことを思いました。
　そうしたら、なにもかも見なれない、気がかりになるものばかりの中に、じぶんのよく知っている、なつかしいものが、まだのこっているわけですものね。水着は青い色で、左のポケットには、たぶん、サングラスがはいっているはずでした。
　しばらくして、かれはいいました。



どガラスに、きれいに反射しています。

「雪のことを話してくれない？　ぼくらは雪のことは、ちっとも知らないんだもの。」

　ムーミントロールは、日やけして色のさめた、パパの庭いすにこしかけて、こういってききました。

「わたしだって、知らないわ。」

と、おしゃまさんはいいました。

「雪って、つめたいと思うでしょ。だけど、雪小屋をこしらえて住むと、ずいぶんあったかいのよ。雪って、白いと思うでしょ。ところが、ときにはピンク色に見えるし、また青い色になるときもあるわ。どんなものよりやわらかいかと思うと、石よりもかたくなるしさ。なにもか

こう、おしゃまさんはいいました。

「だけど、顔くらい見せたっていいのにねえ。なぜ見せないの。」

と、ムーミントロールはききました。

「みんな、とてもはずかしがりやなもので、とうとうじぶんを見えなくしちゃったのよ。とても小さいとんがりねずみが、八ぴきも、わたしといっしょに、この家でくらしてるんだけどさ。」

と、おしゃまさんは答えました。

「ここは、うちの水あび小屋だぜ。」

と、ムーミントロールはいいました。

おしゃまさんは、まじめくさった顔をしていいました。

「あんたのいうとおりかもしれないけど、それがまちがいかもしれなくてよ。そりゃ、夏には、なるほどこの小屋は、あんたのパパのものでしょうさ。でも、冬にはこのおしゃまのものですからね。」

ストーブの上では、おなべがにえたちはじめました。ふたがもちあげられて、一本のさじが、スープをかきまわしました。もう一本のさじは、塩つぼから塩をすくって、それをスープにいれると、またすぐ、まどぎわのところにもどりました。

夜がふけるにつれて、外の寒さは、いよいよきびしくなりました。月の光が、みどりと赤のま

八角の水あび小屋の中は、あいかわらずでした——黄色い板かべにあいた、いくつかのふしあな、みどりと赤にぬったいくつかのガラスまど、せまいベンチ、水着や、すこしばかり空気のもる、ヘムルのかたちをしたうきぶくろなどをいれた戸だな。

なにもかも、夏とおんなじです。でも、へやの中のようすが、ふしぎとどこかちがっていました。

おしゃまさんは、ぼうしをぬぐと、いきなりかべにはいあがって、くぎにぼうしをかけました。

「ぼくも、こんなぼうしがほしいなあ。」

と、ムーミントロールはいいました。

「あんたにゃ、ぼうしなんかいらないわよ。あんたはいつでも、耳をうごかしさえすりゃ、それであったかくなれるんだものね。でも、手足はひえるでしょう。」

おしゃまさんが、こういったかと思うと、たちまち毛糸のくつしたがゆかの上をころがってきて、ムーミントロールのまえでとまりました。

それと同時に、へやのすみにあった、三本足の鉄のストーブに、火がつきました。テーブルの下では、だれかがしずかにふえをふきはじめました。

「あの子は、はずかしがりやなんです。だから、テーブルの下でふいているんだわ。」



「でも、いまでは雪ばっかりね。」
と、おしゃまさんは、たちどまりもしないで、そっけなくいいました。

　やがて、浜べまでおりてきました。海は、ただのっぺらぼうの、はてしもないやみでした。ふたりは、用心ぶかく、ほそいせまい桟橋を、手さぐり足さぐりでわたって、ムーミン家の水あび小屋にきました。

「ぼくはいつでも、ここから水にはいるんだ。」

　ムーミントロールはしずかにいって、氷の中からつきだしている黄色っぽいあしのあいだを、指さしました。

「ここの海は、とてもあったかいんだ。ぼくは水の下を、九かきもおよいでいけるんだぜ。」

　おしゃまさんは、水あび小屋の戸をあけて、中へはいっていくと、まるいテーブルの上に、もってきたろうそくをたてました。
このテーブルは、ずっとまえにムーミンパパが、海に流れてきたのを、ひろいあげたのです。

ます。ずっとまえの、八月の晩です。まるで氷のかたまりみたいに、つめたい灰色をして、あのおばあさんは、ライラックのしげみのかげに、すわっていました。そして、じいっとムーミントロールたちを、にらんだものでした。

なんという目つきだったでしょう。それからおばあさんは、こそこそとすがたをけしましたが、あの女がすわっていたあとには、まっ白に、しもがおりていたものです。

ムーミントロールはふと、こんな気がしました――モランが一万びきほど土にすわりこむと、それで冬がくるんじゃないかしら、って。

(そうだ、もっとおしゃまさんとなかよしになったら、このことを話しあってみよう。)

こうムーミントロールは考えました。

ふたりが谷間のほうへもどってくるころには、お月さまがのぼって、そこらは、かなりあかるくなりました。

橋のむこうがわには、ひっそりとねむりにおちたまま、ムーミンやしきがたっていました。でも、そこまでくると、おしゃまさんは、道を西へおれました。葉のおちきった果樹園の中をつっきって、近道をしようというのでした。

「去年の秋には、ここにはどっさり、りんごがなってたんだよ。」

と、ムーミントロールは、おしゃまさんのごきげんをとるようにいいました。

ロラ（北極光）のことを考えてたのよ。あれがほんとにあるのか、あるように見えるだけなのか、あんた知ってる？
ものごとってものは、みんな、とてもあいまいなものよ。まさにそのことが、わたしを安心させるんだけれどもね。」

おしゃまさんはそういうと、また雪の中にひっくりかえって、空を見あげました。空は、いまはもう、まっ黒になっていました。

ムーミントロールも、鼻をもちあげて、きらきらかがやいているオーロラをながめました。おそらく、ムーミン一族でオーロラを見たものは、ほかにはないでしょうね。オーロラは、白と青と、あかるいみどり色をして、風にふるえるカーテンのように、空に長くたれさがっていました。

「ぼく、あれはたしかにあると思うな。」

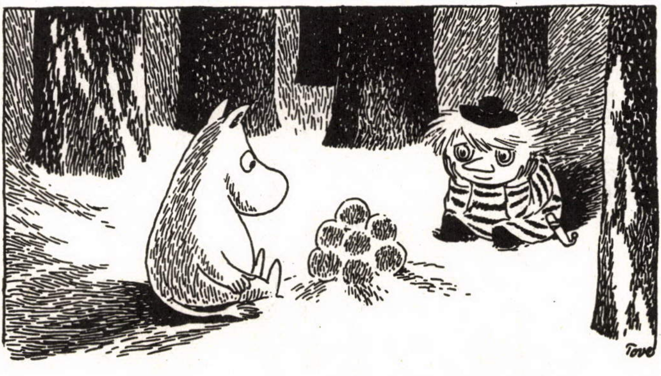
と、ムーミントロールはいいました。

おしゃまさんは、へんじをしません。だまって雪ランプのところへはっていくと、ろうそくをとりだしていいました。

「これはうちへもってかえりましょう。モランにふみつぶされるといけないから。」

ムーミントロールは、深刻な顔をして、うなずきました。モランなら、いちど見たことがあり

きれいにすんだ冬の空をながめながら、とてもかわいい声で、口ぶえをふいています。
「それはなんの歌?」
と、ムーミントロールはききました。
「じぶんでつくった歌よ。」
と、あなの中から声がしました。
「雪のランプをこしらえた、おしゃまさんの歌さ。でも、くりかえしのところは、ぜんぜんべつのことよ。」
「なるほどね。」
こういって、ムーミントロールは、雪の中にこしをおろしました。
「あんたなんかにゃ、わかりっこないわ。」
こういっておしゃまさんは、赤と白のセーターがよく見えるように、あなの中からおきあがりました。
「だって、くりかえしのところは、だれにもわからないことをうたってるんだものね。わたし、北風の国のオー



かれは、もう、声をだしてよぶこともしませんでした。だれもへんじをするものがなかったら、それこそ、おそろしいことですものね。

林の中の道は、もう見えなくなりかけていました。だから、鼻づらをぴったり地にくっつけるようにして、よたよたよろけながら、いっしょうけんめい道をいそぐだけでした。心の中では、しくしくないていました。

そのときききゅうに、あかりが見えました。とても小さいあかりでしたけれど、それでも林の中を、やさしい赤い光でみたしていたのです。

ムーミントロールは、ほっとして、すっかり元気をとりもどしました。そこで、道をすてて、こんどはその光をめざしていきました。

とうとうつきました。見ると、雪の中にまっすぐに、一本のろうそくがたててあったのです。そのまわりを、雪をまるめた玉が、かこんでいました。まるで角ざとうをつみあげてこしらえた、小さい家みたいに。

その雪玉ときたら、ムーミントロールの家の夜のランプのかさみたいに、かすかなオレンジ色をして、すきとおっていましたっけ。

そんなランプのむこうがわに、だれかが気持ちよさそうなあなをほって、その中にねっころがっていたのです。

をしたって、だれも目をさましっこないでしょうよ。

そのときかれは、ふしぎなものに目をとめました。ムーミントロールがさっきつけた足あとをよこぎって、べつの小さい足あとがついていたのです。かれはたちどまって、じいっとそれを見つめました。

なんだかわからないけれど、あるいきものが、林の中をかけていったにちがいありません。そのときからおそらく、半時間とはたっていないでしょう。

そんなに遠くまでいったはずはありません。その足あとは、ムーミン谷のほうへつづいています。そのいきものは、かれよりも、もっと小さいらしい。雪の上にも、ほんのかすかな足あとを、のこしているだけです。

ムーミントロールは、しっぽの先から耳のてっぺんまで、からだじゅうがあつくなりました。

「おうい、まってくれ。ぼくをおいてっちゃあだめだよ。」

かれはむちゅうでさけびながら、雪の中をはしりだしました。しかし、雪に足をとられて、いくどもころびそうになります。しまいには、なき声になりました。せまってきた夜のやみと、あたりのさびしさが、だしぬけに、たまらなくこわくなってきたのです。

冬ごもりから目がさめたときから、心のどこかにかくれていたおそれが、いまはじめて、まざまざと感じられたのでしょう。

ムーミントロールは、だんだん寒さを感じてきました。夕やみが谷間からはいだして、そろそろと、こおった山のてっぺんまではいあがっていきます。山のいただきの雪は、黒々とした岩山を背にして、むきだされたきばのように光っていました。白と黒——そして、なんというさびしさでしょう。

（あの山のむこうのどこかに、きっとスナフキンはいるんだ。）

と、ムーミントロールは、心の中でつぶやきました。

（そして、あの人はきっと、日なたぼっこでもしながら、オレンジの皮をむいてるんだろう。ぼくがいま、あの人にあうためにこの山をのぼっているると、あの人が知っていてくれたら、ぼくはこの山をこえていけるんだがなあ。でも、ぼくひとりだけじゃあ、とてもむこうまではいけないな。）

そこでムーミントロールは、雪の中をのろのろと、じぶんの足あとをふんでひきかえしました。

（そうだ、とけいのねじをみんなまいてやろう。そうしたら、春が、すこしははやくくるかもしれない。それから、ぼくがなにか大きなものをこわしてやったら、だれかが目をさましやしないかな。）

かれは、こんなことを思いました。でも、心の中では、よくわかっていました——そんなこと

うしても思いだせませんでした。

そのあいだに、ムーミントロールは南をめざして歩いていきましたが、いくらもいかないうちに、林の木々のあいだには、もう夕やみがしのびよってきました。

ひと足ごとに、足はずぶずぶと、雪の中にしずみました。はじめのうちはめずらしかったけれど、いまでは雪も、それほどおもしろくはありません。

林の中は、きみがわるいほどひっそりとしずまりかえっていて、ときたまドサリと、大きな雪のかたまりが、木のこずえからおちるだけでした。雪をはらいおとしたえだは、しばらくゆれています。でも、じきにまた死んだようにうごかなくなるのでした。

(世界じゅうがねむっているんだ。おきて、ねむれないでいるのは、ぼくひとりらしいぞ。きっとぼくは、くる日もくる日も、今週もつぎの週も、さまよいにさまよって、じぶんでもこんな雪のかたまりになってしまうんだ――だれにも知られないで。)

ムーミントロールは、こんなことを思いました。

ちょうどそのときに、林がきれて、目のまえに、見なれない谷がひろがりました。谷のむこうには、「おさびし山」がそびえていました。遠く南のほうまで波うちつづいて、このうえもなくさびしく見える山です。



そこでちびのミイは、ほらあなにもどってくると、まだねむっているねえさんを、ボール箱から追いだしました。

　ミイはまだ、箱ぞりなんてものは、見たことがありません。でも、かの女ははっきりと感じたのです——このボール箱には、きっとおもしろいつかいかたがあるにちがいない、と。

　子りすのほうは、そのころは林の中にすわって、

「いったいぼくの住んでいた木は、どれだったろうかな。」

と、きょろきょろとそこらの木を見まわしていました。

　でも、いくらきれいなしっぽをうごかしてみても、じぶんが住んでいた木、さっきそこからしきぶとんをさがしにでかけた木がどれだったか、ど

らとびだしました。それでも、ねえさんがまだねているので、ふたをそっとしめました。それから、雪の上にとんでいって、さわってみました。

「なるほど、おかしな気持ちがするものだこと。」

そういうなり、ミイは小さい雪玉をまるめて、りすの頭にぶっつけました。それから、ほらあなをとびだして、冬せいばつにとりかかりました。

ちびのミイがまずやったのは、こおりついたがけの上ですべって、ドスンとばかり、しりもちをついたことでした。

「へええ、おまえたちはわたしを追っぱらえるものと思ってるの。」

かの女はおどかすような声で、こういいました。

それからきゅうに、

(わたしが足を空にもちあげてひっくりかえっていたところは、どんなふうに見えただろうな。)

と想像して、しばらくのあいだ、くっくっとわらっていました。

かの女は、がけや山のスロープを、よくよくしらべて、考えこんでいましたが、きゅうに、

「そうだ、いいことを思いついたわ。」

とさけぶと、ぴょんとはねて、すべすべした氷の坂を、ジグザグにすべりおりました。

こんなことを六回もくりかえしたのです。おかげで、おなかがすっかりひえてしまいました。

たちまち、かれがつめものの中にあけたあなから、かみの毛をふりみだした、おこったような顔がつきだされて、こっちをにらんでさけびました。

「こんなことをしたのは、おまえなの。」

それが、ちびのミイだったのです。

「そうかなあ、ぼく、よく知らないんだ。」

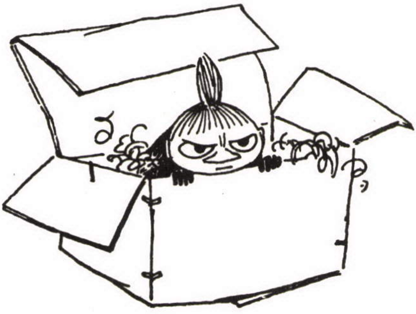
と、りすは答えました。

「いや、おまえさんがあたいをおこしちまったんだ。しかも、あたいのねどこをはんぶんたべちまったじゃないか。さあ、どうしてくれるの。」

と、ちびのミイはきびしくいいます。

ところでりすは、あんまりびっくりしたひょうしに、またもしきぶとんのことを、わすれてしまいました。

ちびのミイは、ブーンとうなって、ボール箱（ばこ）か



「これはおかしいぞ。」
と、りすはちょっとおどろいてさけびました。
「あんなボール箱は、たしか、まえにはなかったはずだ。どうもへんだぞ。それとも、ほらあなをまちがえたかかな。まさかそんなことはないと思うんだが、ぼくのまちがいかな。」
子りすはふたのすみをもちあげて、頭を箱の中にさしこんでみました。
中はあたたかくて、とてもきれいな、ふわふわしたものがつまっていました。きゅうにりすは、じぶんのしきぶとんのことを思いだしました。
「うん、これはしきぶとんにいいぞ。」
小さい、するどい歯で、そのやわらかいつめものをぐいとくわえて、ひっぱりだしにかかりました。それはひつじの毛でした。
毛のかたまりは、つぎからつぎと、でてきました。まもなく両手はいっぱいになりました。こんどは足をつかって、四本の手足を、むちゅうでうごかしました。とても幸福な、たのしい気持ちでした。
ところが、だしぬけにだれかが、じぶんの足に、かみつこうとしたではありませんか。
まるでいなびかりみたいに、さっとかれは箱からとびだしました。それから、ちょっと考えこみましたが、こわさよりも、ものずきな心のほうがつよくなって、じっと箱を見つめました。

ころだったのです。

「うん、しきぶとんだ。」

と、子りすは、ときどきつぶやきました。——なにをさがしにきたのかわすれないように。こうでもしないと、なんでもじきにわすれてしまいますものね。

子りすはあちこちととびまわって、林の中へはいっていったかと思うと、こんどは海の上にはりつめた氷の上まで、さがしにいきました。そうやって、雪の中へ鼻をつっこんで、じっと考えてみます。それから、空を見あげて頭をふると、またぴょいぴょいと、はねていきました。

やがて子りすは、山のほらあなのところにでました。そこで、ぴょんとその中にとびこみました。

ところが、とたんにもう気がちってしまって、どうしても心を集中することができなくなりました。そんなわけで、しきぶとんのことも、すっかりわすれてしまいました。

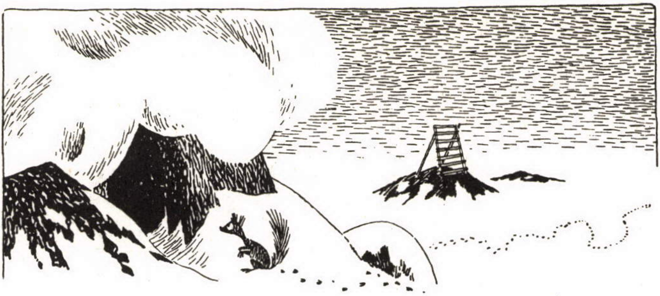
そのかわりに、そこにちょこんとしっぽをたててすわりこんで、

（みんなは、ぼくのことを、すばらしいひげのあるりす、とよんでもいいんだがな。）

なんて、考えはじめていたのです。

ほらあなの入り口にできた大きな雪の山のかげに、だれかがわらをまきちらしていました。そのわらの上に、大きなボール箱がひとつおいてあって、ふたがすこしあいていました。

第　2　章



水あび小屋のふしぎ

ずっと西のほうの、海べの近くで、一ぴきのわかいりすが、ぴょいぴょいと雪の中をはねまわっていました。それは、まったくばかな子りすで、じぶんのことを、「すばらしいしっぽをもったりす」だと、うぬぼれていました。

　しょうじきにいって、このりすは、どんなことでも、そう長くはおぼえていられません。そう、ほんのちょっと、手近にあるものを感じるだけなのです。いまかれの心をしめているものは、じぶんの巣の中のしきぶとんが、こぶだらけになって、ねごこちがわるくなってきたことでした。そこで、あたらしいのをさがしに、外へでてきたと

箱を見ました。みんな、ムーミントロールのおぼえているとおりでした。そこで、郵便箱のふたを、すこしもちあげてみましたが、手紙は一つもはいっていないで、なんにも書いてない、しなびた葉っぱが一まい、はいっているだけでした。

そのころまでには、冬のにおいにもなれてきて、べつにへんにも感じなくなりました。ジャスミンの木は、一まいも葉がなくて、ただのきたないかれえだのしげみになっています。

（これは死んでしまったんだ。ぼくがねむっているあいだに、なにもかも死んでしまったんだ。この世界は、きっと、ぼくの知らない、だれかほかのやつに、占領されちまったんだろう。きっと、モランのしわざだぞ。もう、この世界は、ムーミンのものじゃないんだ。）

こんなふうに、かれは思いました。

（さあ、どうしたらいいかな。）

ムーミントロールは、しばらくそこにたちどまって、考えこみました。だれもかれもがねむっていて、目をさましているのはじぶんひとりだけだとしたら、まったくきみがわるいことです。

そんなわけで、ムーミントロールは、橋をわたって、むこうの山のほうまで、雪の中をいってみることにしました。あとには、小さい足あとがつきました。それはとても小さい足あとでしたけれど、きっぱりとして、南のほうへまっすぐにむかっていました——林のあいだをぬけて。



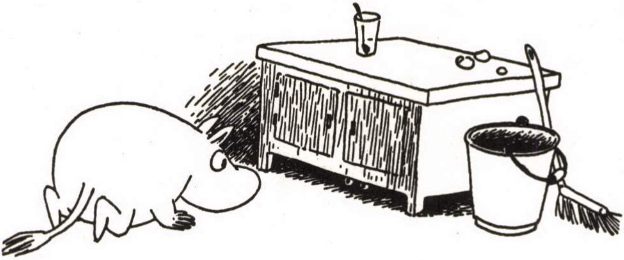
ムーミントロールは気がつかなかったけれど、このときから、かれのビロードのはだは、だんだんけばだってきたのです。それが冬の毛皮のがいとうみたいになるまでには、すこしは時間がかかるでしょう。でも、とにかくそうなりはじめたのです。なんといっても、これはありがたいことでした。

　そのあいだにも、ムーミントロールは、せっせと雪の中を歩いていきました。まもなく、川の岸にでました。ムーミンやしきの夏の庭をぬけて、いつでもサラサラと音をたてながら、いかにもたのしそうに流れていた、あのすみきった川なのです。

　ところがいまは、すっかりようすがちがっていました。まるで黒くなって、よどんでいるのです。まわりの世界とおなじく、ムーミントロールにとっては、ちっともしたしみがない感じでした。

　かれは、橋のほうをながめました。それから、郵便

はいだしました。
つめたい空気の波が、かれをつつみました。
思わず息がつまって、足をすべらせ、屋根の上をころがりだしました。
もうだめです。おそろしい、見たこともないふしぎな世界になげだされて、ムーミントロールは、耳まで雪の中にうずまったのです。
そいつは、かれのビロードのようなはだを、気持ちわるく、ちくちくとさしました。それと同時に、かれの鼻は、ふしぎなあたらしいにおいをかぎつけました。いままでにかいだ、どんなにおいよりも、ずっと深刻な、いくらかぶきみなにおいです。でも、それだけにかれは、はっきりと目がさめて、ひじょうな興味をそそられました。
谷間は、一種の灰色のうすあかりにつつまれていました。みどりというものは、どこにも見えません。白一色です。おまけに、まえにはうごいていたものも、いまはじっと静止しています。生きものの音は、ひとつもしません。角ばっていたものも、いまではみんな、まるみをおびていました。
「これがきっと、雪というものなんだ。」
ムーミントロールは、心の中でつぶやきました。
「ママから、ぼく、きいたことがある。これがたしかに、雪なんだ。」



は、ビスケットの小さなきれをゆかの上におき、ローガンベリーのシロップを、すこしばかり、そこにたらしておきました。

　それから広間にもどってくると、天じょうのシャンデリアが、ものさびしい歌で、かれをむかえました。

「用はないよ。おまえたちにゃ、あきあきしてるんだ。」

　こうムーミントロールは、手きびしく、シャンデリアにむかっていいました。

「ぼくはスナフキンにあいに南へいくんだ。」

　こういってかれは、広間にいって、戸をあけようとしました。しかし、ドアはしっかりと、こおりついていました。

　まどからまどへとはしっていって、どれか一つ、あけようとしてみましたが、まどは、のこらずこおりついています。そこで屋根うらへかけあがっていき、やっとのことで、えんとつそうじの引き戸をあけて、屋根の上に

「よくねむって、元気をなくさないこと。あたたかい春になったら、そのさいしょの日に——」と、かれの声はすこし高くなりました。それからこんどはありったけの声で、かれはうたうようにさけびました。

「ぼくはまたやってくるよ。そうだ、スナフキンがまたくるんだ、そうして、あたたかい、すばらしい春になるんだ。そしたら、ぼくらはいっしょにあそぶんだ——ここでも、あそこでも、いつもとおなじに……。」

だしぬけにムーミントロールは、調理台の下からこちらを見つめている、二つの目に気がついて、ぎょっとしました。

ムーミントロールも、じいっと見つめかえしました。台所の中は、あいかわらずもの音ひとつしません。とたんに、すうっとその二つの目が、きえてしまいました。

「まってくれ。」

ムーミントロールは、あわててさけびました。調理台のところにはっていって、いっしょうけんめいによびました。

「でておいでよ、ねえ。こわがらなくてもいいんだよ、ぼくなんにもしないもの。ねえ、もどっておいでよ……。」

しかし流しの下に住んでいるだれかは、どうしてもでてきません。そこでムーミントロール

ぼくがこないうちは、ダムつくりをはじめないでね。

スナフキン

ムーミントロールは、いくどもいくども、その手紙を読みかえしました。そうしているうちに、きゅうにおなかがすいてきました。

かれは台所へでかけました。台所も、まるで何マイルも何マイルもふかい、土の下にあるかのようでした。おまけに、ひどくがらんとして、あれはてた感じでした。食料だなも、おなじことでした。

なにひとつみつかりません。くさりかけた、にがいローガンベリーのシロップが一かんと、かさかさになったビスケットが、半つつみあっただけです。

ムーミントロールは調理台のまえにすわりこんで、むしゃむしゃやりはじめました。それから、もういちどスナフキンの手紙を読んでみました。

読みおわると、あおむけにねそべって、調理台のうらの四角な木組みを見あげていました。台所は、とてもひっそりしています。

「チェーリオ。」

と、かれは口の中でつぶやきました。

夜があけてくると、屋根の上につもった雪がとけはじめました。雪はずるずるっとすべってきて、それから決心してひさしをこえると、ドスンドスンと土にとびおりました。

いまでは、まどはすっかり雪でうずまってしまい、家の中には、ただよわい灰色の光がはいってくるだけでした。広間は、まるで土の中ふかくしずんでしまったみたいに、とてもふしぎに見えました。

ムーミントロールは耳をおったてて、長いこと、外の音に耳をすましていました。それから、あかりをつけると、用だんすのところにいって、スナフキンの春の手紙をさがしました。

手紙はいつものように、小さい海泡石のトロッコの下においてありました。それは、スナフキンが毎年十月に南へでかけるときに、いつものこしていく春の手紙と、そっくりでした。いつもの大きなまるい字で、「チェーリオ」（ごきげんよう）と書きはじめています。手紙そのものは、あんまり長くはありません。

チェーリオ。

よくねむって、元気をなくさないこと。

あたたかい春になったら、そのさいしょの日に、ぼくはまたやってくるよ。


Tove

ムーミントロールはこう思って、ふしぎと見なれないようすをしている家の中を、ひとりでぶらぶら、まわってみました。

とけいはどれもこれもとまっているし、あらゆるものが、うっすらとほこりをかぶっていました。広間のテーブルの上には、まつ葉をいれたスープいれが、十一月にたべたときのまんま、まだのっかっています。レースのおおいの中では、カットグラスのシャンデリアが、しずかにうたいながら、もえていました。

きゅうにムーミントロールは、なんだかこわくなって、青白い月の光のさしこんでいるうす暗がりの中で、たちどまりました。とてもさびしくなったのです。

「ママ、おきてよ。」

ムーミントロールはこうさけぶと、はしりもどって、ママのふとんをひっぱりました。

「世界じゅうが、どこかへいっちゃったよ。」

しかし、ムーミンママは、目をさましません。ちょっとのあいだ、かの女は夏のゆめをじゃまされて、なんだか不安な気持ちになりました。でも、どうしても目をあけることはできませんでした。

ムーミントロールは、ママのふとんの上にまるまりました。こうやって、長い冬の夜をすごしたのです。

ルムだの、風力計だの、そのほかいろんなものが。
ひっそりした、しかも、なにかをまちうけているような、ふかいしずけさでした。
ときたま、だれかがふかいため息をついて、それからまた、いっそうふかくかけぶとんの下にもぐりこみました。
お月さまの光が、ゆりいすからテーブルのほうにうつり、それからベッドのはしの、しんちゅうのとってをこえて、まっすぐに、ムーミントロールの顔をてらしました。
とたんに、いままでついぞおこったことのないことがおこりました。ムーミン一家が冬ごもりについてこのかた、いちどもおこったことのない、はじめてのことです。ムーミントロールが目をさまして、それっきり、もうねむれなくなってしまったのです。
ムーミントロールは、お月さまの光をながめ、まどガラスの上の氷の花をながめました。地下室でもえているストーブの音がきこえてきます。そんなことをしているうちに、いよいよ目がさえてしまって、どうにもなりません。
とうとう、かれはおきあがって、おかあさんのベッドのところまでいってみました。
そうっとママの耳をひっぱってみます。でも、ママは目をさましません。ただ、まるでまりみたいに、まるまりこんでしまっただけでした。
(ママでさえ目をさまさないとすれば、ほかのれんじゅうは、やってみるだけむだだな。)

ふきだまりのように見えました。
そのそばを、黒々と川がうねりまがって、流れていました。西のほうの岸は氷でとざされていましたけれど、流れがはやいために、まん中だけは、冬のあいだでもこおっていなかったのです。

でも、橋の上には、足あとひとつついていませんし、家のまわりの雪の上にも、人のふみあとは見えませんでした。

家の中はあたたかくて、とても気持ちよさそうでした。地下室のストーブの中で、泥炭の山がしずかにいぶっていたのです。ときどきお月さまが、広間のまどからさしこんで、いすにかけた冬の白いカバーや、白いレースのおおいをかけたカットグラスのシャンデリアをてらしました。

その広間には、大きなせとものストーブをかこんで、ムーミン一家のものたちが、長い冬のねむりにはいっていました。

いつでもみんなは、十一月から四月まで、冬眠するのです。なにしろ、そうするのが先祖からのならわしで、ムーミンたちは、とてもしきたりをおもんじたからです。

みんなは、おなかの中に、かれらの先祖がそうしてきたように、どっさりとまつ葉をつめこんでいました。それからまた、みんなのねどこのそばには、春になったときにいりそうなものが、すっかりそろえて、おいてありました。シャベルだの、火をつけるときにつかう虫めがねとフィ

第1章

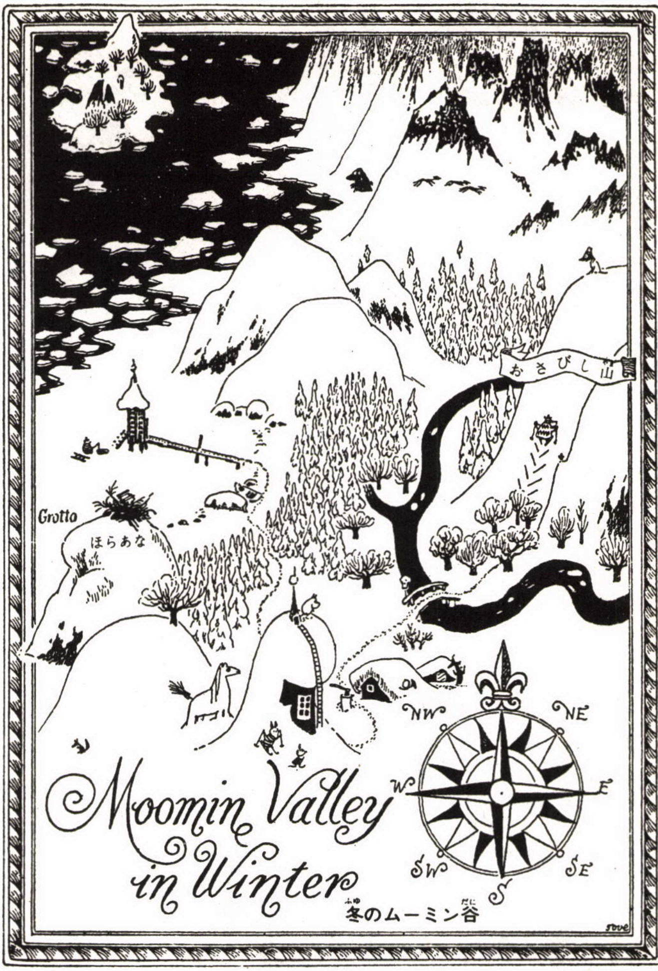


雪にうずまった家

空はほとんどまっ黒でした。でも、月の光をあびて、雪がきれいな青い色に光っていました。海は氷の下でねむっているし、すべての小さい動物たちは、みんな土のおくふかくねむって、やってくる春のことをゆめに見ていました。

でも、春はまだまだ遠かったのです。なにしろ、まだやっと新年をすこしすぎたばかりでしたから。

山のほうにむかって、谷間がゆるやかにのぼっていくあたりに、雪にうずまった一軒の家がたっています。それはとてもさびしそうなすがたをして、ちょっと見ると、まるでくずれかかった雪の


おさびし山
Grotto
ほらあな
Moomin Valley
in Winter
冬のムーミン谷
NW
NE
W
E
SW
SE
S



●ご先祖さま

ムーミンやしきの大ストーブに住む、
ムーミンのご先祖のトロール。



●サロメちゃん

きらわれもののヘムレンさんを、
心から愛するただひとりのはい虫。

●めそめそくん

じぶんがつよいおおかみのなかまだと
思っている、ひとりぼっちのいぬ。

●ヘムレンさん

陽気なヘムル。
ムーミントロールに
むりやりスキーをおしえる。



おもな登場人物

●ムーミントロール

冬眠からめざめ、ご先祖さまにあったり、スキーをヘムレンさんからならったりする。





●ちびのミイ

小さいくせに、やんちゃなむすめ。冒険心にとんでいる。

●おしゃまさん

ムーミン家の水あび小屋に、冬のあいだ住んでいる。





●子りす

雪の中をはねまわっているうちにおそろしい氷姫を見てしまう。

もくじ

第一章　雪にうずまった家……7
第二章　水あび小屋のふしぎ……19
第三章　大きな白うま……43
第四章　おかしな人たち……76
第五章　あたらしいお客たち……109
第六章　春がきた……165
解説　高橋静男……204

TROLLVINTER

Written and Illustrated

by

TOVE JANSSON

ムーミン谷の冬

トーベ＝ヤンソン／作・絵
山室　静／訳

講談社 青い鳥文庫

講談社 青い鳥文庫

ムーミン谷の冬

トーベ＝ヤンソン/作・絵
山室　静/訳